

地域警察官として初動を担当した二人の巡査がちょうど本署から現場と同じ方向にある交番に戻るところだったので、刑事一課の警部補北方良道と巡査長澤山力也の二人は便乗することにした。車は署を出て間もなく「警察署入口」という名の交差点を左折し県道を海方向にとスピードを上げた。巡査はどちらも二十四、五歳というところか。後部座席に警部補という上官がいるのが落ち着かないらしく、いつもなら気楽な話に花を咲かせているだろうにお行儀がいいことこの上ない。一方の警部補は小耳にはさんだだけでだが寡黙で通す主義らしく目を閉じたままピクリともしない。

二十八歳のバースデイを過ぎたばかりの若手澤山は交番巡査二人の様子を或る種優越感の中で見ていた。自分の予想をはるかに超えて早々に刑事課に引かれたからだ。名誉巡査的な地位の巡査長にはなっていて専務登用試験もパスしていたが、正規の昇任試験を受けて巡査部長になる目標には辿り着けていない。なぜこの四月一日付で一課に配属となったのかは彼自身知らされてはいない。正直なところ交番巡査としての澤山の評判はもう一つだった。凶体がでかく百八十五センチで体重九十キロ、面構えはヤクザも引くほどの凄味がある。暴力的なケンカやチンピラの小競り合いなどではこれが功を奏したが、一般市民からは怖くて交番に相談しに行きにくいとの声が多寄せられていたのだった。理不尽きわまりないが刑事課ならこの難点は利点に変わる。しかし小躍りするほど喜んだ澤山だが、刑事一課長の命でコンビを組まれた相手は、小柄でどう見ても風采の上がらない格好の老けた感じが強い北方警部補だった。しかも左脚を引き摺り気味に歩く。現場で容疑者を追い駆けることすらできそうもないのだ。

「ガタさん、現場の不二不動産に横付けでいいですか」

運転している巡査が急に馴れ馴れしく仇名もどきで警部補に呼びかけた。

「おい、失礼だろ上官に向かって」反射的に澤山は声を荒げた。

「青橋経由で小田原駅前までいい。栄町のあたり道狭いだろ」

本人は穏やかな声で応えているが、澤山は自分が貶められたような気がした。

「一般車なら無余地駐車でキップ切れるレベルですね、承知しました」

「現場のスナックバーは近いんだろ、そこから」

「ええ、斜め対面です、ただ看板が小さくて字も霞んでますのでお気をつけて」

「事件後も不動産屋の方は営業しているのかな？」

「ええ、第一発見者の小出明日香って女は動じないっていうのか鈍感なのか顔色一つ変えないんですよ。転倒事故死だと信じてるからですかね」

「うん、まあ、その辺はいいよ、ありがと」

会話から巡査の仇名もどきの呼びかけは敬愛の証らしいと分かったとたん、自分がした怒りの反応が点取り虫のそれだと誤解されそうで、澤山は肩をすぼめて沈黙という手段の中に逃げ込んだ。

車を降り駅前ビルの谷間を抜けて最初に見つけたのは不動産屋ではなくバーの方だった。古いビル地階の出入り口の黄色いテープは未だ撤去されていない。

「ガイ者は登山が趣味だったんですかね」階段の降り口にある看板を見て澤山が言った。

「ほう、君も事故ではなく事件性ありと踏んでるようだな」

しまったと澤山は片目を瞑った。まだ何の資料にも接していない。ただ警部補は「君も」と言った。してみると合っているのかもしれない。

「すみません、つい」と故意に言葉を濁すことで嘘つきだけは避けた。

北方は微笑すると「マウンテイングは背乗りのことだ。サルの雄なんかが交尾の際に馬乗りになる行動。女の経営者が男相手のバーの名に使っているところに本件の謎を解くカギがありそうだな」と言って澤山の肩を叩いた。

そう言えば今度の捜査方針の要はガイ者加納光江の男関係、つまり痴情の纏れがメインだった。副業の賃貸業務から生まれる深刻なトラブルの線は一応無関係であることを押さえておきたいという、言わばちよつと気になる深刻なゴミ拾いのようなもの。だから担当がたった二人だけの北方班なのだ。それなのに警部補本人は異議を唱えることもなく嫌な顔一つ見せないで指示に従っている。やはり力がない班なのだ。澤山のモチベーションはいま一つ上がらないでいる。と、ここまで想いが来て、だとすると不動産屋にこそ今日の捜査の中心をおくべきで鑑識も終わっているバーを先にするのは奇異に感じる。恐る恐る口にしてみると警部補は声を出して笑った後で肩透かしの解答をくれた。

「不二不動産は十時からだ、いま行ってもグラマラスな女事務員の小出明日香は居ない」

「警部補、もう会ってるんですか」

「いや、さっきの地域の二人から聞いた。夜は色気を売るここでホステス然として働いていたそうだから、それは見事な体なんだろうよ。あ、それと、いちいち官名で呼びかけないでガタさんでいい、捜査の現場では特に差し障りが出る。だいたいち言いたいことも言えなくなる。お偉いさんの決めつけで進む捜査会議をみれば分かるだろう」

今回初めて参加しただけだが、なるほどとうなずかされた。「では自分も君ではなく澤山！と呼び捨てでお願いします」

「ああ、そうする。入るぞ、気になることがあつたらすぐ口にしろ」と北方は、片頬で笑いながら階段下の重そうな木製のドアを開けた。

一種異様な臭いがした。栗の花が放つ匂いに似ているというスペルマのそれか、バーのママが流した血の残り香か、脂ぎった中年男が流す汗の臭いか、無遠慮に愛煙家が吐いた煙が壁や天井に遺したニコチンのせい。いずれにせよまともなバーではなかったと思わせるに充分だった。床はカーペットではなくピータイルで、カウンター席からソファ席へと右折する場所にヒト型がマーキングされている。

「マーキング近くに五十センチ大の丸い輪の跡がありますけど」

「あるな。たぶんレンタルの植木鉢だ、背の高い観葉植物あたりだ。特に鉢を体裁よく囲む枠の材質が気になる。澤山、後で小出事務員に撤去したのはいつか、自分で訊いてみる。不審な点を捉えたら自分で確かめてメモをとる、いいな」

そう言いながら北方は、分厚い木製カウンターの左端を触って精査していた。

その部分だけ面取りが施されていない。つまりカウンターの上部が直角で鋭いままなのだ。床からの高さは一メートル半。

「澤山、会議で出たガイ者の身長憶えているか」

「女にしてはでかくてメータ七十五」

「転倒する際二十五センチ下のカウンターの角に左側頭部が当たったとして致命傷になる

と思うか」

「素人判断でも擦過傷がいいとこ。ふつうなら勢いよく後頭部強打とか妙な角度で落ちて頸椎が折れるとか鋭利で硬いものが下にあって頭蓋骨陥没とか……。一体誰の見立てで事故死なんでしょうかね」

「内部の批判、詮索はいい、こつちが確認して捜査すればいいだけの話だ。だいいち疑問が残るから両面で捜査と署長は判断したわけだ」

「え？ ガタさん、一課長じゃなくて署長が、ですか」

「まあ、その辺りはいいから」と急に北方は口を閉じた。

そのとき「誰！ 中に居るのは」と女の声が入り禁止だぞ」と仁王立ちをした。

澤山がすぐ反応して「警察だ、ここは立ち入り禁止だぞ」と仁王立ちをした。

「なんだ、署員か」と女は近づいて「じゃあ刑事課ですね、わたしは生活安全課の校倉です」と一礼をした。

澤山はダウンライトの真下で女の顔を見て一瞬息を呑み絶句した、綺麗すぎると。ただ気を取り直して吐いた言葉は不味かった。性的衝撃の反作用は気負いからだった。

「職域が違うぞ、何で生安なんかが犯行現場に顔を出す」

「何だい、昨日今日専務に就いた駆け出しがナマ言ってるんじゃないよ、澤山だけか、うちの課をバカにすると後で泣きをみるよ」

「てめえだってなんだとか言ってる入ってきたらうが」

「わたしの使ったなんだと自分が吐いた生安なんかのなんかの違いも解からないって国語能力もひどいね、バカか」

「てめえヤンキーか、殴ったるか、このヤロー」

相手が自分の名前を知っていたのには驚いたが本気で腹が立ってきた。

「初の仕事で上官を殴るって正気かい、黙ってやられるわたしだと思ってるのか、バカ」

「ミナミ、もう許してやれよ」

穏やかな声にハツとして斜め後ろを見ると北方の笑顔があった。

「ガタさん、今度の部下ってバカでかいこいつですか、散々ですね」

何となくバカのところに入っている気がする。澤山は二人の関係が読めずに黙りこんだ。

「初対面の二人、なかなか面白かった。澤山、紹介しておく、校倉南巡査部長だ。刑事課は確かにからだを張って時には命も懸けるプライドの高い部署だ。しかし他部署、特に生活安全課を見下すような過ちは犯すべきじゃない。実際、この子の推理や知識、調査でどれだけ俺が救われたか。ま、いまに分るさ。今日はお互い刀は鞘に収めろ」

「すみません、相手次第でつい遠い昔のわたしが顔を出してしまっただけ」

校倉という口汚い美女が北方にはしおらしく振舞っている。その眼を見れば、北方が上官だからということだけでは説明がつかないものがあった。自分がついた北方という上官はいつたい何者なのだろうか。澤山の北方に対する不思議感は消えそうもない。

「ところでミナミ、早速大沢の指示でヘルプに来たという訳じゃないだろ、別件か」

「ええ、風営法の関係です。わたし、加納光江が風俗営業の許可申請をしに来署したとき審査の担当だったんです。今回の事件で、あ、ガタさんの前では事件でいいですよ」

北方は、笑顔で頭を掻きながらうなずいた。

「その風俗営業の責任者が俄かに不在になったわけで、同じ会社の社員小出明日香が以後は自分が担当すると言って来て諸々の変更届を出すことに。後日所定の書類を持ってくるのは彼女ですが、わたしとしてはとりあえず前回申請当時と現在の現況が同じかどうかを確認したかった。それがたまたまついであつた今日、そういうことです」

澤山は先刻の勢いはどこへやら、かしまつて校倉の話を知っている。

「そういうえばバーも株式会社不二不動産の経営という形だったな」

「ええ、代取が加納光江、小出も登記上取締役です」

「小出は宅地建物取引士の免許持ちか、ガイ者は持っていると言っているが」

「はい、ですから小出はこれから両方の営業を仕切るつもりでしょう」

「だとするとミナミ、小出はうちの捜査線上に聞き込みの相手としてではなく容疑者として入って来ることになるな」

「しかも動機たつぷりで」と校倉が紅潮した頬を膨らませるようにして唇を噛んだ。

不二不動産の店舗は確かに目立たなかった。嵌め込み透明ガラスの賃貸物件案内も十枚しか張られていないし看板も入口のガラス戸にゴチツクの霞んだ金文字で「不二不動産」と無愛想に書かれているだけだった。間口は六メートルというところだ。

小出という女は、顔こそ十人並み程度だがふくよかさや脚線美が売りのようでボディラインくっきりワンス姿で胸の谷間もあらわにして二人の刑事を事務所内に招き入れた。昼の事務職と夜のホステス衣装を着分けるのも面倒なのだろう。北方は昔流行ったボディコンというファッションを思い出した。

型どおり北方は身分証を呈示し、任意であることを明言して協力を求めたあと、澤山に質問を任せて店内をつぶさに見渡し始めた。額に入れて壁に掲げたり、方々に貼り付けてある書類を隅々までチェックするためだ。

「二、三伺います、バーの床に大きな鉢植えがあつたはずですが、いつ撤去したんですか」
初動で第一発見者として既に聴取をし、担当を決める場で捜査陣全員が共有している情報は省略しようと澤山は決めている。

「最近だよ」と言つて小出はデスクの抽斗を引き、綺麗に分類された名刺入れから迷わず一枚を取り出した。

北方は素早い手の動きを注視している。

「何月何日の何時頃と明確に、大事なことなんで」

撤去が光江の死の前ならバーで閃いた自分の仮説は消える。

「五月の一日、午後五時頃よ。業者のサンブラントが引き取つてるわ」と取り出したばかりの名刺を机上の置いて「この業者だから何なら確かめたらどう？」と言つた。

「ふん、ずいぶん用意がいいねえ」澤山は女の揶揄めいた言葉に非礼を感じて常識的に丁寧に始めた口調を一変させた。傍らで北方がフツと笑つたような気がした。

「あの店のトイレ、広くして多目的にしたのはいつだ、もちろんやった業者の名刺もすぐ出せるんだろ、お前が知らないわけがない」

このトイレの改装に気がついたのは生安課の校倉だった。指摘されてみるとほかの内装のくたびれ具合とバランスがとれない新しさだった。

「光江の死体はカウンタ傍の床だよ、トイレの改装がなぜ問題になるのさ」

「むきになるなよ、参考のためだ、はやく名刺出せよ、工務店のでも設備屋のでもいいから」

案の定、女は二枚の名刺を探すことなく取り出して「三年前の十二月だよ」と吐いた。ここで北方が短い質問をした。「小出さんの入社日はその少し前ってところかな？」

女は一瞬ピクリとした後でふてぶてしい笑みを浮かべ視線を北方に固定した。

「なんだ、やっぱりお見通しはこっちの刑事さんかい、こわいねえ警察は。もうこっちまで素っ裸とは。はいはい、もう何でもお話ししますよ」

「入社早々何を社長の光江に助言して多目的トイレに繋げただ？」

北方は机に片手を置いてゆっくりと小出の顔を覗き込んだ。

「客が少なくて苦しいってぼやくからさ、トイレでも売りにしたらって囁いただけ。あとで光江が何を思いついたかなんて興味はないよ」

「でもそのヤバイ発想が実行されたとき協力はしたろ？」

澤山はここまで問答が進んで初めて北方の攻めの意図が分かった。

「男も女も使う多目的トイレの中で酔客と光江の鉢合わせがあってもいいじゃない、他の客はみんなカウンターで前向いてるし」

「排泄するその場所で客と何をしようというんだ？」

「それは言わずもがなでしょう？ 刑事さん」

「まあ、いい。その大胆な胸の谷間の見せ方は他の客にそうとは気づかれないための手助けか。小出さんもたまには自分も中ということか？」

「こう見えてわたしは子持ちだよ、シングルマザー。まだ小学三年の男の子だ。やらないよ、そんなおつかないこと、子どもの将来を考えたらね」

「ちなみに一と月いくらだい、給与は。明細みせろとは言わないから嘘はよせよ」

「今年から総額三十五万、夜は実働時間で別支給」

澤山が「流行ってない商売でかい？ へーえ」とつぶやいた。一方の北方は眉一つ動かさない。

「ところで光江が死んだのが五月五日、小出さんは午前中の現場検証が済むとすぐに風営許可のことで生活安全課に行っているよね、そこまで急いだのはなぜだ」

「なぜってそれはないよ、責任者不在の期間は短い方が法の趣旨に合致するはず。あ、この台詞、若くて別嬪さんの係官の請け売りだからね」

澤山は生意気な校倉南の顔を思い浮かべてニヤツとした。

「これは一本とられた。よし、最後にここ一年ほどの間でいいから売買、賃貸のどっちでもクレーム処理をした相手の一覧があったら出してくれ、普通なら無理な求めだが小出さん、あんたなら記録を残していそうな気がする」

とくに最近の賃貸人はクレーム処理が苦手で仲介不動産業者に込みで一任していることが多い。その委任の範囲は広がって賃貸不動産の管理として別に報酬を決めていたりする。不払い家賃の督促などはその目的の最たるものらしいと北方は承知している。

小出はファイルから一枚を抜き取りコピーしてから北方に手渡した。その際の表情が心なしか和らいでいる。

「契約関係以外でもいい、何か気になる人物がいたら教えてくれ」

澤山にコピーを渡した後、北方は視線を戻して笑顔で訊いた。

「あの幼馴染ぐらいかな」と小出は天井を仰ぎ遠い目をした。

小出の記憶によれば、昨年末に自社が管理している伊東市内のコーポラス望海荘の住人で

三橋菊蔵という光江より年上らしい男が唯一気になった人物。がっしりした体つきで板前だと言っていた。店内での会話は聞き耳を立てていたわけではないので断片的な単語でしか憶えていない。相続登記、山梨の銀行からの督促通知、釜無川、ムカワなどが、驚いたのは応対している光江が涙を流したことで二人がハグをしたこと……。その後も何度か逢っていたようだがプライベートな逢瀬らしく二度と事務所には顔を出さなかったという。

北方は、三橋という男が賃借人なら契約書によって住所、氏名、電話番号などのデータが揃うと思ひ、ニヤリとしたあとで小出に契約書綴りを出してもらい、関連事項のメモをとった。

2

翌日、北方と澤山はJR伊東線の下り各駅停車の中に居た。いわゆる単線で観光客が多い路線だがこの日のこの時間は一両にちらほらといった程度、端のボックス席で二人だけの「密談」をするにはもってこいの条件が揃っている。澤山があらためて確認をしたが声が届きそうな範囲には一人も乗客が居なかった。

事故の可能性が高いせいで今回の加納光江の不自然死に関しては未だ捜査本部は開設されていない。安西刑事一課長の差配で動いている二人だったが、小出明日香の聞き取り結果をかいつまんで報告すると彼は、三橋の件は痴情関係を調べている他班にやらせると言い出した。驚いたことに北方は、穏やかな顔でその場を引き下がると署長室に入って大沢警視に談判してこれを覆し、安西の許には戻らずに伊東行を自班で即実行に移したのだ。澤山は目の前で眼を閉じて座っている北方の顔を改めて見詰めなおしたが、組織のルールを簡単に破れる力があるようには到底見えない。とにかくみすばらしい感じなのだ。

本当に眠っているわけがないと踏んで澤山は、実質的に班の捜査方針を決めている北方警部補に疑問点を聞いてみようと思った。二人で行動しているも同じような機会がしよっちゅうあるとは限らないからだ。

「ガタさん、ちよつといいですか」

北方の眼は瞬時に全開した。やはり考え事をしていたのに違いはない。

「賃貸系のクレーム一覧に出ている連中の捜査確認、どうします？」

そもそも自班に割り当てられた任務はそっちの方だった。

「それはまあいい、事故死と判断した安西が万一に備えて保身のために体裁を整えているだけだ、殺しの線が強くなった場合でも両面で捜査していたと上に言えるだろう」

「そんなもんなんですか」

「刑事一課長がどこの警察署でもそうだなんて言っていない、安西の性格、人柄だ」

「じゃあガタさんの見たては殺しですか」

光江の左側頭部の裂創部と血痕があったカウンターの角の高さの違いは二十五センチ。脚を滑らせたの転倒で現場の写真に見られる多くの出血はありえない。あれは他人の手で頭を掴まれ力一杯角に叩きつけられたものだ。なまじ右膝上に痣があったために左足に体重を掛け過ぎていたところで滑ったなど創られたストーリーに過ぎないと北方はみている。

「ああ、賭けてもいい」言った後ですぐに北方は頭を掻いた。警察官で賭け事はない。慌てて「澤山はどう見てるんだ？」と照れ隠しの質問を試してみた。

「殺しだと思いましたが昨日」

「じゃあ、一致してるんだからいいじゃないか」

「小出ですけど、もっと叩かないでいいんですか、何か行動が素早すぎるし疑われることを前提にしてそうされないように必死。そんな印象なんですけど」

「あの女は嫉妬や短絡的な怒りでリスクを冒すタイプじゃないよ、彼女は光江が殺されたのを機に光江が営業上会社内に積み上げてきた汚物を一気に浄化処理しようと思命になっているだけだ。そういう意味じゃまともなインテリだよ、容疑者から外していい」

確かに澤山の言う通り警察が再度自分を取り調べ、何を不審に思うかを想定し、現場検証後にあれこれ完璧を期そうとしたことは事実のようだが、自分が殺していないから出来ることだ。小出は光江の汚れ営業のお陰で月々普通以上の収入を得ていたが、いなくなったらなれば善後策を講じ、安全を図からなければならぬのだ。と、ここまで北方が解くと、澤山は真つ当な返しをしてきた。

「でもガイ者の相続人が出てくると会社を変えたくても自由にできなくなりますよね」

「その通りだがあの女に正規の相続人がいるとは思えないし、たとえどこかにいて相続開始を知ったとしても名乗り出てくるとも思えない。第一小出が光江の遺産を狙うのではなくて会社を継ぎたいというだけだとすれば相続人の有無は問題にならない」

「調べなくていいですか」一応この表現には気を遣った。

「うむ、これから出てくるはずの謎に集中しよう」

「何か掴んだんですか、大きなウラがあるって」

「いや、勘だけだな」

北方は、昨今の犯罪捜査というものが一番嫌っている言葉を使った。しかし勘を排除したら暗い水底にある犯罪の本体を手繰り寄せることすら出来ないのではないのか。過去の犯罪事例を念頭に実際目の前にある事件に対して類似していると無理にでも当てはめて捜査方針を決める。上官はつまり数多くの予断の束に頼っているだけではないのか。それは時として現場刑事の勘よりも危険なものではないか。第一未曾有の犯罪には全く手が出ないことになる。「勘は大切に、証拠は確実に」北方はそう思っている。

「あ、着きましたね、伊東駅」

澤山がニコツとして立ち上がった。何が嬉しかったのかは想像に難くない。ただ、首都圏直近の観光地伊豆半島から見る相模湾の景色は見逃した。若干悔いが残ったが帰途楽しめればいいかと、澤山はすぐに思い直した。

三橋菊蔵が住む望海荘は大原町にあった。市役所が近くにある。駅から路線バスで百七十円の距離なのですぐに辿り着けた。建物は一階に二軒、二階に二軒でほぼ真四角でそれぞれが別々の出入り口を持っている。目的の二〇二号室の前に立つと二人は同時にため息をついた。郵便受けが配達された諸々でいっぱい溜まっていたからだ。

澤山は齢五十という年配の北方をドアから遠ざけ緊張気味にノックを繰り返した。小出から三橋の体格を知らされている。容疑者として動き出した以上、万一抵抗目的で飛び出されたときのことを警戒したのだ。中からの反応は無い。北方は携帯を取り出して予め登録しておいた番号で電話を入れた。これも無反応だった。

「ここまで来て留守かよ」と澤山が頭を掻いた。

「しかもだいぶ前からだな」

北方はそう言うのと束になっっている郵便物をまとめて引き出した。

「ガタさん、それ不味くないですか」

「真似はするなよ。心配するな、信書開披はしない、差出人を見るだけだ」

「それでもプライバシーに触れるんですけど…」

「おお、良く知ってるな、安心した」そう言いながらも北方の行為は止まらない。それどころか普通の封筒ではなく中型の四角い封筒の裏を見ながら澤山に「メモしてくれ」と袋を手渡して命じ、さらに手際よく信書の束を郵便受けに戻し始めた。郵便物のほとんどは商売の居酒屋に関係するDMだった。

そのときだった。隣室二〇一のドアが開いた。

「ちょっとあなたたち何をしてるの？ 警察呼ぶわよ」顔だけを出した婦人の眉間に縦皺が走っている。

「こちらはその警察の者です、お騒がせしてすみません。人探しの参考人として三橋さんに用があつてきたんですが、長い間お留守なんですかねえ」

ほとんど状態を復旧させ穏やかな声で答えたので、婦人は安心したのか外に出てきた。

「もう半月以上じゃないかしら。奥さんと娘さんを見かけなくなつたのがさらにその前ね、もちろんうちへの声掛けなんてないわよ、どっちも気付いたらそうなつてたつて感じ」

澤山がメモをし終えて封書を元の場所に押し込みながら「ご家族ってどんな感じだったんですか」と大雑把な質問をした。これは妙に映るだろう行為をばかす効果がある。北方は好ましい方向で解釈をした。

「旦那さんを見てくれは怖いんですけど大人しい人、奥さんも娘さんも挨拶はきちんとしてくれるし作り過ぎたお料理をお裾分けと言つて持つてきてくれたり、これがまた美味しくて、隣人としては最高の部類に入ります」

「ありがとうございます。それで教えて欲しいんですが、寿町って市内のどの辺ですかね、ここからどう行つたら辿り着けますかね、じつは小田原から来ているものですから」

澤山にメモを命じた封書の差出人で文芸誌『碧海波』発行人岸本健一の住所地だった。

婦人は前の道路を見下ろした後で「車じゃないのね、そうね、ここで細かいこと言うより、とりあえず伊東駅行きの路線バスで、いでゆ橋というバスストップ降りて、その先の橋を渡つて、スクランブル交差点を渡りキネマ通りに入つてからどこかのお店で聞いてください、とにかく駅から近いところなの。はい、ごくろうさまです」と早口で言うのとドアの中に入つてしまった。

『近くの道は女に訊け、遠くの道は男に訊け』は鉄則だが、はて寿町はどちらに該当するか、北方は癖なのか、また頭を搔いた。

夫人の助言通りにして寿町内に入り、さらに通行人に訪ねて岸本の住むコーポラスに着いた。四〇二なので二人して見上げたが、澤山が「何だか面倒な相手のような気がしますね」とつぶやいたので北方は「どんなに凄い奴が出て来ても君なら大丈夫だろう」と笑つて返した。「文芸関係って要するに物書きでしょ、苦手だな」と澤山の弱気は止まらない。

ブザーを押すとすぐに「どなた？」の声とともにドアが開いた。大都会では不用心の部類に入るが地方都市では違うらしい。

「警察のものです」と求められる前に澤山は身分証を見せた。

「時間かかりますか、もうすぐ人が訪ねてくるので誤解されても困るから」とドアを半分以上開けてくれる気配は無い。澤山の子感はずれたようだ。

「すぐ終わります。三橋菊蔵さんは文芸誌の仲間ですよ、行方をご存知ないですか」
「行方ってどういうことですか」

「いま直接お宅に行ったんですが一家全員がお留守で、中でも菊蔵さんは半月以上前から
んだそうです。それで郵便物で岸本さんの住所を頼りに」

「事情は解かりましたが、なぜ彼を追ってるんです？」

「それはちょっと」と澤山はほぼルール通りに言葉を濁した。

岸本は無精髭に覆われた顔を突き出して「旧態依然だな、そういうところ。警察が知らな
いものを僕が知ってるわけがない。お帰りください」とドアを引いた。

反射的な動きだったのだが澤山の左足が伸び、靴でドアが閉まるのを止める形になった。

「この足は何ですか！」岸本が怒鳴った。

「最新の碧海波一部購入させてください」

澤山が弁解する前に北方が予想外の言葉を挟んだ。

「おや、急に懐柔策ですか？」理由は不明だが岸本の警察嫌いは根深いらしい。

「いえ、私も小田原で同人誌に投稿しているものだから」

「ほう、それは奇遇ですね、一部五百円です、いま持ってきます」

澤山は岸本が奥へ入る前にそっと足先を引いた。もう二度とドアは開かないかと思った
のだが、岸本はすぐに戻って文芸誌を北方に差し出した。

「三橋さんの作品も載っていますか？」

「ええ、釜無川河畔での初恋が原体験の短編で小説のつもりで書いたみたいですけど、どち
らかというと同想ですね、文章の巧拙を超えて胸に染みるものがあります」

北方は価格ちよūdの硬貨を澤山の後ろから差し出しながら「帰りの車内で早速拝読しま
す、楽しみです」と言い、雑誌の表紙を上げ上げと見詰めている。

岸本は代金を受け取るために否応なしにドアの外に出ることになった。

澤山は旨い手だなあと感心したと同時にこれは経験の差だなと自分を慰めた。

「僕のも載ってますから宜しければ読んでください、僕は本名で推理小説を書いています」

「三橋さんはペンネームですか」

「ええ、加納菊三です、音で聞くと名前の方は本名というオチがあります、僕の勝手な想像
ですけど加納の方は初恋の相手の姓ではないかと。ロマンチックでしょ、彼は」

澤山はうっかり唾を嚙下した。胸の中で何かが動いたのだ。北方の様子を見たが笑顔のま
ま変化は無い。もしかしたら自分だけの感覚なのかもしれない。そう思った。

「実は今回、小田原の栄町で起こった事件について協力をしてもらうために来たんです。大
勢いたお客さんの一人なんですが三橋さんが知り合いのようなので。すみませんね、突然に
お訪ねして。あ、それでこれ私の名刺です、彼のこと何か情報がありましたら是非連絡を
お願いします」

北方は聞き取りを締めようとしていた。加納光江と三橋の関係を感じ取ったからこそ敢え
て事件に関するヒントを提供したらしいと澤山は踏んだのだが。

「分かりました。会員の行方不明ですから、僕の問題でもありますし、ハイ」

揃ってお辞儀をしている二人を見ながら、やっと相手が軟化したのになぜもつと押さない
のかと澤山は内心不満に思った。

偶然栄町のバーで北方たちと逢った翌々日は代休日。校倉南は小田原板橋地区の自宅に居た。母親は南が高校生の時に他界し、以後はずっと父親の次郎と二人で暮らしている。その彼も既に六十一歳、もともとの生業は八百屋で母親存命中は閉鎖された隣の店舗を借りて狭いながらも近隣の子等に柔道を教えていた。ただ、時代の流れで小売りは流行らずに廃業、借賃不払いで道場も閉鎖することに。悪いことは続くもので、五十五歳のとき脳梗塞を発症して左半身麻痺となり三カ月ほどの入院となった。私大法学部を二十二で卒業し法曹をめざしていた南はその時点で父子二人の日々の暮しのために目標を捨て去った。新卒というリスクルートメリットを失っていた南に父親を通じて助言をくれたのはかつて柔道場の生徒だった現職の警察官だった。曰く本俸が比較的良い、諸手当がきちんとしている。賞与は年二回最低でも各回本俸相当額は出る。年十四回給料がでるようなもの、退職手当がしっかりしている、昇任は試験によって警視までが可能で上に行けば当然収入は増える。何のことは無い、南は正義感でも使命感でもなく言わば銭勘定で警察官の道を選んだのだ。その後二年以上の実務経験を経て昇任試験に合格し巡査部長となり、生活安全専務員試験を経て本署の内勤になっている。次に目指しているのは警部補だ。時々南は自虐的にこう思う、私は生活安全課ではなく生活安定化の職員かもしれない。

「親父、久しぶりに一緒に呑むか」

茶の間に坐ってテレビを視ている次郎が「おい、まだ日が高いぞ」と笑った。

南は下げた一升瓶を膳の上に下ろすと「それがひとときわ美味いんじやなかつたの」とスカート姿のまま胡坐をかいた。

「嫁に行けない二十九の娘に乾杯するか」次郎も茶飲み茶碗をぐいと突き出して応じた。

「言ったわね、こんな親父がついていて、しかも高校じゃヤンキーだのジュジャ馬だの陰口をきかれてた女に縁談なんか無いよ、心配するな、ずっとそばに居るから」

「ばあか、ずっとそばに居るから心配なんだよ」

「確かに三十まであと少し、若干凹むか」と親が使っていた御飯茶碗に酒を注いだ。

「おい、まだ飯粒がついてるぞ、それ」

「いいじゃん親子なんだから」

ここは南、少し演出をした。俺が娘の幸せの邪魔をしていると、日々そう思っているらしい父親の言動がなんとも哀しいからだ。正直に言えば一人ぐらい男がいた方がいい年齢だ。しかしそれが前面に出れば確実に男は引く。署内でも粗野な女で通るようにふるまっている。仕事を人一倍こなすように心しているのも同じ理由だ。どちらかと言うと、髪もとかさず風呂にも入らず臭くなつて男避けをしているのと何ら変わらない。そんなことを思っていたら、だらしなく目が潤んできた。隠す意味で一気飲みを試してみた。

「南、お前ももっと飲め」次郎が横にきて酒瓶を持ち上げた。

「ちよつとキツチンでツマミになりそうなもの探してくる。注いどいて」その間に溜まってきた涙を落としたのだった。

缶詰の秋刀魚のかば焼きを小皿に載せて戻ると次郎が珍しく正座をしていた。

「何なの、親父。かしこまるほど立派な酒の肴じゃないよ」

「まあ、座れ。いい機会だから伝えておく、お前を嫁に欲しいという男がいる、一と月ほど前に話があった」

「冗談に乗るほどまだ酔ってないけど」

「お前も知ってる佐々木貴仁君だ、三十四歳になる」

「警察官になれとアドバイスしてくれたって人のこと？　どんな人？」

「なんだ、お前忘れたのか、道場でよく乱取り稽古の相手をしてくれた子だぞ」

「ああ、小学生の頃ね、タカちゃんかあ中学二年で黒帯になってた子、四つも年上だからわたし投げられてばかりだったなあ、でも受け身とりやすくって痛いと思ったことなかった。で、いまだんな人になってるの」

南は話によっては考えてみようと思ったのだが、父親の話を聞いて熱くなりかけた想いは急激に冷めた。柔道のお兄さんと慕ったタカちゃんは、東大の法学部を卒業後警察畑に入り現在は県警本部の警視になっているというのだ。巡査から警視総監に至るまで警察官の階級、官名は九段階になっている。そのうち昇任試験で獲得できるのは警視までで警視正以上になるには別途の条件があると以前から南は聞かされている。警察官僚に特段の優位性を持っているのが東大法卒という学歴であることも。佐々木貴仁はその可能性の中にいる。それら上位の官にいる人にはそれ相応の伴侶が求められるはずだ。少なくとも自分がそこにいないことは間違いない。父親が、縁談が来た段階ですぐ娘に話さなかった理由もきつとそんな気持ちだったからだ。そう思った。

「釣り合わぬは不縁の始まりとかなんとかいうやつだよ、ありえない」

南はそう言いながら茶碗酒を干した。

「その通りだが彼はうちの事情もお前の性格もヤンチャな過去も全て知っていたのことだぞ、これ以上の相手はいない」

「もし会ったらありがとうってタカお兄さんに云うよ、でもイヤ、ありのままの自分で暮らせる相手が好いから」

「そう言うと思っただけだ：まだ飲めるか？」

一升瓶を指差しながら次郎は空いている手指で鼻をこすった。

「うん。泣くなよ、親父、まだまだ独りであるからさ」

無理に作った笑顔が引きつり気味の南だった。

3

同じころ北方と澤山は市内にある近藤司法書士事務所の中に居た。不二不動産のクレーム歴の中にその名があったことが発端で、訪問は北方が決めた。一覧にはたかだか十数件しかなかった。澤山はほとんどをアポ電話で相手の立腹具合を推し量ることで済ませている。要するに殺人に関係するほどの内容ではなかったのだ。ではなぜ近藤にだけは会おうとしたのか。事務員小出の供述の中に相続登記という司法書士に繋がる単語があったからだという。澤山はもう逐一先輩刑事の言動について疑念を抱くようなことはなかった。むしろ「なぜ？」の部分はタイミングを凶ったうえで教えを乞うことが大事だと気づいたのだ。例えば伊東で岸本宅を訪ねた際、態度を軟化させただけで突っ込んだ質問を重ねずに彼の後日の連絡に賭けたのかについて帰りの電車内で確認している。

北方は、推理小説を書くという岸本に同人仲間の三橋を追っている理由のヒントを与えればきつと自ら調べ始めると踏んだという。そのヒントとは「小田原の栄町」と「三橋さんが知り合いのよう」の二つだけだ。もし調べて推理を働かせ自分なりの解答を得たとしたらき

つと警察を出し抜いた快感に浸り、それを客観化するためにも連絡を寄越すだろうというその場の思いつきだった。強く押し込むだけが聴取の仕方ではないというこららしい。

椅子に座って待つこと二十分、高齡の近藤司法書士は迷惑気な顔をしながら奥から出てきた。髪は白銀、顎髭も色は同じで作務衣のようなものを身に付けている。依頼人が来てもこの格好なのだろうかと澤山は一瞬大仰に口を開けた。

近藤は立ち上がるようにした二人を掌で押さえながら「アポ電を入れたのはお前だろ。のっけから取り調べ口調でものを言うのは止めたがいい、不愉快だった」と目を剥いた。

「失礼をしたようでご容赦を」と澤山より先に頭を下げたのは先輩の北方だった。しかしただ下げたわけではなく何か言おうとした近藤を早速の要件を口にして黙らせた。「先生は不二不動産に抗議をなされたことがあるようですが、この事務所が賃貸物件と何か？」

「いや、店舗付き住宅のような構えだが一応自宅だ。電話でこっちの刑事が名前を出した三橋某を連れて相談に来た光江に文句を言っただけの話だ、抗議とかクレームといった大げさなものじゃない。こうして刑事二人で聞き取りをするレベルの情報じゃない」

「相続問題の相談か何かで職務範囲ではないという理由ですか、だから迷惑だ」と

「今や町の身近な弁護士とまで言われている資格だ、そういうことではなくて、不動産取引士でも容易に解ることで俺の時間を潰させるなど光江を叱ったんだ」

北方はここで前かがみの上体をゆっくりと起こして背筋をピンとさせた。

「登記についてですね？」

「ああ、戸建ての土地についてだったが、相続人になっていたことを知らないうちに、つまり相続人本人の承認も委任も無いのに他人が勝手に所有権登記をしてしまう、そんなことが出来るのかというのだ。要は三橋が所有権者として現に登記されていたが、どうしたらいいのかと泣かんばかりにして相談に来たという訳だ」

「そんなバカな」と澤山がつぶやいた。

「おう、新米刑事さんだって知ってるよな」近藤が相好を崩した。

「で？ 先生は何と答えられたのですか」北方の眼はなぜか逆に鋭くなっている。

「そんなもの無効だ、放っておけ。どうせ誰かのいたずらか役所のミスってところだ」

「なるほど、一つ確認ですが、その日三橋は問題の登記簿謄本か何かを持ってきましたか」

「いや、三橋も光江も手ぶらで来た、うちはお子さま相談室じゃない」

北方は澤山の顔を見て腰を浮かせた、帰ろうという意味だ。

「先生、ご多用のところ失礼しました」

「いや、俺こそこの刑事さんに失礼をした」言いながら片頬が笑っている。

澤山は仕方なしに一礼をした。心の声は「何を言いやがる、糞ジジイが」だった。

「あ、先生は加納光江とは長いお付き合いで？」

「ああ、親しげだったかな、呼び捨てで下の名前は。逆にお聞きしようかな？ お二人は酒も女もお嫌いですか」

「あははは、これは深い。ではこれで」と澤山を先に外に出してから振り返り、近藤に深々と頭を下げた。

澤山は、辞去の挨拶すら嫌だろうと北方が氣遣ってくれたことが嬉しかった。歩き出してすぐにお礼の言葉を口にしてはいる。これに対する北方の一言が傑作だった。

「基本的にクソ野郎だな、あいつは。生意気に宮本武蔵の巖流島を気取りやがって」

伊東で岸本宅を訪れてから三日目の午前十時頃、北方と澤山は出掛ける支度をしていた。すると傍に寄って来た刑事一課長の安西が微妙な笑みを浮かべて二人の顔を交互に見たあとで言った。

「ガタさん、不動産賃貸の関係で何か出たのかね、事件だと思いつける証が」

意気込んで何か言おうとした澤山を制して北方は「いやまだですが」と応じた。

「見込み違いは誰にでもある、早く結論を署長に報告してくれば加納光江の件は終止符を打てるんだがねえ、ま、ガタさんも署長に直談判した手前、若干意地も恥もあるんだろうが。しつかり頼みましたよ！」

離れていく安西の肩がまるで椿三十郎のように揺れ動いている。

「澤山」と北方は声を落として「何も言うな、誰にも言うな。現時点で口にすれば他の班に持っていかれて適当に潰されて終わってしまう」

「はい」澤山もようやく一課長の性格を把握したようで大きくうなずいた。

「ガタさん、ご指名の電話です、プッシュ二番で出てください、岸本健一とフルネームで名乗ってます」

北方は手を挙げて応えると射るような眼をして受話器を手にした。「はい、代わりました北方です、先日はありがとうございました」

澤山は北方の予測や判断に信頼をおき始めていた。自分も経験を積んで一日も早くその域に近づきたいという想いも生まれている。生真面目な仕事をしそうな雰囲気なのにかなりいい加減に見えるところとか、捜査目的のために組織のルールをちよくちよく無視するところもお気に入りだ。自分の上梓としてピツタリだと、そう思うのだった。

「で、いま小田原駅のどこに？ ああ、北にある新幹線出口の。すぐ行きますから近くのおーブンな喫茶でコーヒーでも飲んでいてください」

受話器を置くとすぐに澤山の背中を押して「名探偵に会えるぞ、行こう」と言った。

合流するとすぐにスタンド喫茶の横の広いロビーのような空間の隅に陣取った。注文したものを手にして店の外で飲む人のためのテーブルや椅子があるのだ。

岸本はすぐにスポーツ新聞記事のコピーを一枚テーブルの上に出した。

「北方さんが言った栄町の事件はこれですよね、加納光江の不審死。一般紙は事故死も視野だから扱いが小さいので緩いスポーツ紙の記事の方を切り取り保存していました。この記事では事件性が強いとまで書いてます、恥ずかしいほど大きな文字で」

説明によると、推理小説のネタ探して自分が興味をもった記事をスクラップブックにため続けているという。既に五年分はあるらしい。

北方は話の切り出しの旨さに感心した。聞き手が質問という形でのめり込む可能性が高いのだ。

「岸本さんの見立ては事件、というわけですね、保存したんですから」

「ええ」と答えて続けた話は聞くだけでは複雑すぎて記憶があいまいになりそうなので北方はストップをかけ、「録音していいですか？」と片手拝みを試みさせた。もちろん了解が出るのは解かっている。彼の自尊心をより高めるからだ。

「澤山、あるよな。録音しながら重要な固有名詞はメモしてくれ」

一部重複を覚悟で再開した岸本の話の内容は、少し長くなるがこうだ。

実は岸本、同人誌の主幹であると同時に社会保険労務士の有資格者でもあった。そのことを知っている三橋菊蔵は二月八日に相談の電話を寄越した。ちょうど『碧海波』の編集にかかっていてイライラしていたので要領を得ない三橋の話の全貌が掴み切れない。要点は芹澤満という被相続人を知らないし、なぜ自分がその人の相続人になったのかも解からない。十二月の八日に山梨の銀行から、九月二日に死亡した芹澤満から相続した債務についての通知が届いたので小田原の不動産屋や司法書士に教えてもらおうとしたが相手にしてくれない。年が明けて二月五日に地元伊東で法律相談会があったので参加して女弁護士に訊いてみたが説明が難しく解からない。結局三月八日までに相続放棄をするしかないので山梨の戸籍役場で芹澤満の除籍謄本を取れで終わりにされた。どうしたらいいのか途方に暮れて岸本のことを思い出したという。岸本は、弁護士の言う通りに被相続人の謄本を取るのと同時に、それだけでは兄弟姉妹が解からないので満の親の除籍謄本もとること、その親の名前が分からなくても相続人であることを伝えて請求すれば大丈夫だと答えた。郵送する際には銀行から来た通知をコピーして入れ、少し多めの金額の郵便小為替と返信用の切手と封筒を同封すれば良いとも教えた。返送されてきた謄本類を見ないと三橋から実の母親を経て芹澤満に至る身分関係はわからないとも付け加えた。

ここまで一気にしゃべってから岸本は「ここに言う不動産屋は加納光江ですよ。それでお見せしたいものが。あ、ちよつと録音止めましょう、ロスが出ます」

澤山は録音機のスイッチ切って、語られた司法書士は近藤誠之助だと心の中で確認をした。さて次は何が出てくるのか。期待感が増してきた。

「これ見てください」岸本が出した記事のコピーは衝撃的だった。

『北杜市武川町の惨殺事件被害者は一人住まいの芹澤伸子七〇歳』全国紙にも記載があったが、扱いが小さいのでまたスポーツ紙のものにしたという。

「事件の日付は四月二十日です」

「三橋が伊東の自宅から消えたところと一致するな、確かに」

「僕は普段の三橋さんを知ってますから信じたくない、いや想像もしたくないんですが、所番地、芹澤という姓、凶器の包丁、にわかな失踪という四点を結び付けてみると可能性を否定できなくなりましたね、こうして嫌いな警察に申し出ているという訳です、いやお二人がということではなく昔警察に容疑者として理不尽な取り調べを受けたというトラウマがあります」

「そうでしたか」と北方は理不尽なら当然だと、とりあえず頭を下げた。

「ここまでで何か気になりませんか、この先が」と岸本は北方の顔を覗き込んだ。

惨殺記事を見てすぐに危機感を抱いたのだが、そのまま一般人に披歴していいものかどうか。北方は迷いをあらわにした。

「感じていても立場上言えませんよね、僕が言ったほうが無難かも」

この人の自己顕示欲は半端じゃないと、澤山は恐れ入って肩をすぼめた。

「どうぞ、お願いします」北方はもとから面子などに拘らない。

「連続殺人の始まりかも」

北方は小さくうなずき、ぼそつと付け加えた、「あなたも彼のターゲットかも」と。

「ガタさん」と澤山は仰天したが、言われた岸本は冷静な顔でうなずいた。

「ただ、現段階では推測だらけで確たるものは何も無く物語にすぎません、ですよね？」

「その通りです。ですからめったな発言は控えてください。ご協力を是非」

「僕は文芸仲間として彼の犯行を止めたいだけです。直接彼を見つけることは警察にお任せですが、僕は奥さんと娘さんを知っているのので探して話せます。彼女たちに承諾してもらって無人の彼の自宅に入ることも出来ます」

その通りで、現段階では逮捕状はもちろん家宅搜索令状もとれないし、指名手配もできない。部下の請求を許可する権限がある警部以上の上司にその必要性、正当性を疎明してみせるものが何一つ無いのだ。つまりただの勘に過ぎない。出来ることと言えば現実に起きた事件の背景を詳細に調べることだけだ。そうすれば誰と誰が狙われるかも自然と明らかになる。北方はその限りで捜査の限界に直面していた。

「いいよ、ガタさんの申出内容の全てを許可します」

四十歳とまだ若さに溢れる警視の大沢渉署長は、署長室で北方の概略説明を聞いただけで山梨行きの捜査を快諾した。

「結果がカラでしたら自分なりの責任はとらせていただきます」

安西課長の言いそうなことを念頭において署長に迷惑が掛からないようにとの配慮のつもりだった。

「職務上の信念に基づいた捜査の結果が事件解決に直接効果がなかったとしていちいち責任を取らされたとしたら刑事の積極的な捜査は期待できなくなる。そんな必要は無いから存分に本件を掘り下げて欲しい」相変わらず署長の姿勢は凜としていた。

北方が出張捜査で許可を求めたのは、現地捜査の方針のほかでは個人所有の車の使用が一つ。これは一般にはパトカーとは解からない所謂面パトを使ったとしても山梨の警察関係者にはナンバープレートだけですぐに解り、上層部はともかく現場の地域警察官の不審を買うという理由だ。休暇をとった上で私用として現地に行くという手もありそうだが、これは次の申出内容に因って不可だ。生活安全課所属の校倉南巡查部長を伴わせたいという以上、あくまでも公務でなくてはならない。この点も署長は「生安は署内では法律のエキスパート集団だ、しかも彼女は家庭の事情で諦めたとはいえ、法曹になろうとして勉強をしていた人だ。それに、かつてガタさんと南のコンビで良い捜査結果が出なかったことは一度も無いからな」と微笑を交えてうなずいてくれたのだった。

「安西と生活安全課長には僕から伝えておきます。それと、北杜市の警察署長に一言ご挨拶もしておきます、あくまでも小田原で起きた事件の動機捜査だとしてね。ガタさんのことだ、きつと乗り込むでしょうから」

「毎度ですみません」

「ところで澤山に見込みはあるかね、安西じゃなくて僕がガタさん付きの警官として交番勤務からこっちへ引き上げたんで責任を感じていてね」

辞去しようとするや突然人物評を求められた。

「ありがとうございます、自分の体力のことも配慮していただいた結果だとすぐ気づきました」

「確かにそれもあります、ガタイといい身体能力といい、学生時代に柔道三段にもなっている点も加点材料だったので」

「正直なところ来たばかりなので、まだ的確には評価出ませんが、いい警察官、いい刑事に

育つ可能性は十分に感じ取れます。直情径行型ですが、根が正しく真っ直ぐなので毎日の中でスポンジが水を吸い取るように学び取っているように思います」

「ああ見えていいとこの坊ちゃまで育っていてね」

「まるで署長ですね…、あ、これは失礼」

「いやいや、その通りで私も乳母日傘で育った一人、現場研修でガタさんに付いて毎日が目パチクリの脚ガタガタでねえ」

北方は照れながら頭を掻いた。

「熟慮慎重タイプ of 幹部も当然必要だが、署内で直情径行型の人間の比率が下がれば、それに比例して機動力が落ちていく。最近はそんな気がしてね」

北方警部補はその両面を兼ね備えた稀有な存在だと、大沢の北方に対する高評価は不動のものだった。

4

北方班の捜査は一日ごとに前に進んでいた。傍目にはそう見えないというだけだ。岸本から情報を得た翌日の早朝五時、北方、澤山、校倉南の三人が署の前に集合した。車は澤山所有のハイブリット車で、運転手役も当然のように彼に決まった。ナビゲーターもどきの役で校倉が助手席に乗り込む。このときの澤山の嬉しいやら哀しいやらの複雑な表情に北方は思わず噴き出した。外見は恋人とのドライブもどきだからだろう。

甲府までの経路の選択は澤山に任せた。甲府からの立寄り先順序は校倉に委ねて、場所自体への経路はカーナビ任せで足りるはずだ。果たして一日で資料収集が終わるかどうか。「やってみればわかる」北方はいつもの結論に達した。

澤山は、箱根・御殿場経由を採らずに小田原厚木自動車道で厚木、次いで東名海老名、圏央道に入って八王子で中央自動車道というコースを選んだ。あとは韭崎ICまで一直線だ。北方は出発するやいなや校倉に録音機を手渡した。「校倉、イヤホンで何回か聴いてみて、その後でこの新聞記事のコピーに目を通してくれ」と栄町の加納光江と武川町の芹澤伸子の殺人事件報道に関する資料も追加した。

車内の静寂が三十分は続いたろうか。澤山が堪えきれずに口を開いた。

「セイアンと略すみたいだけど、生活安全課ってどんな部署なんだ？」

「刑事課、交通課、警備課の職域以外で警察署に持ち込まれる全ての案件に対処する部署」「めっちゃくちや範圍が広いのか、反対に狭いのか、どっちだ」

「うーん、個人的感想で言うと広すぎる。だから刑事課を除けば署内のうちの課に対する評価はゼネラリストかつスペシャリストの集団」

「何で刑事課を除くんだ？」

「あはっ、訊くかそれを。自分たちが一番偉いと信じていて、こっちをバカにするから」

「じゃ何でここに居る、その刑事課の犯罪捜査だぞ」

「ガタさんは別。生安課のことを敬愛してくれるから」

「澤山、校倉は今日、署長の指示で来てくれている、事前に言わなくて悪かった」

ここは北方、澤山の気持ちに配慮をした。上からの命令なのだと言えば納得いこうがいくまいが従うのが警察官だ。自分が頼りないから北方が他部署の人間を頼んだと思いきゃ彼が凹むのは目に見えている。そんな彼も一日校倉と一緒に行動していればきっと彼女を認め

るに違いない。北方はそう信じている。

「校倉だったらとりあえず捜査の端緒をどこにおく？」と北方は話を仕事に戻した。澤山を氣遣って南と下の名前で呼ばないようにしたが、どうにも硬くなっていけない。

「三橋は被相続人の芹澤満を知らず自分がなぜ相続人なのか不明だと言うのですから、そこから入りましょう、スポーツ紙で殺人の被害者芹澤伸子の住所を載せていますから、この人も相続人という仮説を立てて、この住居表示で芹澤姓の所有者という戸建ての登記を見つけます。地番や家屋番号は不明ですが、これは警察の具体的な事件の捜査ですから普通の謄本申請のルールを満たさなくても職員に協力を求める形になると思います。そもそも登記は利害関係者の取引の安全に資するための公示制度ですから職員が拒む確率は低いです。係なら調査は容易だと思いますので芹澤満の名が出てきたらその段階で先々の疎明資料として当該土地建物の謄本を取ればいいわけです、たぶんですが芹澤満が相続したときの被相続人つまり亡き父親の名前もそこで判ると思います。その他の情報も得られると思いますが、三橋の次なる犯罪を未然に防ぐためという今回の趣旨からすると、戸籍役場に場を移して、その二人の除籍謄本を調べれば今回の法定相続人がずらりと出てきます。その中にすでに死亡した人がいれば代襲相続人の名を求めて当該故人の除籍謄本をとるようになります。もちろん県外に出ている人がいて今日中に全て把握は出来ないかもしれませんが、この流れで三橋菊蔵がなぜ芹澤満の相続人になったのかは解明できます。本当は、手取り早く相続放棄をした法定相続人の特定と彼らの現住所が調べられる方法は別にあります。亡くなった芹澤満の住所だけの情報で管轄家庭裁判所に行って、芹澤満の死亡日時から現在までに相続放棄申述書を出して受理された相続人全員のデータを出してもらうことです。申述書には住所証明書つまり住民票抄本を添付する必要がありますから。ただ、いまは何の令状も無いですから山梨県警以外の警察官がふらりと行って家裁がすんなり応じてくれるかは大いに疑問です。伸子殺害の刑事事件としてはこちらの県警が調査済み、一方満の相続だけでいけばこれは民事で、民事不介入は警察の鉄則ですしね」

よくもまあ少しの資料から長々と語れるものだなと、運転中の澤山が驚いた様子で校倉の顔をちらりと見た。

「そういうことだな、捜査本部も立っていないし、いまは担当刑事だけの隠密捜査に近い。じれったいが亀の歩みで我慢だ。土地建物の管轄登記所がどこだか分かるか」北方が大きくうなずいたあとで言った。

「甲府地方事務局の韮崎支局です、たぶんですが」

「澤山、とりあえずそこに頼む、何時ごろに着けるかな」

「はい」とカーナビを操作し始める澤山。

北方は、一日で肝心なことが分かれば澤山と一緒に車で校倉を帰そうと思っていた。二日目が必要な時は公共交通機関を使って自分だけが捜査を続けようと決めている。

「五時出発の効果で中央道に乗っかるのが速そうですね、登録所が開くまで待つ時間がたつぶりってところでしよう。朝ごはん、余裕です」

ここは三人揃って笑った。この日初めての和んだ空気だった。

「だけど芹澤家の遺産を三橋って苗字、何だろうな」初めて澤山が疑問を口にした。

「氏の変更は結婚や養子縁組でも起こるわよ、女性ではなく男性の氏の方が変わる婚姻の仕方もあるしね」

「自分のルーツをたどるのも容易じゃないな、自分の頭ではおそらく無理」

「だから三橋菊蔵も困惑したんだろうよ」

「ガタさん、自分は謙遜して言ったつもりなんですけど」

「ねえ、朝ごはん食べられるところって現地の近くにあるのかな」

突然校倉が空腹を感じたらしい。この日初めて直接澤山に質問をした。

「双葉サービスエリアだな、かなりでかいから何でも揃ってると思う」

「今日はおごるよ、何でもオーケーだ」北方が上機嫌で言った。

「ガタさん、太っ腹あ！ あ、そうだがガタさん、何で今日は校倉なの？ いつもミナミって呼ぶのに調子狂うわ、わたしも北方警部補って呼びかけなくちゃいけないみたいで」

北方は部下の突然の突っ込みに思わず笑った。和やかな雰囲気になった以上、確かに要らぬ配慮かも知れないと。

「じゃ、ミナミ、いつも通りでいいよ」

「そうなる自分だけ澤山ですか？ ずいぶん距離を置かれてるなあ」

「たくさんのちからなり、確かにガタイ大きいけど」

「ミナミ、何それ」口にしてから澤山は慌てて掌で口を塞いだ。

校倉は笑顔で「澤山の読みはタクサンだし力也の読みはチカラナリでしょ」と応じた。

呼び捨てでもいいという対応と受け取れるので澤山の顔が思わずほころびた。実は初対面での不良もどきの言葉遣いには若干幻滅していたが、校倉の顔やスタイルには惚れ惚れしていたのだ。

「分かった、リキヤにしよう。刑事には瞬間的に相方を呼ぶ必要がある場面が多い。四文字より三文字の方がいいんだ。ミナミとリキヤか、何となく漫才コンビみたいだが」

澤山が大声で笑った。

不満げに北方を睨んだ校倉の顔も笑いを無理に抑え込んだという風情だった。

一行は双葉SAで遅めの朝食を摂り、葦崎ICで中央自動車道を出て釜無川河畔と言ってもよさそうなところにある葦崎支局に辿り着いた。開場してすぐ調査依頼をする形だが、かえってその方が職員にとっては協力しやすい時間帯かもしれない。

三人は揃って警察官である証を呈示し、北方が小田原中央警察署刑事一課警部補北方良道の名刺を差し出した。奥から男性の職員が来て一緒に相談コーナー側に移動、校倉が欲しい情報内容を説明する役目を担った。

「お話の趣旨は分かりました。では何ったことをもとに調べまして全部証明の形でお持ちしまするので、それをもとに丁度逆になりますが一応所定の交付申請書を受付に出してください」

「証書の購入の方は私が私的に、となります」と北方が告げた。

「しかるべく」と応じて職員が奥に戻るのを見て、北方は証書売り捌きコーナーに立った。

「ミナミ、公費じゃないのか？」澤山が小声で訊いた。

「それはこの出張の成果次第にする気かもガタさん。それともレシートが欲しいのかも。郵送でも電子でも申請できるからここに直接来た証に」

「ほんとにミナミはあちこちと考えるのが得意だな」

「そんな褒め方しかできないの？ もてないぞ、そんなじゃあ」

「おおきなお世話だ」

北方が戻って間もなく、「校倉さん、こちらへどうぞ」と先ほどの男性が言った。

「私が説明役だったからだわ」と駆け寄ると、土地と建物双方で芹澤満もその前の所有者芹澤豊三も、さらには三橋菊蔵の名も確認できた。

「この三橋菊蔵本人が今次の相続人になったことも知らず、当然登記申請もしていないと言っているのですが」全部読む前に、急かれるようにして訊いた。自分の背中が北方や澤山が立っているのを感じているからかもしれない。

「そうでしょね、それは代位による保存登記だからです」

「あ。債権者代位、民法四百二十三条……」

「ええ、よくご存じですね、債権者が債務者の財産を保全する目的のためのものです、きつと債権者が代位権を行使した段階ですでに被相続人の死亡から三カ月経っていたのでしょ、形の上では既に三橋さんは法定単純承認」

「ということは、この登記があっても、自己のために相続が開始したことを知ったときから三カ月以内であればまだ相続放棄が出来る。放棄すれば初めから相続人でなかったものとして法的に扱われる」

「はい、そうしていればこの保存登記は実体を失いますね」

「そうなれば被相続人に万一多額の負債があったとしてもマイナスの遺産として引き継ぐこともない。いえ、なかったと過去形でいうべきですね、もう確定している」

「相続開始を知っていて放棄期限を徒過すれば包括承継ですからね。もつともこの遺産の土地建物の抵当権が実行されて全て弁済できれば実害はないでしょうが」

校倉は悲痛な顔で「ガタさん」と後ろを振り返った。

北方は「うむ」と返した後、職員に「ありがとうございます」と礼をした。

「校倉、このデータで正規の申請書を頼む」と言うと、職員に向かい大事なことを訊いた。「今の土地建物に住んでいた者の除籍謄本をとるんですが、所轄の戸籍役場はどこになりますか？ 武川町役場なのか、市町村合併後の北杜市役所なのか」

「霧島君、武川町住人の管轄戸籍役場は今も町役場がいいよな」

「ええ。市役所でも町役場でもとれますよお」と常の受付担当と思しき若い女子職員がゆつたりした口調で答えた。

北方は一瞬澤山の顔を見た後、女性にも「どうも」と頭を下げた。

「どっちにします？」と澤山が言うと校倉が「武川町ってどんなところなのか見ておきませんか」と提案し、北方が「確かに」と応えて町役場に決まった。

武川は「たけかわ」ではなく「むかわ」と読む。かつては北巨摩郡武川村だったが、いまは北杜市武川町だ。町役場は韭崎から国道二十号線を北上し牧原交差点で左折して間もなくの処に位置している。

北方班は役場に捜査協力を要請して芹澤豊三と芹澤満の除籍謄本をとってから、行動方針を図るために一旦車の傍に戻った。駐車場に他の車は一台も無い。寿司に使うための米として名高いという武川米の産地で役場の近くにも稲田は多い。役場前の道は、登山客が中央線日野春駅で降り徒歩で甲斐駒ヶ岳に向かう道としても知られている。故郷の小田原も箱根山を背後にし、早川という清流も近く、さらに相模湾という海にも面していてどちらかと言うと地方色豊かなところだが、この地の長閑さに比べれば大都会だと北方は深呼吸を何度も繰り返した。空気がうまいのだ。

「ミナミ、これで何をどう整理したら三橋菊蔵と芹澤伸子の事件が繋がるわけ？」
澤山はボンネットに並べた書類を指して校倉に顔を寄せた。

「ちよつと近いよ、リキヤ、離れて。だいたい見下ろすな、でかいからってそれだけじゃ偉くないんだから」そう言って澤山をいじりながら「リキヤにも理解できるように？」と首をひねった。

「リキヤ、車で待っている間にファミレスなんか探してなかったか？」

「さすがにお見通しですね、この道を通っ直ぐ行って釜無川を越え須玉に向かえばあります。十分ちよつとで着くと思います」

「そこに入ろう、昼飯には早いから喫茶程度で。俺も少し考えを整理したい」

校倉がすぐに書類をまとめて真っ先に車に乗り込んだ。同じ気持ちだったらしい。
ファミレスで三人が選んだ席は最も奥にあるボックスだった。

A 四判の大きさの紙に芹澤家の系統図のように整理した校倉が澤山に「これならいいでしょ。現時点で亡くなっている人の名前の下の数字はいま生きていたらという年齢だからね、それとバツ印は相続放棄済みと推定される人」と子供に教えるような口調で言った。
芹澤満の相続視点での校倉の一覧図はこうなっている。

被相続人 亡芹澤満(七七)武川町山高 注※各人とも除籍時の所在

配偶相続人 ×亡芹澤伸子(七〇)武川町山高

血族相続人

第一順位直系尊属 子 長男 ×芹澤喜八郎(四五)横浜市金沢区釜利谷町に新戸籍

子 長女 ×芹澤佐和子(四一)横須賀市追浜町に新戸籍

第二順位直系尊属 父 亡芹澤豊三(一〇四)武川町山高 注※相続開始前に死亡

母 亡芹澤キヨ(一〇〇)武川町山高 注※同左

第三順位兄弟姉妹 兄 ×芹澤富美雄(八一)中巨摩郡昭和町に新戸籍

妹 亡芹澤和代(七五)韭崎市本町に新戸籍

代襲相続人 注※相続開始前の故人で法定相続人は和代のみ。

故に代位で、三橋菊蔵と当初並んで所有権保存登記されていた柳田美緒は和代の子

校倉は二人がメモを見終わった頃合いをみてため息をついた。

「ドロドロしたものがあさりそうな一族ね、満が死んで生存中の妻子がこぞって相続放棄だもの」

「豊三の謄本によれば和代は三沢幸三と婚姻して韭崎の夫の戸籍に入ったわけだね」役場が比較的近いので澤山がホツとした顔で言うのと北方が、「そこで終わるかなあ？」と応じた。

「和代が韭崎でその夫の子として菊三を産んでいけばいいけどね」

「女の発想だな、おそろしい。あ、ミナミ、いまは二人とも死んでいる人だけど、伸子と和代の法的扱いの違いが少し分かり難いんだ」

「伸子は満の妻なので他の血族相続人がどうであろうと常に推定相続人なの、でも満の死後相続放棄したのでその時点で初めから相続人でなかったとされて、その後で殺された。だから殺害自体はこの相続には何の関係もない。和代は満の妹で血族では三位の順番なんだけど、血族順位一位の二人の子が放棄、二位は父母だけど相続開始前に既に死亡していない。」

先順位が誰もいなくなったので三位の登場となるんだけど兄富美雄は放棄、和子は相続開始前に死亡しているからこの順位も不在。でも法律に依りここで和子の子二人が代襲相続人として当然に表に出てくるわけ。当然にというのは誰の主張もまたないでという意味ね。ところが柳田美穂は、三橋同様相続開始を知らなかったけれど、銀行からの通知を見て期限内早々に放棄してしまった。ということ。三橋菊蔵だけが満の相続人として残ることに。ちょっと重複する説明するんだけど、リキヤ、これでいい？」

「あ、ああ、サンキュー」

「ミナミ、ここから近い方から先にしよう」北方は今日中にといいことに拘った。帰れば安西が悪しき動機で出張の収穫を確認に来るし借りている校倉のこともある。

「葦崎は目の前の道を真っ直ぐ南下で近いです」と澤山。

「ガタさん、葦崎の次はどこにします？」校倉が一人遅れて注文したパフェを手にした。

「北杜市の管轄警察署。リキヤ、またカーナビで頼む」

「伸子の事件にメスを入れるんですか、もめませんか？ 県警違いで」

校倉が心配そうな顔をした。生活安全課でも北方の捜査手法はリスキーだと評判だからだ。結果が常にいいので、肯定派もかなりいるにはいる。

彼が有名なには別の理由がある。生安課のアイドル的婦警の校倉を一日とか二日とか借り切って刑事課にもっていく唯一の刑事だからだ。しかしそれも彼女が役立てば課の評価自体が署内で上がる。それが表立って抗議をしない所以のものだ。

「いや、大沢署長からあちらのトップに電話を入れてもらってる。あくまでも加納光江殺しの動機捜査としてしか動かない。但しミナミ、あっちから伸子事件について詳しく話したくなるのを嫌がったりはしないから安心しろ」

「そっち狙いですか、すごいなあ」澤山の反応はいつもながら初々しい。

葦崎市役所とった三沢幸三の謄本で確認できたのは和代が三沢との間の子菊三を産んだこととその後離婚をしたこと、それと待婚期間の制限があるので再婚前に一旦単独の新戸籍で東京都墨田区墨田に編成したことだけ。種違いの美緒を産んでいるので再婚はしてると思う。その前後の実際の詳細は墨田区役所から除籍謄本をとるか、電話照会をしながらは分からない。市役所の外での校倉の解説は続く。「ガタさん、伊東市役所で三橋の奥さんの謄本をとっても繋がるかもしれませんよ。妻の氏三橋を名乗る婚姻だとすると、相手の菊三の婚姻前の氏が三沢であれば繋がるし、母親和代が三沢との離婚で復氏して子の氏も芹澤に変更していれば直接芹澤菊蔵という名で謄本に出てきて繋がります」

「分かった、とってみよう。そういえば例の岸本、三橋の妻子の居場所に見当がついているような口ぶりだったな」

「北杜中央警察署ですね、長坂です、日野春駅前道を北に真っ直ぐ行く道です」

「じゃ、警察署に向かおう。途中で昼飯だな、山梨名物のほうとう料理でも喰うか？」

中央警察署の駐車場で車から降りると、八ヶ岳が近いというだけあって頬を撫でる風が何とも涼やかで新鮮だった。

中に入ると右側のカウンターから先の一面に座って執務していた婦警が五人、一斉にこちらを注目した。北方自身は中肉中背だが、なにしろ澤山も校倉が若くて長身、見栄えがいいのだから当然かもしれない。

「小田原中央署から来ました私北方と、こちらは澤山並びに校倉です」と挨拶をすると、一人が「一ノ瀬さん呼んで」とすぐに後ろの婦警に命じ、「署長からうかがっています。担当の警部補が来ますので少しお待ちください」と笑顔をつくった。

案内されたのは近くにあった聴取室と思しき部屋だった。椅子が三脚しかない。来るはずの警官の座る椅子が無いと要らぬ心配をしていたところへ、折り畳み椅子持参で小太りの男性が入ってきた。

もらった名刺の一ノ瀬正義の字を見て「いかにものお名前です」と北方は微笑んだ。

四、五分自己紹介やら何やら談笑した後で北方は慎重に来訪目的を口にした。

「じつはうちの管内のスナックバーで女性店主が異状死体で発見され事故と事件の両面捜査に入ましてね、私どもは事件の担当というわけです。その捜査対象の数人の中に武川町出身の男がいます、このスポーツ紙の」と報道記事コピーを出してから続けた。「事件が四月二十日ですから既に解決済みかとも思いますが、こちらも藁をもつかむ思いですから参考までにお話を伺えればとこちらへ」

すると一ノ瀬係長は開いていた部屋のドアを閉めてから苦笑いをした。

「実は流しの犯行ということで捜査方針は固定化したんですが、先がまだ」

頭を掻いたあとの彼の話をまとめればこうなる。芹澤伸子の夫満が昨年の九月に亡くなった相続人の間で話し合いがつかなかったことは周囲の一致した見方だったが、結局妻子と共に相続を放棄してどうやら代襲相続で決まりが着いた。登記もある。普通は遺産を獲得したくてもめるのだが、本件は負債が多いと予測されるところから遺産から逃げたいという騒ぎなので少し毛色が違う。ところが債権者で土地建物の一番抵当権者のN農協や二番抵当権者の地元信金からの債務残額合計と遺産の鑑定評価額を比較するとプラスの遺産の方が若干多い。つまりマイナス遺産は消せる。もつともこれは競売価格など結果を見ないと保証の限りではない。耕作していた田圃は既に許可を得て農協組合員の農家に売却しているので借りているにすぎない。

「動機で絞り切れる容疑者が無いので流しの犯行という線ですが事件は未解決です」

「ひとつ伺っていいですか」と校倉が小さく手をあげた。

「どうぞ、なんでも」

「流しだとして現場で無くなったものは何でしょう」

「それが預貯金の通帳、キャッシュカード、印鑑、十万ほど入っていた財布など全て抽斗の中に残っていました。もつとも家で実際に現金として持っていた総額は知りようがありませんが。物色した跡がないので殺害そのものが目的だと思えます」

「その新聞記事には包丁が凶器とありますが、一種類の包丁創だったんですか、いえ、小田原の容疑者の中に板前がいるものですから」ここは校倉、捜査の欠点探しではないと強調したかった。

「出刃包丁と柳刃包丁の二種類でした」

「ありがとうございます」で校倉は質問を終えた。

北方は、詳細に写真を含めて殺人現場の資料も見なかったが自制した。合同捜査本部どころか所属警察署の捜査本部も開設されていない段階だからだ。ここでの収穫は現地警察が伸子殺害の容疑者すら掴んでいないことを確認できたことだけでいい。校倉の質問で係長の加納光江事件への興味は繋げられたと捉え、頃合いと見たのか「係長、参考になりました。万

「一こちらの事件と何らかのつながりが出ましたら一ノ瀬さん宛てご連絡差し上げますので宜しく願います」とゆっくり立ち上がった。

「お宮入りは嫌ですからこちらも頑張ります。それにしても若いイケメンと美女を連れて羨ましいことですね、北方警部補」

「はい、助さん格さんです、わたしはご隠居」

ここで全員が弾けるようにして笑った。

5

「ガタさん、一人で大丈夫かなあ、じゃなくて何でまた一人で行くかなあ」

甲府駅近くのビジネスホテルT・INN前で北方を降ろし、校倉を隣にして中央自動車道にはいったところで澤山が口を尖らせた。

「たぶん明日の休み一日を利用して芹澤富美雄を探して会うつもりじゃないかな」

「他課の警部補の休みを何でミナミが知ってるんだ？」

「うちの課は地獄耳だよ。私を貸し出すのが一日なのか二日なのか知るために調べたのに決まってるじゃない。もう一点、推測だけど今日ずっと、とりあえず自分で払うと言いつけたから。それとわたしへの配慮と生活安全課への気遣い。わたしを連れ歩くのを一日だけにす、しかも遅くとも十八時までには署に帰りたいって、そんなところかな」と校倉はボソツと言ってから両の掌を頭の上にのせた。少し寂しい感じがしたのだ。

「じゃ、お前のために置いて行かれたのか、自分は。とぼっちりだな」

「お前はないだろ、上官をつかまえて。邪魔ならここで降ろしてホテルへ引き返せよ」

「バカ、自動車道だぞ」

「手を挙げて立ってるだけで誰かが止まって乗せてくれるよ、いい女だから！」

「そんなアブナイ真似、させられるか」

「ははっ、優しいじゃん」

ここで二人は同時に笑った。校倉は澤山の左膝まで叩いて喜ぶ始末。やっと丁寧語の世界から解放されたのだから。それは二人に共通の想いだった。

「ところでミナミ、今日の出張捜査の意味って何だったんだろうね」

「何だよ、急に、トーン落として」

澤山の疑問はこうだ。この日の捜査の大半は三橋菊蔵が芹澤伸子を殺したとの前提に立てて芹澤満の相続に関するこの二人の関連、言い換えれば三橋の犯行動機を公的な書類上で確認することに費やされた。しかしそれが確実になったとしても伸子殺害事件は山梨県警の管轄だ。神奈川県警管轄の、三橋が加納伸子を殺害した事件には繋がっていない。署に戻ってこれが収獲と誇れるものが無いではないか。

校倉の表情が少しく曇った。深呼吸をして何かを抑えている。

「凶体に比べて小さいねえ、リキヤの器。狭いねえ、リキヤの視野」

「言ってくれるじゃねーか。じゃあ解いてみろよ」

「まだ全て仮説をたてて事件を追ってるの、いい？ 三橋は四月十八日ごろに伊東の自宅から失踪して二十日に伸子を殺害した。その間の二日余り三橋は何を考え何処に居たの。この足取りを掴むことは三橋の犯行を決定づける大事な作業よね。その後五月五日に加納光江を殺した。この間隔は二週間もある、彼は何を考えどこに居たの。さらにその先をガタさんは

危惧しているわけ。既に起きた事件の解明だけでなく、もしかしたらこれから二件の犯罪を結ぶ同一線上に新たな犯行があるとしたら、予想される被害者は誰なのか。これに迫った今日の捜査は誰が何と批判しようが重要なのよ」

澤山はハンドルを握りながら校倉の言う通りの自分の未熟さを実感していた。

「ミナミ、お前、本当は刑事課がいいんだろ？ 合ってると思うよ」

「だからお前呼ばわりは止せって。うっかり他でやってみろ、ぶん殴られるぞ」

「ああ、悪い、ごめん」

「生安も好きだけど、まあ本当のところはね。でもわたしに万一のことがあったら身障者の親父が困るだろうしね。比較的死傷リスクの小さい部署で頑張るよ」

「お父さん、労災かなんかで？」

「個人経営の八百屋だから労災は無い。脳梗塞だよ、左半身不随。もう部屋の中では動ける程度に回復したけど」

「ふーん、いろいろあるんだな。それで聞きたいこと思い出したんだけど、ガタさんの脚の怪我って勤務中か？」

「うちの先輩の話でだけど知ってる。いま署長になってる大沢警視は東大法卒で最初からキヤリアコースなの。その彼が実務研修的に配属されたのがガタさん率いる班。殺人事件の現場で現行犯が発砲してガタさんの脚に当たったんだけど、それは大沢さんが撃たれる寸前にガタさんが後輩を護ろうと身を挺しての結果なんだった。もともとガタさんは一度も口外していないらしいの」

それが、大沢署長が今も北方警部補を信頼している所以なのかと澤山は納得をした。

「リキヤもすごい人の下にいたんだから頑張りな」

「まるで姉御だな」と肩をすくめた。

「いいじゃない、私より一個年下なんだし」

「うそ、崖っぷちの女なの？」

「うるさい。言うか、そこまで」

「そっちこそ何だよ、年齢まで知ってるって、生安は諜報部か？」

「便利で役に立つらしくて他部署の人は重宝な部署だとは言ってくれるわね」

校倉は心地よい疲労感に浸っていた。この日、コンビ常連の北方と新人の澤山のヘルプということでいつもより緊張度が高かったのだが、少しは役立てたと思うからだった。折角の若い男との臨時デートだというのに睡魔が襲ってきた。

二人を乗せた車はいつの間にか新笹子トンネルに差し掛かっていた。

「ミナミ、いつそ箱根経由で帰るか？ 同じ道で帰るのは葬式のタブーだし、この先の大月ジャンクションでコース変えられるんだけど」何せ殺人事件の捜査だったのだから葬式もどきだ。

返事がない。「何だ、眠っちゃったのかよ。じゃ、箱根経由にしよう」と澤山は嬉しそうに肩をすぼめた。

北方は芹澤富美雄が親元を離れた際の転籍地の住所を頼りに中巨摩郡昭和町にタクシィで入り、地域交番に立ち寄っていまも同所に居るのかを確認した。聞くところに依れば山梨県は高齢者比率が高く、その分高齢者福祉に厚いらしい。きつと把握しているはずと確信し

たからだだった。なぜ休みを使ってまで単独で富美雄に会おうとしたのか。彼が今回の事件の中心芹澤満の妻及び兄弟姉妹の中で唯一の存命者だからだ。また、八十一歳と高齢なので聴取したいからと呼び出すことは控えたいという気持ちもあった。

警官はたまたまかどうか、二人揃って中に居た。身分を明かし簡潔に用事を伝えると早速に巡査から答えが返ってきた。最近近くの飯喰(いっくい)交差点で交通事故に遭って私立の清和病院に入院中だという。ひき逃げ犯はまだ捕まっていないとも。骨折はしたものの命に別状はないらしいが、後期高齢者なので負傷をきっかけに体に異変が起こることはよくある。北方は自分の中に間髪を入れずに生じた小さな震えを抑えて言った。

「最近ということだが、具体的日時は分かるかな？」ここが危惧感の増減に繋がる。直属の上官もどきの物言いにしたのは一つの演出だった。

「四月三十日午前五時四十分。自分が当日、目撃者の駆け込みを受けて交通課に連絡したあとすぐに現場で初動に携わったので確かです」

「加害者の車の車種などについての目撃証言はある？」

「この季節のあの時間、明るくなつてはいたのですが、白くて大き目のバンとしか目撃情報はありません、ナンバーはもちろん記憶されていません」

四月十八日伊東から出奔、二十日芹澤伸子惨殺、三十日芹澤富美雄ひき逃げ、つまり殺人未遂、そして五月五日加納光江殺害。北方が胸の中で引いた直線は「次」や「次の次」があると予告してくる。

「悪いが、この交通事故の調書の写しをこの名刺の私宛送って貰えないだろうか、全部でなくともいい、事故の日時、場所、被害者名、負傷の程度、車の特徴などが入っていれば十分なので。頼みます」

「何か神奈川でも関連事件が？」

「まだうちの事件捜査も手探り状態なんだがいまの話から同一の加害者の臭いがしてね」

「臭いっていうのはハマる表現ですね」

「じゃあ、これから病院へ行くので。ありがとう、邪魔したね」

北方が交番を出て行くとうると、少し奥に引っ込んでいた巡査に小声で何か言った後で彼は嬉しい言葉を発した。

「白黒パトでお送りしますよ、自分が運転します」

これで三橋菊蔵の過去が少しは分かるかもしれない。彼の次なる行動を知るには彼の過去を知る必要がある。北方はそう確信していた。

清和病院の面接時間内ではなかったが緊急な用事で小田原から来たと言うと、許可してくれた。必要不可欠でない場面では警察官を名乗ることはしない。四〇三号室は四人入れる病室だったがベッドは二つ空いていたし、北方が中に入ると気を遣ったのか同室の患者はそつと部屋を出ていった、院内を自由に歩ける患者なのだろう。富美雄は窓辺のベッドだった。北方は柔らかな微笑みを意識してつくり「少しお話をいいですか」と名刺を手渡した。

富美雄は名刺を見るとすぐに目を閉じて、何かに堪えるような表情で数分間何も声を発しなかった。

北方は直感した、彼はなぜ警察が面会に来たかを知っていると。だからこそ静かに立ったまま彼が目を開けるのをジッと待つことが出来た。

「神奈川で今度は誰を襲ったのですか」

案の定、彼は「今度は」と言った。

「まだ確証は掴めていませんが、加納光江という小さな会社の社長です。死亡しました」
「凶器は何でした？」

「普段板前として使っている包丁ではなく、たぶん怒りに任せて腕力だけで想いを遂げた。わたしはそう睨んでいます。頭部損傷が致命症になりました」

彼はなぜか既に三橋の芹澤伸子殺しについて本人から詳しく聞かされている。そう踏めばこそその真っ直ぐな応答だった。飾った表現をする配慮の必要はない。

「北方さん、光江が昔のままです。しかも会社社長というのが本当なら菊蔵は彼女を怒りで殺したりはしません、どんな女になっていたんです？」

「ご明察ですが、社長は嘘ではありません。ただ、色気を振り撒くバーのママもしていました、しかも違法といえるレベルの。こちらではそう確信しています」

彼は唇を噛んで天井を仰いだ。

「三橋の元恋人とか、そういうことですか？」

「小学生時代の初恋の女です。光江のことを話すと少し長くなりますが、これも捜査に必要ですか？」

もちろんだと思った。相続とは無縁の被害者だからだ。北方がこれから先の三橋の犯行予測にもう一つ確信が持てない障碍になっている。

「菊蔵の母親和代は、兄の私が貶すのも何ですが落ち着きがない性格でそのうえ淫乱の気がありましてね、三沢と結婚して蕪崎に行っても男としての三沢に飽き足らなかつたんですよ」と富美雄は静かな口調で話し出した。

浮気性が愛が無くても夫婦生活をしていれば女に子どもはできる。菊蔵が生まれた。和代が愛情を注がなかったのは夫にだけではなく菊蔵に対しても同じで、学齢に達した数年後に子どもを置き去りにして家を出た。署名捺印した離婚届を一枚置いたきりの失踪に三沢幸三は怒り菊蔵に直接それをぶつけた。「お前はもう俺の子じゃない、出ていけ」と文字通り叩き出したのだ。俺の子かどうかも分からないとの気持ちがあつたことは確かだろう。釜無川の橋の上で数時間動かない子供がいるという通報で保護され、その後民生委員に語つた「住所」は、三沢の処ではなく、母親と一度だけ訪れたことがある武川町の実家の方だった。嫌々ながらも引き取ってくれた芹澤の家はしかし、小学生の菊蔵にとつては生き地獄同然だったようで、邪魔にされ、罵られ、いじめぬかれた。食事抜きが日常茶飯事という皮肉めいたものだったらしい。それらの行為の主役はいつも満の妻伸子だった。家出と保護と芹澤家引き渡しは何度も繰り返されていることを知つた富美雄は不憫に想つて昭和町の自宅に引き取れることを決める。独身主義者の富美雄だったが、和代の承諾をとる手立てもなく菊蔵を養子にはできなかつたが、我が子のようにして養つた。ただ菊蔵の心に刻まれた傷はなかなか癒されず、釜無川河畔に独り立ち尽くす姿は、近隣住民の評判にもなつた。或る日富美雄が呼び戻しに行くに菊蔵より少し背が高い女の子が横に居た。傍に行つて女の子に事情を聞くと、何度も見かけるので声を掛け、言葉を交わしたことでその後も「気になつて仕方がないから見に来る」と愛くるしい顔で微笑んだ。近所の子で加納光江だと名前も告げた。学年は菊蔵の一つ下だった。話を聞いている最中に富美雄は一つ気づいたことがある。傍で黙つて聞いている菊蔵が穏やかで優しい表情をしていたことだ。それは未だ一度も見ることが無いものだった。その光江も或る日突然に去つた。親に止められたのか、引越したのか。誰も知り

はしないし、富美雄にとっては理由などどうでもいい、自分の前から消えた。それだけが確かなことだったのだろう。

「少し休まないで大丈夫ですか」富美雄の顔に疲労が見えたので北方は話を遮るようにして氣遣った。何かを思い出したのだろう、水っ漬が彼の口元に垂れてきている。ベッドサイドにあるティッシュペーパーを箱ごと取って、うなずきながら彼に渡した。

「いつもそばに居てくれた光江を、菊蔵は殺したんですよね」富美雄は激しい音を出して涙をかんだ。

北方は、岸本から買った同人誌『碧海波』にあった菊蔵の随想の一節を思い出した。

『子どものぼくはいつもの岸にすわり汚れて渦巻く川を見ていた。じつと見ていると自分が勢いよく川上に向かって動いているような変な気持ちになる。でもぜったい行つてたまるかと思う。ぼくを産んだらしい女がいたからだ。僕をいじめ続けたオニ女がいるからだ。佐和ちゃんは小さな女の子だが可愛くない。誰も居ないときにつねってやったら泣いた。そういう女の顔が何度も川に流されていく。何時間も川を見た後でハッと気がついて横を見たら、可愛い女の子が笑顔ですわっていた。なんにも言わないのにやさしくて良い匂いが流れてくる。だから会えばいつまでも一緒にいたかった。それが目の前からパッと消えた。哀しくて空を見上げたら雲の上から手を出して早くつかまっつてと言う。ふしぎなことに僕は飛べた。だから女の子と手をつなげた。もう少しで同じところまで上がれる。一緒にすわれる。そう思つてもう一度顔を見上げたら僕を産んだ女の汚い顔だった。あわてて手を離したぼくは、真つ逆さまに岸辺まで落ちた。そこはもう暗くて誰もいない』

編集者岸本の言う通り文芸同人としては稚拙な文だが、富美雄の話聞いた後だと、それが却って解りやすく助かった。

「菊蔵は伸子を殺してから三時間もしないうちにここに来ました」

北方は急に元居た「いま」に引き戻されて息を呑んだ。

「私は自首を勧めたんですが駄目でした。罪の意識から救いを求めて来たんじゃない、私を責めに、いや罵るために来たんです。伯父さんの言う通りに生きていた結果がこれだ、もう何もない、積み上げてきたものを全部失った、居場所もない、みんな、叔父さんの、いやお前のせいだよ」

涙が一気に噴き出し、顔が興奮しているせいも赤みを差してきた。

「大丈夫ですか？ 先生を呼びましようか？」

一個の人間としてはそうしたいのだが、富美雄のこの顔を医者が見たとしたら、症状悪化の原因が北方との面会にありと断定して部屋から叩き出すに違いない。捜査中の刑事としては、ここでの中断はあり得ない。

富美雄はそれには応えず「あなたは時間が無いんでしょう、緊急事態だとしてここに、こんな老いぼれの処へ来たんでしよう？ 時間が無いのはわたしも同じです、氣遣いは要りません」と、またティッシュペーパーを手にした。

北方は、富美雄が自分自身と真剣勝負をしているようだと感じ始めていた。もう、本音でいい。お為ごかしは止めよう。そう思った。

「私は満身創痍の小学生を引き取つてからずっと、あいつが出ていくまでの共同生活の中で、誠実に真つ当に生きていけばいいことがある、何があっても人を信じて、助けたり助けられたりして真面目な毎日を送れと言ひ続けました。また、当時の菊蔵の心を救うにはそれしか

手立てがなかったんです。少し世の中を綺麗に語り過ぎたかもしれません。いまのあいつの現状からみれば間違いないと言えることです。いまあいつが犯している罪、これから犯すだろう罪は私の罪でもあります」富美雄の顔にもう涙は無かった。

きつと誰かに告白したかったのに違いない。北方は、語る富美雄の姿を見ているうちに「懺悔」という言葉を思い出していった。

答えは知っていても言うはずがない。そう思いながらも北方は訊いてみたいという気持ちを抑えきれなかった。「芹澤さん、息子さんが次に狙う人間は誰ですか」

富美雄は右の口元を痙攣させて声を出さずに笑って、「それはすでにご存じのはず。だからお一人で私の処に来た。違いますか」

「失礼をしました」

「この重大さを他の刑事に知らせるのは時期尚早？」

「はい」

「確証が何一つ無い」

「はい。「警察っていう官署は不便なところですね、事件が起ると判っていてもあれやこれやで防がない、防げない。実際に起こってから始末に奔走するだけ」

「これは手厳しい」と北方は、小さく笑うしかなかった。一方で皮肉屋でもある自分を呼び出してみようと思った、応対を切られるという地雷を踏む危険は覚悟の上で。

「ところで、菊蔵はあなたにも飯喰交差点で襲い掛かった。ただし殺そうとはしなかった、いまの彼でも育ての親への氣遣いはある。あなたはその点余裕でしょ？」

「甘い、ですね。その程度の柔さで絶望と怒りで鬼になっているあいつに太刀打ちできますかね、あそこで殺す必要が無かったから襲うだけにしただけのことです。もう疲れたのでこの辺りでお引き取りください」

やはり踏んだかという悔いはあったが、北方は捜査本部設立に持ち込めるような気がして来た。菊蔵の狙いと本氣度が事件当事者の口から知らされたことは大きい。

辞去の挨拶を返そうとしたその時、入り口に看護師が来た。

「同室の患者さんから苦情がきました。面会の方、もう出てください。芹澤さんもはっきり注意してくれないと困ります」

「今出ます、すみません。じゃ、芹澤さん、また」

「はい。ちなみに私の口は証拠になりませんので、そのおつもりで」

北方の中で何かが弾けた。

廊下に出ると看護師が外まで出ていくかどうかを確認したいのかいつまでも後ろからついてくる。正面玄関に着いたところで振り返り看護師の顔をジッと見た。

「何か？」

「芹澤さんが自殺しないように宜しく願います」

「失礼でしょ！ まったく。警察呼びますよ」若い女性看護師の可愛い顔が歪んだ。

片桐は身分証を見せると、「わたしがその警察です」と言った。ジョークでも言い掛かりでもないことを知らせるべきだと考えたのだ。

富美雄の最後の言葉をこの先の取り調べには応じられないし、裁判の証人にもなれないと捉えると「不可能だ」と解釈できる。また「あそこで殺す必要が無かったから襲うだけにしただけ」と言う理由は一つ。富美雄が自殺するからだ。菊蔵は伸子を惨殺した模様をつぶさ

に語ったに違いない、それで充分だと知りつつ。
物的証拠がとにかく何もない。これで富美雄が死ねば証人もゼロだ。

6

全然気乗りしない誘いだった。澤山が課内で北方から指示された山梨県以外に本籍を持つ関係者の謄本取りの事務をこなしていると、霧島と名乗る他班の刑事が「今晚一杯やるから付き合え」と強引な感じで迫ってきたのだ。返事を渋っていると「お前が付いた北方警部補のこと、詳しく聞きたくないか」と言う。この一言で嫌々ながらも承知はした。連れていかれたのは大衆酒場で店内は客でごった返して空気が靄っていた。ただこの喧騒の中に居れば警察署内のあれこれを明け透けに話し合っても誰にも聞かれはしまい。その意味ではいい選択だと思つた。

「お前が刑事一課に来て配属されたのがガタガタ班だとは何とも気の毒でなあ」
席に着くやいなや注文より先に他班の悪口とは恐れ入ったが、澤山は一つの聞き取り捜査をしているつもりでこの場に臨んでいたので感情はとりあえず平静だった。
「ガタガタって意味が解からないけど！」

頼むアルコールは生ビールにした。霧島は「同じだ」と言うのを呼びつけ、澤山の好みも聞かずに数種類の肴を発注した。軍資金は上司を脅してせしめたとうそぶく。

「北方のガタと配属される部下がなんにも事情を知らない新入りか他班で使いものにならないと烙印を押された奴ばかりだからさ。誰ともなしに付いた仇名つてところだ」

「じゃ、自分もガタの一人なんだ」
「ああ、新入りだからな。でも我慢してずっとそこに居れば、もう一つのガタの意味になる、つまり使えない駄目刑事に」

「馬鹿にするために誘つたんなら帰る、くだらん。金は置いていくから」
大人しい口調で言つた。その方が怒鳴るよりも相手に響く。

「ま、まあ、そう熱くなるなよ、この後いい話があるんだから」

この霧山も階級は巡查長、そもそも敬語は要らない。無礼な奴ならなおさらだ。第一澤山は昨日校倉から北方の優れた人柄の一端を聞いている。

「酒の場は楽しい話がいい」と立ち上がりかけた澤山が座り直して言つた。

「じつはな、安西課長がお前をうちの班、森下班に移すと言っているんだ、俺はお前をよく知らんが課長はお前を買つてる。交番勤務時代の実績かな？ 退職間近の問題児、北方のそばに置いておくのはもつたないと言つてな」

「退職？ 警部補はまだ五十歳って署長に聞いているぞ」

「おい、署長つてお前もう署長と個人的に話してるのか、訓示とか叱責とかじゃなくて」
この男、どこまでも下劣だなと澤山は心底呆れた。

「いいから、退職の根拠は何だよ、それを聞かなきゃお前の話、説得力がないぞ」
もう霧山は同輩以下の扱いでいいと腹を決めた。

「退職というか、懲戒に近いかな、警察機構は極めつけの縦社会だ、それなのに北方はしょっちゅう刑事課長の捜査方針を無視して動いて一課の和を乱し捜査妨害をする。そんなだから警部補なのに一班独りぼっち、良くてガタガタ班というわけだ。お前も来てから数日一緒に居て分かるだろ、奴のいい加減さが」

さすがに型破りと思えることもあったが、それは捜査熱心、真実の探求のためと一本筋が通っていた。鋭い刑事勘、独自の捜査方法、部下への隠れた思いやり、それは刑事一年生の自分から視てもいい加減などという低レベルの評価はジョークでしかない。少なくとも三流レベルのこいつの口から聞きたくはない。澤山はようやく腹が立ってきた。

「北方警部補は当警察署の宝だ、捜査中に同僚を庇って銃で撃たれ不自由な脚になった。君に頼みたいのは彼の生命身体の保護と捜査の上で彼の手足となってもらうこと、この二点だ。彼のことで不満が出たら他言せず直接私に言ってくれ、署長室には原則、いつ来てもらってもいいから」

澤山は目の前のこの男より大沢署長の言を信じる。胸の中でそう息巻いた。

「聞くだけは聞いた。情報は感謝する」

ここで生ビール、枝豆、焼き鳥セット、まぐろ納豆とまとめてやってきた。

「まだまだ来るからな」と霧山は満足げに微笑んだ。自腹でないからだろう、根が単純なのかもしれない。だから課長のパシリ役なのに喜べるのだ。

「安西はそういう男だ」今度は北方の言葉が蘇った。澤山は結局付いてきてこの男と飲んでる。その不愉快な自分を肴にしてジョッキの半分の量のビールを一気に飲んだ。

「そうだ、お前さあ、きのうの山梨行き校倉と一緒にだったよな。しかも移動手段はお前の車、もう一つしかも、帰りは二人きりだったんだってな」

まさか校倉が生安で言いふらしてと一瞬眉をひそめた。

「生安に同期がいて今日校倉が生安課長に報告しているのが聞こえたんだと」

そんなことだろうと、瞬時でも彼女の品性を疑ったことを恥じた。

「で？ 何処までいったんだ、お前たち」

「もっとも遠くで北杜市の長坂」

「ばか、場所じゃねえよ、男と女だ、それに相手はあの美人の校倉だ、そっちの話だよ」

「バカはてめえだよ」と呟いて霧山を見たら顔も髪も毛も濡れている。自分の手には空の大ジョッキ。どうやら反射的に霧山にビールを浴びせていたらしい。

休み明けの朝、北方が署に出ると案の定安西課長が寄ってきた。

「北方、お楽しみのようだったが桃やワインの他に収穫があったんだろうな、まさか手ぶらは無いだろ？」

大沢署長に言って捜査本部を立ててもらおう前に課長に言えば暗躍されて潰されるのがオチだ。ここは彼に思い切り罵倒させてやろう。北方は含み笑いを返してから言った。

「お察しの通り、犯人逮捕とか確証掴みとか新証人発見とか、具体的な収穫は何もありませんでした。事件を囲む囂が若干薄くなってきたという程度です、見通しが立った程度というところですよ」嘘だけは言っていない。富美雄も三橋逮捕前に早々に自死してしまっただろう。彼は口で罵ることはあっても息子同然に育てた三橋を犯罪者として裁く側には立たない。それはもう北方の中では確信だった。

「ちっ、生安の女まで担ぎ出して一課の恥さらしといえてよくもぬけぬけと言うなあ、北方。お前のお陰でガイ者の女は未だに火葬できずに保存なんだぞ。もっとも抗議する身内や一人もいない孤独な女だけだな。片付かないんだよ、何度も言わせるな」

「え？ 光江の遺体はまだ保存中なんですか」初耳だった。

「白々しい。時々地位も役職も忘れてお前をぶん殴りたくなる。署長の差配だよ」

「ありがとうございます」所長への感謝の気持ちがつい口をついて出た。

「この野郎、なめやがって！」

反射的に避けたつもりだったが、安西の拳は北方の左頬を勢いよくかすった。避けた勢いをそのままに北方は横転、その際に事務椅子も床に倒れ、一課の部屋中に大きく鳴り響いた。早い時間だったが、それでも五人の刑事が何事かと立ち上がった。

安西はと見れば、いつの間にか大柄な澤山に羽交い絞めをされて爪先立ちをしていた。

「離せ、バカ野郎！」

「離していいんですか、この手が空いたら自分は課長を殴りますよ」

「澤山、離してやれ、もう何も出来やしないよ。この人は殴ったとたん後悔している」

その言葉通り安西は肩を落として棒立ちしていた。おそらくこの後襲ってくる懲戒の程度が気になっているに違いない。

「ガタさん、うっすら血が滲んでいますよ」

「ありがとう、大丈夫だ、澤山、仕事に入ろう」

北方は動きの止まった安西の横をゆっくりと通り抜けた。

立ち上がって息を呑んでいた刑事たちもようやく座っていく。

「リキヤ、確認だがそれぞれの贖本の申請は住民票附票共でやってくれたか？ 住民票そのものを一緒に取っていても構わないが」自分の班の事務机に戻ってから北方が聞いた。

「はい、和代の墨田区役所、菊蔵の伊東市役所、神奈川県警内では喜八郎の金沢区役所、佐和子の横須賀市役所、柳田美緒の鎌倉市役所と昨日のうちに全部やりました。郵便小為替とかいろいろと時間喰っちゃいまして午前中の郵送は無理でした、すみません」

「いやいや、けっこう手間取るさ、有難う。これで二、三日待てば被害に遭う可能性がある関係者がより具体的に把握できる」

「そこまで詰めてもまだ課長は捜査本部を立ち上げませんかね、そうになると慎重なのか、保身一筋なのか、それともバカなのか、そこまで疑っちゃいますよ」

「まあ、まだ何も伝えていないし、伝えて上の慎重さを覆せる段階でもない。なにしろ逮捕状一つ例にとっても許可できるのは警部以上だ」

そう口にしたあと北方は昨日の芹澤富美雄の言葉を思い出した。警察というところは事件が起こると分かっているにもかかわらず動かない、防げない、実際に起こってから始末するだけだと皮肉られたのだ。ほぼその通りなので反論もできなかつた。

「リキヤ、甲府家庭裁判所に電話をして、武川町住民を被相続人とする相続放棄を担当するのはどこかを聞いてくれ、ほかに家裁の支部がある可能性があるからな。これは個人情報じゃないから電話で照会できる。俺は北杜中央警察署の一ノ瀬警部補にお礼の電話を入れておく、ちょっと頼みたいこともある」

「分かりました。ガタさん、今日は署長に報告しないんですか」

北方が署長の許可で自由に動いていることは澤山も既に分かっている。

「来てすぐ担当に聞いたら今日は直行で県警本部だそうだ。まあ、詰められるだけ捜査を詰めておこう。彼には当然話す。ここから先はわれわれ一班だけでは無理だ。三県をまたぐ捜査本部が必要になる。特異な事件だから県警本部から管理官も来るだろう。とにかく早くしないと死人が増える」

冗談でも単なる大げさな表現でもない、北方の鋭い眼がそう言っていた。澤山の顔もにわかには引き締まった。

北方には聞こえる。甘い、緩い。そんなことでは絶望と怒りで鬼になっているあいつに太刀打ちできないと言った富美雄の声が。警察を単純に揶揄したのではない、バカにしたのではない。それはきつと、菊蔵を止めてくれ、これ以上罪を犯させないでくれという最期の叫びだったのだろう、北方はそう解釈していた。飾らずに言えば焦っていたし、苛立っていてもいい。こうして手続きに手間取っている間にも菊蔵の犯行は三県のどこかで現実化しているかも知れないからだ。

山梨県警の一ノ瀬警部補への電話は神奈川県警小田原中央署の正式なものとしてではなく、現在のところ一刑事の勘と断ったうえでの依頼だった。内容は小田原の殺人事件の容疑者が山梨県内の芹澤富美雄も狙う可能性があるので留意を願いたい。彼の周辺に交通事故なども含め異変があったときは情報を送って欲しいというもの。芹澤伸子の殺害関係については敢えて触れないようにした。たぶん芹澤姓と言うだけで彼は気づくに違いないからだ、もしかしたら自分が担当した未解決の事件の犯人に繋がるのではないかと。北方の話が終わった際に彼が「ありがとうございます」と礼を言った。北方は彼が動くことで富美雄の自殺まで防げるかもしれないと、淡い期待を抱いた。

署長が戻り出張の報告をした後の決済如何だが、捜査本部が立つとの前提でこれまでに揃った資料と現場検分をもとにして二種類の「捜査報告書」と「事件関係図」を作成し終えて北方が市内の自宅に戻ったのは午後十時過ぎだった。

「あなた、ご飯は」

妻の百恵は四つ年下、北方が三十のときに直属の上司の紹介で見合い結婚をしている。彼女の父親も刑事なので、この仕事の勤務時間が終始不規則なことは承知の上で、その点では夫に対して不満や苦情は抱かない様子。北方が電話連絡もせずに徹夜したり出張に出たりしても、あれこれ詮索もせず動じたりもしない。北方にとっては国宝級の良妻だった。

「ああ、頼む。さすがに少し疲れた。寝る腹だ、軽いものでいい。それと」

「ビールですね、お風呂温めですけど更湯のままであなただを待ってますよ、どうぞ」

これはいつものパターンで、主菜はいつも北方が入浴している間に料理する。副菜や酒の肴は保存がきくもので毎度用意されている。決まった時間に帰宅しない人間の夕食はこれ以外にしようがないのだった。

「そろそろ波留から電話が来そうな気がするんだが、まだか？」と浴衣姿になって座るとまづビールを手にした。

「なぜそろそろなの？」

「大学が東京なら通えばいいのに寮になんか入るからだよ、入学して一と月過ぎたところに五月病とか発症する学生が多いっていうじゃないか」

百恵は「そんなデリケートな子には育てません」と小さく笑った。

「そんなにガサツか、ここ最近の波留は」

「日々死線をさまよう仕事、刑事の娘ですからね。波留が入った部活のこと、まだ言ってますんでしたか、わたし。なんと空手部ですよ」

「ほう、まさか警察官志望じゃないだろうな」

北方は一瞬、校倉南の顔を思い浮かべた。司法試験を狙っていたのに家庭の事情で諦め「受験生崩れです」と笑顔で自嘲してみせる優れたものの女子を。

「すくなくとも犯人志望ではなさそうですね。ただ会いたいだけなんですよ、あなたは」

「ま、来てもゆっくり話すことすらおぼつかないが」

「今度の事件、だいぶ大変そうですね」

「ああ、気づいたか」とビールを注ぎ足して百恵の顔を覗き込んだ。

「ええ、めつたに疲れたと言わない人ですから。あの大沢さんと一緒の事件以来かしら。まさかまた銃携帯で現場へなんて、それは勘弁してね、波留のためにも」

大沢と一緒に違いはないが二人の立場はいま、天と地ほどに違う。まだ遭ったこともない三橋菊蔵を相手に銃を持って対峙する自分の姿を想像することは何度もあるが、その現場には当然ながら署長は居ない。ただ、自分の生殺与奪の権を握っているのは今度も彼のような気がしている。

「珍しいな」

「何が、ですか」

「おまえが仕事や捜査について注文を出すなんて」

「注文だなんて、そんな大それたことしてません、心配なだけです」

百恵は知っている、刑事の仕事は歩くことが第一なのだ。自分の父親がしょっちゅう口にしていた言葉で「刑事の仕事ぶりは履いている靴をみれば分かる、なまじい営業マンより歩く、俺なんか十足は履き潰している」というのがある。夫の良道はその足を銃弾で損傷してしまった。それでもなお、耐えて努めて難事件をいくつも解決に導き、昇任試験も通って警部補にもなった。大会社で言えば係長というところか。もう十分に家族のために頑張ってくれた。百恵にしてみれば見ているのが辛いのだ。五十歳で退官というのは一般的に言えば早すぎる。とは言え北方は高卒叩き上げの刑事、既に三十余年も奉職している。一度「もうゆっくりしたら」と暗に退職をすすめたことがある。口に出して怒ることはなかったが直後から一週間は会話無しになった。二度とこちらからは言うまいと決めた。引き際は自分で決めると、本人が一番限界を意識していると悟ったからだ。

一方、北方本人も退く時機を摸索していた。体力の問題もさることながら最近の捜査方針に強い疑問を抱き、もう自分のような刑事は組織上許されなくなっていると感じているからだ。いじけるとか反抗しているとかいう次元ではないと、自分では承知している。もう少し根本的な対立なのだ、いつか上司と大きくぶつかる。そんなことを理由に退官するのは矜持が許さなかった。何かやりがいのある仕事が終わったときに凜として警察署を去ってきたい。そう思っている。最近も安西から低次元の嫌味を言われた、いや、あれは一種の脅しに近い。

「北方、お前いつまで恩着せがましく署長に迫って我が儘を通すつもりだ？ 俺を蔑ろにするのもいい加減にしろ。いつまでも俺が我慢していると思うか、いつか叩き出してやる」

彼の方針を厳守するとしたら、こんな比喻を現実にすることになる。目の前で男が銃のようなもの一般に突きつけているのを見て警官が銃で犯人を制しようとする、上司が言う、待て、あの銃が本物なのか分かってからにしろ、いや、本物だとしても弾が装填されているかどうか確かめろ、イヤイヤそれでも不十分だ、実際に人を撃つてからにしろ。そんな上司に到底従えるものではない。

「そろそろご飯になさいな、栄養もつけないと体がもちませんよ」

「百恵、おまえも飲んだらどうだ」

「あら、そうなの、いただきますとも」と類笑むと、手元に置いたコップの水を飲み干し空にしてから前に突き出した。

「え？ 俺が注ぐのか」

「ええ、誘ったんですから、当然です」

北方は注ぎながら面白そうに笑った。自分の気持ちが弱っているのか、他愛もない小さな和みの時間に癒されている。それが何だか嬉しかった。

「安西君、君の主張の内容は分かった。で？ こうして僕に訴えて何をさせようと言うのかね、つまり朝一でここに来た目的は何かということだが」

北方がいかに組織上の約束事を破り続けているか、それによってどれだけ刑事一課が迷惑を被っているかについて、独りで十五分以上しゃべり続けたのを聞いたあとで、大沢署長は机上で両の掌を合せた姿勢のまま安西刑事一課長の顔を見上げた。

「とにかく北方をやめさせて欲しいのです」

「ほう、彼を懲戒免職にしろと？」

安西はハツとして口を塞いだ。つい本音が出てしまったが、ここでは北方の暴走を止めてもらおうとしたのだった。いや、心の奥底にあったものは違う。昨日課内で他に数人が居たのに感情に激して北方を殴ったことについて、北方本人や周囲に居た刑事の口から署長に告げ口をされないうちに北方の評価を落としておく必要があったのだ。

「いえ、とめさせてとやめさせては漢字と送り仮名で書けば一緒なので、つい」

言い訳もここまでくると醜悪を通り越して滑稽でさえある。

「では、もう一度訊く、彼の何を止めて欲しいのかな？」

「昔署長を助けたことでいい気になり毎度課の方針を無視し続けることをやめさせて欲しいのです、はい」

「どうやら何とかの根源は僕のようなだね」

「アッ、とんでもない、そういうことでは決して」

もはや安西には自分の醜さを気付くことすら出来ないらしい。

大沢は小さくため息を吐くと、机の抽斗から一枚の紙を出して安西の前に置いた。

半ば恐る恐る読み取ると、加納光江の死因に関する鑑定書だった。

「これによるとこの被害者は転倒事故で亡くなったのではないね」

「あの、火葬済みでは」

「保存しているのを知っていてそれはないだろう。親族が出てくるのを待っていたということもあるし」

事故死として事件性を否定した判断に疑問もあってな、と続くはずの大沢の言葉で、安西は凍り付いた。いま、自分はピエロになっていると。

「安西」と呼び捨ての大沢の呼びかけに安西は或る種の観念をした。

「警部という地位は君が昇任試験に受かったからだだが、刑事一課長として他から評価されているのは、部下の北方君が難事件を何度も解決に導いたことが大きいと思うが、どうやら君には邪魔な存在のようだね」

「そ、そんなことはありません」
「まあ、いい。もういいよ、話は聞いた」大沢は立って窓外を眺め、肩を落とした。

7

翌日早朝のことだった。文字通り緊急に捜査本部設置の知らせが刑事課内に届いた。一課の中では事件性は無いということではぼぼ定着していたし、加納光江事件発生から二十日ほど経っている。北方班は別として或る種の衝撃が走った。会場は最上階の会議室。刑事一課には、二名の北方班、六名の森下班、同じく六名の田原班の三班しかない。森下班は、澤山の心をかき乱しかかった例の霧山がいることで分かるように安西課長べつたりの、言い換えれば反北方急先鋒の班だ。

午前九時、それまで騒然としていた会場が静まり返った。捜査の猛者たちの前に並ぶのは誰か。固唾を飲んでいるという風情だ。

入ってきて席に着いたのは大沢署長と三十代と思しき長身の男の二人だけだった。真ん中の場所が空いている。安西課長が進行役として座る。誰もがそう思ったことだろう。背後の二枚のボードはびっしりと人物関係図の形をとった捜査資料で埋め尽くされている。進行役が着席していない状態で大沢が第一声をあげた。

「田原警部補に本日の司会進行役を命ずる。中央のこの場所にすわるように。なお、本日付で田原君を刑事一課長代理に任命したので知らせておく」

指名された田原保は、予め指令が出ていたらしく、驚くそぶりも見せず ゆっくりと前に進み出た。

大沢の本音は事件を熟知している北方に任せたいところだ。しかし担当刑事が直接会議を進行すれば中立公平な事件の俯瞰は担保できない。北方本人の人格識見の如何に拘わらず参加者の眼に中立公平に映らなければ意味がないのだ。これまで事件の一部しか見ていないメンバーを納得させるほどの客観的説明があればだれが進行役だろうが問題はあまるまい。この決定は、じつは北方班を信じて成り立つものなのだ。

「安西警部の細君から、夫に激しい下痢があり感染症罹患のおそれがあることから休ませてほしい旨の連絡が入った。捜査に支障が出るので安西が出てくるまで森下を班長から降ろし磯貝巡查部長に旧森下班の指揮をとってもらおう。では田原代理、始めてくれ」

北方は改めて大沢の能力に脱帽した。これ以上内部の組織上の問題で重大事件の捜査を遅らせてはいけない。諸々の断行は危機感の表れだった。決断した後の署内外への手配が速いものにも驚く。ここからは自分たちの鼎の軽重が問われる。身が引き締まる思いがする北方だった。

「只今から複数の県を跨ぐ広域連続殺傷事件の捜査会議を始めます。まず本件の管理官になられた神奈川県警本部佐々木貴仁警視にご挨拶をいただきます。管理官、お願いします」
管理官は捜査会議では絶対的な存在だ。刑事たちは人物鑑定でもするかのような目つきに変わった。捜査実務の細部も熟知せず地位の高さと権限だけで一方的に差配されたのではたまらない。若く見える佐々木に対しては当然その危惧が強いのだろう。

「本部の佐々木です、過日大沢署長が県警本部に直接出向いてこられ謎が多い本件の概要を知りました。それをもとに本部で検討した結果、未曾有の事件に拡大する蓋然性が高いと判断しました。このボードを会議の後でもいいのでじっくり見て欲しい。また、会議中でもつ

ぶさに読んで確認したいなら、拳手をして私たちの後ろに回り確認しても構いません。私が小田原に付いたのは昨夕ですが、書きあがっていたので読ませてもらいました。捜査本部がまだない段階での北方班二人と、署長の指示でヘルプについた生活安全課の校倉巡査部長の捜査努力に敬意を表します。そのうえで諸君にお願いしたい、これから先は一課全員で凶悪犯を探し出し、次なる殺傷を食い止めてください。小田原中央署刑事一課の力に大いに期待をしています」

会場が挨拶終了と同時に少しざわついた。笑顔が多いところを見ると管理官に対する偏見や警戒心が多少なりとも払拭されたのかもしれない。大沢はそう捉えた。

「会議の段取りを説明します。まず管内で起こった加納光江事件と北方班が辿り着いた容疑者三橋菊蔵とをつなぐ根拠と同人が山梨県警管轄地で起こしたとみられる芹澤伸子惨殺事件との関連性について北方班からの解説を受け、次に各班の諸氏と担当刑事間の自由な質疑応答に移ります。謎が多い本件ですので活発な意見を期待しています。それをすることで物的証拠が何一つないにもかかわらずこれからも同一犯による連続的な殺傷事件が起こるとの推論の信憑性が担保されると思います、最後に各班が何を担当し、どのようにして将来の事件を未然に防ぎ、犯人の早期逮捕に持ち込むかにつなぎたいわけです。尚、今回は署長、管理官ともに言わば不規則的に指示、発言等で議論に参加するとの方針ですので、しかるべき対応をしてください。あと質問は原則としてどの段階でもいいですが、必ず拳手をして許可を受けてください。ヤジの類は許しません。では北方係長、どうぞ」

北方はゆっくり立つと、開口一番「のつけから異例かも知れませんが上座に説明する形ではなく、常に犯行現場で文字通り懸命に動いておられる刑事諸氏に本件の異常性をご理解願いたいので、上座とこちら側の席の中間に立って話したいと思います。時々ボードを見てカンプベしなないと私自身迷い道に入る恐れなしとしますんで」

この自虐的ユーモアは一同に受け、笑い声が広がった。

「まず、市内のスナックバー・マウンテイングで発見されたオーナー加納光江の変死体は事故死ではありません。大沢署長が大学の医学部の再鑑定を手配してくれて、その鑑定書のコピーを用意してあります。澤山君、隣の席に手渡して。そう、全員に回覧して欲しい」

旧森下班を中心に動揺があった。おそらく、転倒事故死として始末していた自分たちは何なのだという気持ちからだろう。

「事故ではなく事件として視点を変えようとむしろ容疑者としても扱えそうな事実上の共同経営者小出明日香三十六歳と色気売り物にしている被害者の店の常連で司法書士の近藤誠之助七十五歳の二人でしたが双方ともシロと判明、ただ、この二人の協力で三橋菊蔵の存在が表面化したのは幸運でした。三橋の住居が加納光江経営下の不二不動産が管理していた伊東市内の望海荘という賃貸コーポラスだったので早速訪問。ところが妻や娘も含めて一家全員が行方不明。溜まっていた郵便物から文芸同人誌代表で推理小説執筆が趣味の岸本健一を知りすぐに訪問、この男の犯罪に関する新聞記事収集癖のおかげで、山梨県北杜市で起きた芹澤伸子惨殺事件と三橋の関連性が判明しました。彼岸本は伸子の夫芹澤満の相続に関して知らぬ間に相続人にされてしまった三橋からこの二月に相談されていたからです。ここから三橋菊蔵と芹澤満をつなげる系図的な調査が始まりました。これは発生した事件の解明であると同時に、これから起きるかもしれない殺傷事件の被害を未然に防ぐためでもあったのです。右調査結果がこの板書になります」

ここまで北方が概説を終えたところで、奥側の扉が勢いよく開いて校倉南が飛び込んできた。「会議中に失礼します、現地でお会いした山梨県警の一ノ瀬警部補からの緊急連絡です。昭和町在住の芹澤富美雄が死亡しました。転落死です。早急にお電話くださいと北方警部補にお伝えを、とのことです」

上座の三人が同時に後ろのボードを見た。図によれば富美雄は三橋菊蔵の伯父にあたることになる。刑事たちの視線も同じ場所に集中している。

「管理官、連絡するために一時外します」

「了解。行き給え」

「校倉君、この系統図の解説をしておいてくれ」と北方は奥の出口に向けて歩き出した。

「校倉巡査部長、できるな、君なら」と大沢が手招きをした。

「はい、その系統図に関する説明なら」と上座に向かう南。

すると旧森下班の一刑事が挙手して許可を待たずに「係長が戻るのを待ちませんか、他部署の女性に説明を受けることには抵抗を感じます」と言った。

校倉は唇を噛んで歩を止めた。

「井上、君はいま、他の警察部署と婦警全員を侮辱したことになるが、それが解かっているのか？ 管理官の前で恥をさらしているのは君だということも」所長が眼を剥いた。

井上と名指しで叱責されて男はうなだれた。本当の矜持から出た言葉ではないらしい。

「校倉南君、気にしないで前に来て続けて」

管理官がソフトな声を発してうなずいた。

澤山が意を決したように挙手をした。こちらは進行役の許可を得てから刑事席に向かつて言い放った。「何の令状もなく警察の権限を振り回しもせずゼロからここまで調べるのは正直大変なことでした。校倉主任無しでは無理だったかもしれません。因みにあの板書は女文字、校倉主任が解りやすいように工夫して書いたものです。以上です」

小さなざわめきが起った。なぜか上座の上役二人は笑みを浮かべている。

北方は、刑事一課で受話器を握ったままうなずき続けていた。

「そうですね、退院後の暮しを憂えて病室の窓から覚悟の投身自殺ということで処理、と決まりましたか。直筆の遺書もありということですね。そこからさらに交通事故の方も終止符を打ちますか？ 被害者死亡ということでもっともはっきりとは記録しないでしようが、今後捜査の重点にはおかれなんでしょうね。ただ、これだけは申し上げましょう、故意に車をぶつけて芹澤富美雄を傷害した人物と芹澤伸子を殺害した犯人は同一人、三橋菊蔵です。小田原市内でも一人殺しています。いまやつと開かれた捜査本部の第一回会議で俎上に載っているところです。その結果如何では、合同捜査ということで一ノ瀬さんとまたお会いできるかもしれませんね。」

やはり富美雄の意志は固かった。なぜ彼が独身を通したのかは知らないが、どこか古武士然としたところがあって、彼らしい死のメッセージだと思った。

二十分強という長電話をした北方が会議室に戻ると、ちょうど三橋から芹澤満に至る説明を始めたところだった。おそらく最後の総括になっていたのだろう。北方は最後部に立ったまま続けろというサインを校倉に投げた。本人と同時に署長も管理官もうなずいた。途中で変われば説明内容が重複するおそれが大きいからだ。それに若い校倉の声は高音部が綺麗で良く通っていた。

「最後にまとめます。現地でとり、さらに署に戻ってから追加手配した膳本類から二人の相続関係が明確になりました。被疑者三橋菊蔵は、三橋直子と妻の氏を夫婦の氏とする婚姻をする前は三沢菊蔵、これは今回の事件の発端になった被相続人芹澤満の妹にあたる母親芹澤和代が三沢幸三との初婚中に産んだ子だったため、和代の方は子どもを置き去りにする形で家出し、その後離婚が成立して芹澤姓に戻りその後種田栄司と再婚、菊蔵とは種違いの妹になる種田美緒を産みますが、その後また離婚して芹澤姓に復氏、そのままの苗字で死亡します。で、妹の方は長じて柳田芳次と婚姻して現在の柳田美緒となります。今回山梨で惨殺された芹澤伸子は被相続人満の妻。代襲相続人になってしまった三橋菊蔵とこの芹澤伸子は、伸子が相続放棄するまでという一時的なものではありますが芹澤満の共同相続人になる可能性があったという関係になっています。私のつたない解説はここまでで致します。係長が戻られました」

校倉は上座と刑事席双方に一礼をした後、北方の居る奥へと進みだした。

「校倉君、このまま北方班の席に会議終了まで留まってください。生活安全課長にはそのようなかもと予め伝えてあります」と管理官が微笑した。

上座に向き直っていた校倉が反射的に近づいてくる北方に目を移すと笑顔でうなずいている。前もって承知していたらしい。もちろん署長も同じなのだろう。

「承知しました」と校倉は元氣よく応えた。言葉のもめごととも性格的に嫌いではない。つまり会議場のヤジでさえ苦にはならない性格だった。

「えー、ここで十分ほどの小休止をします。各班内で質問や意見を整理しておいてください。再開後の北方班関係の応答は原則刑事席で立つ形でお願います」

大沢署長と管理官はボードを見て会話を始め、それを合図に会議場は騒然としてきた。小用に立つ刑事もいる。

「ミナミ、凄く解りやすかった。理解力に問題がある俺が言うんだから確かだ」と澤山が拍手の真似をした。

「リキヤの援護射撃、嬉しかった」

「やっぱりミナミはこっちが向いてるな、生安より」

「来ようかな、刑事課」

「来てもいいぞ、ミナミ。少なくとも署長は二つ返事だ。それに女班長があってもいい」

「あれっ、ガタさんは？」

「いつでも部下になる。その方が楽だし」

「じゃ、いまから部下だ、いいか北方、引退は許さないからな」と校倉が遊んだ。

「班長、それだけは従いません」と北方が笑いながら応じたあとで、「あの管理官は予想通りできるな、予断を排して見聞きに専念している。自分に自信が無いとあれはできない」と結んだ。

「わたし、彼、貴仁君に抱かれたことあるよ」

「ええっ、ウソだろ、ミナミ」澤山が半泣き顔を作った。

「小学生のとき、柔道で！」

「バカ、びっくりさせんなよ。ガタさん、知ってましたか、この話」

「ああ、昨日。あのお二人の誘いに応じて飲んだ居酒屋で」

「早っ！」校倉と澤山の声が見事に合わさった。

その直後、管理官、署長とともに着席した田原課長代理が大声で言った。「では始めます。着席！」

解説は一方的に情報や知識を口にすれば済むが、質疑応答はそうはいかない。誰が、何の目的で、何を聞いてくるか分からないからだ。嫌がらせ目的で迫りそうなのは旧森下班だ。なぜなら同班は安西班というに等しかったからだ。

第一声は案の定、森下に代わって班の臨時リーダーに指名された磯貝巡査部長だった。「視点を事故から事件に変えて容疑者ともいえる共同経営者小出明日香についてシロと判定した根拠を訊きたい。小出にアリバイがあったとか、何か確証を得られていることかどうか、先ほどシロと判明、とたしかにきいたのですが」

これは北方が応じなければなるまい。「いや現場での私の判断だ。小出の言動、とくに供述内容、捜査への協力的な態度など、言わば総合判断でというところだ、それが何か？」

「これは驚いた。一個人の独断で嫌疑なしと判明ですか、うちなら任意で引っ張って来て取調室でじっくりと、粘って供述をとりますがね」

進行役の田原が磯貝を止めようと何か言おうとしたとき、管理官が田原の腕を引いて止めにかかった。磯貝はそれを我方が有利として見逃さない。

北方は落ち着いた声で「ほう、大声を出したり、脅したり、長時間かけて何度も同じ質問を繰り返したりという意味だね、じっくりと粘ってというのは。その結果嫌疑無しはゼロということかね、全部クロとか」

「バカを言うな、きちんと有る無しの判断はする」言ってしまったから口を閉じた。

管理官が少し顔を歪めた。公然と上役に向かってバカと発したのだから。

「では私と同じだ、現場で判断したか、狭い部屋に詰め込んで聴取してそこで判断したかの違いに過ぎない。そもそも捜査の殆どは観察、推理と判断の繰り返しだと思わないか。特に今回はゼロからの手探り、判断の出来ない刑事事などの方向へも進めないと思うよ」

「実際のところは無責任な暴走だろう。上司の課長に逐一報告しなかったのがその証拠だ」
「そこまで言うならこちらとも言わせてもらおう。本件の初動捜査の現場で早々に事件性を否定して転倒事故と判断、その判断の正当性を担保するために事件性の捜査も付け足した。うちの班には不動産賃貸上のクレームやトラブルの有無、他の班には痴情関係という割り振りをしたわけだが、君のところは小出明日香も色好みの客近藤誠之助も痴情の捜査段階で会って聞き取りはしているよね、被害者の周囲の関係者にあまねく当たるのは、それでなくとも基本だと思いが。聞き取りで当然彼らには会っているよね!？」

「まだだ。第一女が被害者なのに痴情関係捜査で女の小出は考えにくい」
急に校倉が手を挙げて「それ、昔ならいざ知らずLGBT、つまりレズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーなど性別を超えた恋愛関係が顕著になった現在では少し狭い考えだと思います。三角関係での怨嗟、嫉妬なども本来は視野でしようし。あ、どうも突然失礼しました」と言い、上座に向けて頭を下げた、

北方は笑顔になって「ちなみに事故説厳守の上司にはなく他の上司には逐一報告しているので、念のため。手前味噌になるが、捜査・判断には勘が必要。起訴・裁判には証拠が必須。そう心がけているんだがそれじゃダメかね？」

「警察は組織で動く、捜査に統制は必要不可欠だ」

「ご高説はごもつとも。然し一旦上司がこうと決めたら、その路線に合わない事実が目の前

「田原班には質問はないのか。俺が司会だからといって遠慮するな」

待っていたように鬼島巡査部長が拳手をして立った。

「二枚目の板書の件で一つ。被疑者の菊蔵が伊東を出奔したのが四月十八日、伸子殺害が同月二十日、富美雄轢き逃げが同じく三十日。出だしの犯行の二日目に比べて次までが十日も空いているのが気になって仕方ないんですが、もしかしたら北方係長は何か予想といいますか、意見をお持ちなのではありませんか」

「ご明察の通りで私も気になっていました。ただ、いまはこう言うしかないんです、もしかしたら殺人や殺人未遂と判定しにくい方法で、菊蔵は、すでに相続放棄をした法定相続人の何人かに襲い掛かっているのではないかと。明日からの、いえこの後すぐに始まる捜査本部の捜査の中で是非確認していただきたいことの一つです」

鬼島は満足げな顔で着席をした。それを待って、なぜ自分の班に質問の有無を確認したのかがすぐ分かるような行動に田原が出る。

「進行役ではありますが田原班を代表して北方係長に伺いたいのが宜しいですか」

「もちろん現段階で私に分かることなら何でもお答えします」

相手が礼を尽くせば自分も同様に返す。北方の基本的な対人法だった。

「容疑者三橋菊蔵と惨殺された芹澤伸子との身分関係をつなげることの複雑さは校倉君の説明で理解したのですが、これと同じことを菊蔵がやったということになりますか。係長は相続放棄した全員が菊蔵のターゲットになるとみて重大事件と喝破されたし、現実に伸子と富美雄を死に追いやっている、そうですね。聞くのが遅れましたが、山梨県警からの連絡は殺人でしたか？」

「先方の公式見解は投身自殺だと言っていましたでしたが、彼は私の見解を理解して協力を約束してくれました。富美雄を死に追いやったのは菊蔵です。出張で富美雄の口から直接に聞いています、菊蔵は事実上の養親である自分に車をぶつけて重傷を負わせ、笑った顔を見せながら救いもせず去ったが、もう一度轢き直して殺すことはしなかった。そんなことをしなくても襲撃の意味を悟って自分で命を絶つはずだと確信していたからだ。さらに富美雄は絶対にもその通りにすると。つまり敢えてその場で自らとどめを刺さなかっただけだと明言しています」

「係長は保護の要請とかされたんですか」

「病院を出るときに看護師に、さらに一ノ瀬警部補に注意をと伝えましたが、正直に言えばどのように警護しようが富美雄は死を成し遂げたでしょう。彼は、伸子を殺した菊蔵が犯行後にすぐ現れて殺人方法その他について詳細に告げるとき、次は自分の番だと確信したにも関わらず誰にも言わなかったし、これからも言わないと断言しました」

「でも係長には言った、矛盾しませんか」

「彼の中では矛盾しないんです、万一菊蔵が逮捕されて起訴、裁判に至ったとしても確たる物証が無いとしたら彼富美雄の存在は唯一の証拠、人証になります、その唯一の証拠を自分自身で、つまり自殺で失わせる覚悟だからです。私がか手立てを講じたらその実行を速めるだけだったと思います。なぜ菊蔵は養父に告白したのか、告白された養父富美雄はなぜ自殺したのか。私は、相手の自分に対する信頼や愛情を検査するリトマス試験紙と捉えます。そうでなければ二人の言動の謎は解けない。お互いの命を懸けた検査であって、その心は、あいつ一人ぐらいは信じたい、あいつに一人ぐらいは信じさせてやりたい。そういうことだ

と解釈しています」

会場は水を打ったように静かだった。

「深い話ですね。それでも知りたいですね、タブーの告白を係長にした狙いは何ですか」

「決まっているではありませんか。それは彼自身が明言しています、あなた方なら菊蔵を止められるかもしれない、止めてくれませんか。我々警察に連続的な菊蔵の犯行を止めて欲しかったからです」

「ははっ、信頼されてしまいましたね、うちの警察が。分かりました、話を戻します。菊蔵は単独で北方班同様に調べ上げるほどの知識人ですか？」

「いや、むしろ真逆の知識、能力だと踏んでいます」

「と、すると？」

「はい、ご明察の通りで、理由は分かりませんが裏で詳細な情報を提供し続けている第三者がいると考えています」

「その目星は付いていますか」

北方は暫しの沈黙の後で、「いや、時間的にそこまでは無理でした。これから捜査本部の捜査、広域捜査の中であぶりだされると信じます」

「なるほど時間的に、無理だったんですね」と突然、管理官が嬉しそうに言った。

「係長、丁寧な対応をしていただき有難うございました」

北方班は全員起立して上下双方の席に一礼をした。

「ほかに質問が無ければ、これから十五分ほど休憩を挟む。その間に管理官と僕、田原君と北方君で別室に移り、今後の捜査方針を決めて発表をする。いいね」と署長が大声で宣言をした。

8

捜査本部の方針を受けて三班は一斉に動き出した。総指揮は県警本部の佐々木警視、旧森下班は田原班と合体し指揮は田原警部補、北方班は校倉の臨時的な配属を受けて三名で佐々木、大沢両警視の直属班的存在になった。

田原班総勢十一人で広範囲を担当、刑事二名ずつのコンビを五つ作り田原は署内で彼らの指揮を担当する。三日後の捜査会議までにと早急に確認すべきことを具体的に求められている。相続放棄をした者のうち存命中の三名の安否確認と生活実態の把握がその一。生活実態は警護が検討される場合に備えてである。亡芹澤満、伸子夫妻の長男喜八郎四十五歳と長女佐和子四十一歳、それと亡芹澤和代の長女柳田美緒四十三歳が該当し、その全員が神奈川県警管轄地に現住所がある。それぞれの現地警察署への連絡は佐々木がする。同様に山梨県警とも協同を図る。二組のコンビを山梨に送り、伸子惨殺の捜査資料を精査し必要なコピーを持ち帰る。また、北杜北警察署員立会いの下で犯行現場にも行く。さらに富美雄の轍き逃げ被害の資料と自殺とされた資料にも当たる。管轄家裁で相続放棄の一括書類を確認せよとも告げられている。

北方班の二日間の任務は動く範囲としては比較的狭いので、その点は容易だ。全て静岡県伊東市内で済む。管理官と署長の勇断で許可された逮捕状と捜索令状を携えて望海荘の三橋菊蔵宅へ乗り込む。もちろん留守の可能性は高いが、出奔や犯行の動機に繋がる確証を掴むのが主目的なのだ。万一居れば確保ないし逮捕に及ぶ。この為伊東署の警察官にも同行を要

請する。とにかく起訴、裁判になれば犯行動機の解明は重要度を増す。次に菊蔵が二月五日の法律相談で頼みにした弁護士を探し、当日の様子について聞き取りをすること。最後に時間が許せばだが、北方は同人誌編集長の岸本にも会いたいと考えていた。とにかく丸二日しか与えられていないのだ。それほどまでに危機は切迫していると訴えたのは、ほかでもない北方自身なのだが。とにかく指名手配を急ぎたかった。顔写真など運転免許がある限り、交通課で容易に入手できる。北方が密かに恐れているのは、菊蔵のターゲットが相続人以外にも及ぶことだった。

伊東駅に着くとタクシー乗り場の後ろに白黒パトが見えた。制服警官と私服刑事が歩道側に立ってこちらを見ている。三人で近づくとここでも校倉は目立ったようである。驚いた様子がありとみえる。

私服の方と名刺交換をして後部座席に乗り込む。高原警部補というこの刑事は発車させる前に短い説明をしてくれた。伊東の署への連絡は神奈川県警本部の警視からで、用向きの説明の後で丁寧な協力要請をされたという。

「もちろん協力どころか本来なら共同で捜査しなければならぬ事件でもあります。ただ、この日だけは頼まれた訪問順序の変更を承知してください。坂上董弁護士宅を先にしていただいて、午後はこの三ツ矢巡査長が運転手役を続けるということ。自分には午後、違う現場検証が入っています。失礼だとは思いますがご容赦を」

「いえ、お忙しいところ突然ですみません。しかるべくどうぞ」

巡査長がハンドルを切って出発をした。

「あの、二月五日に三橋の相談に対応した弁護士が誰か、もう分かったんですか」

「ええ、あの法律相談は市庁舎の低い方の棟の二階で、原則毎月五日にやっているんです。ですから当日担当した弁護士はすぐ分かりました。しかも女性ということでしょう、市内の瓶山というところに住むお嬢さま弁護士です、坂上さん。かなり大きな邸宅にたった一人で住んでるんです、もったいないことに独身でね、おっと失礼、こちらにも綺麗なお嬢さんがいましたね」

「残念ながらわたし、下町の八百屋の娘でしかも柔道二段というお転婆です」と校倉が小さく笑った。

初耳だった澤山は驚いて校倉の肘を突いた。嘘だと思ったのかどうか。

「意外といえばスマイルという名前が読書が趣味、その上楚々とした風情などからは想像もつかない言葉のキツイ女でしてね、相談する市民からはもう一つ評判が良くなかったかな？ いや、これは悪口ではなくこれから聞き取り調査に向かう皆さんがびっくりするといけませんから予備知識として」

よく喋る男だなど、北方は内心呆れていたが、部分的には有難い情報だと思った。

着いた瓶山という目的地は急坂な道路の左方の樹々が陽を遮って藓苔類も多く落ち着いた感じのお屋敷街だった。

「この坂、歩きだったらガタさん、きつかったかも」校倉が小声で言った。

「たしかに」と北方は笑顔でうなずいた。並んでいるのだから嫌でも聞こえる。

「実はアポ取ってないんですよ」と車から降りた高原は馴染みの客のように大きな門扉の横の通用口を押し開けて中に入っていく。北方たちもためらうことなく後を追った。十メートルほど歩いて玄関前の立つと「よかった、留守じゃない、ドアがちゃんと閉まっていな

の」と、校倉が真っ先に僅かな安全上のミスを見つけた。

「開けてから奥に声を掛けよう」

相変わらず高原刑事は細かいことには頓着しない。校倉がドアノブには触れないようにして大きく開け放った。

「何ですか？ この臭い」

途端に鼻腔を襲った悪臭に校倉が後退りをして掌で口を覆った。

高原が入れ替わる形で先頭を切った。入るやいなや間髪を入れず「北方さん！」と叫ぶ。

「ええ、死臭ですね。リキヤ、ミナミ、手袋をはめろ。なるべく現場のあれこれに触るな」

「三ツ矢、車に手袋あるだろ。頼む」

「はい！」と一番背後に居た警官が走る。澤山と言えば緊張した面持ちで周囲を見渡して

「ガタさん、今日は銃、携帯してません、すみません」と小声で言った。

「遺体ならたぶん一週間は経っている、心配するな」

全員が手袋をはめた後で中に入った。

「リキヤ、確かに万一ということがあある、邸内を落ち着いて一回りしろ。それからミナミ、ハンカチかなんかで口を塞げ。気絶なんかするなよ」と軽口を叩く北方はさすがに冷静だった。

「わたし、それほど可愛くありません」

急に高原が笑い出した。彼もまた修羅場は見飽きているといった風情だ。「北方さん、面白いメンバーですね、実に初々しい」

「たしかに」と北方も軽く受けた。

悪臭の源は応接室の床に横たわっている女性の遺体だった。

「三ツ矢、車から本署へ連絡を入れてくれ、刑事課高原も現場に居ると言ってな。鑑識にすぐ来るようにとあえて付け加えてくれ」

「あの、現場保存のこと、よろしく願います」

「分かっている。一番犯行現場を荒らすのが初動の警察官だと常々鑑識がぼやいてるって話だろ？ さっきからのみなさんの言動で察しろ、よくご存じだ」

「失礼しました！」三ツ矢巡査が半ばしよげて出ていった。

「ご遺体、スマレ弁護士本人ですか」

高原が坂上弁護士と面識があるのは最初の雑談からも分かる。

「かなり腐敗してきていますがまだ顔かたちはしっかりしていますから。この人、意外に国選弁護人になっていましたね、刑事なら全員が接触経験があるほどなんです」

「ヨーロッパ風のコーヒーカップ二対に洋菓子の皿、見知った訪問客ですねホシは。争った形跡ゼロですものね」

「この子、実は生活安全課の主任なんです」と北方は進んで秘密をばらした。そうしておけば刑事特有のプライド云々の反発は出てこないからだ。むしろ所轄に小バカにされているぐらいが丁度いい。目立つ校倉なら尚更という配慮だった。

高原は微笑んで「刑事さん、大事なお客ならなぜエアコンが使われていないんでしょう。殺してから省エネを意識はしないと思うんですけど」

面白い刑事だと北方は改めて高原の顔を見た。こちらの意図を汲んで、声音まで変えて雰囲気や和らげに出たのだ。案外優れたものなのかもしれない。

「素人判断ですけど、意識的にスイッチを切ったんだと思います、腐敗を速めるために。玄関のドアを完全に閉めないで去ったのも同じ目的かもしれません」

つまり犯人は早く殺人事件の存在を誰かに気づいてもらいたかったのだ。一人住まいであれば細工をしないと数か月以上気づかれないかもしれない。しかもわざとらしくしないでそれを成し遂げるにはどうするか。いずれにせよ犯人は尋常ではない。

高原は北方を見てゆっくりとうなずいた。その心は、あなたが連れ歩いているわけが解かりました、というにある。

そこへ澤山が入ってきた。

「ガタさん、部屋数は多いですが、荒らされた形跡もなく全室が平和で普通の暮しがそこに感じられるだけでした。もちろん遺体も含めて誰もいません外に通じるドアも窓も全て中からの施錠は完璧でした。なので、玄関だけです、防犯上のミスは」

「うん、これも日常の形があるだけのところに遺体が転がっているだけだ。血痕も無いしここからは指紋、DNA、司法解剖の世界だな。とりあえず鑑識待ちだ」

「サッシ戸開けませんか、臭くてたまらないでしょ」

澤山が気を利かしたつもりでレースのカーテンが垂れているサッシ戸に向かって歩き出した。

高原が北方を見た。注意してくれというサインらしい。

「リキヤ、駄目。鑑識待ちというのは現場を何一ついじるなってこと。この死にそうに臭い空気でさえ要保存だよ」と、北方に言わせる前に校倉が代弁する形になった。

「あ。そうでした、すみません、高原さん」澤山も相変わず素直で明るい。

「玄関先に書齋らしき部屋がありましたね、移って待ちましようか」と北方が締め括った。「北方さん、どうやらこれで、うちも同じ犯人を追うことになりそうですね」

「そのようですね、この現場資料と鑑識結果を小田原中央署まで一式で送ってください。こちらからもいま現在判っている範囲で三橋の犯行資料を伊東中央署へ送付します」

「突然死とか、事件性無しというのは考えられないかなあ」澤山が首を傾げた。

「完全に無いとこの時点で断定はしない。しかし二点で事件性有りと強く推定、といったところかな、ここで接客中に病死ならなぜ客は連絡してこないのか、客を帰した後ここで病死もあり得るが玄関の半端な閉じ方に説明を付けづらい。年配で女、独り暮らし、仕事は弁護士、戸締りには神経を使うはずだからな」と北方が応じた。

校倉が澤山の腕を突いた。余計なことを言うなというサインだ。

書齋は法律書が部屋の右側の書棚、小説が左側の書棚になっていて、机と椅子が二セットある。仕事関係の机と趣味のそれは別にすると徹底していたらしい。

「このあと十数分で鑑識が来るでしょうが、どうしますか？」と高原が聞く。ずっと検証に付き合うかどうか、あとは結果次第なので次の予定の望海荘に行くかどうかについてだ。

第一次捜査権は静岡県警の所轄署にある。ただ立ち会っているだけで終わるなら、一刻も早く、岸本情報ではなく自分の手で犯行動機の解明をしたい。そう思った。

「これからすぐに送ってもらいましようか」

北方が返事をしたそのときだった。

「ガタさん、これ見てください」と、澤山が趣味の机のブックエンドが挟み込んでいる十数冊の本を指差した。

厚さがまちまちの本の中でもひととき薄い一冊の背表紙に『碧海波』の文字があつた。北方が引き出して表紙を上にして机上に置く。

「これ、ガタさんが岸本から買った最新号ですよね」と澤山。
北方と校倉が厳しい目つきで向き合つて、ゆっくりとうなずいた。

瓶山から大原町の望海荘への道のりは近く何と数分で着いた。

「奴ら何やってるんだ」と所轄の三ツ矢巡査が声を上げた。

「ガタさん、二〇二号のドアを足蹴にしていますよ。三橋居るんですかね」澤山が応じた。

「自分が処理します」と三ツ矢がドアを開けて外へ出た。

「いや、相手は二人だ、こちらで処理できると思う。君は万一の場合に備えて銃を手にして見ていてくれ」

北方の言葉で澤山と校倉が後部左右のドアから外に飛び出した。「あ、気づいた、逃げる」と澤山が一気に階段下へと走った。校倉がこれを追う。「ミナミ、君はいい！」北方の制止は無駄だった。若者のスピードは北方の想像を超えている。

「三ツ矢君、じゃ、彼らの援護を頼む」

「ハッ」官名による階級の差は所属県警や各人の職名を超えて絶対的なものになる。三ツ矢は指示されたとおりに銃を手にすると走りだした。

同じような局面は脚が不自由になってから何度も経験した。現場で部下と一緒にレベルで動けず、自分につけられた新人刑事に侮蔑の眼で見られたことすらあつた。北方はそのたびに想う、もう退いていい時機だ。

階段下の格闘はあつという間に終わった。アスファルトの上にチンピラ風の男が二人横たわっている。澤山がかい方の顎髭男の襟を掴んで問い詰める。「貴様らどこの組の者だ？ まともな会社員？ な訳はないよなあ」

校倉も少し小さめだが筋肉質の男の抵抗を排して容赦なく投げ飛ばしていたが、でかい澤山の迫力は半端なかつた。殴りかかった男の勢いを力そのまま利用しての払い腰は五輪アスリート級のものだし、受け身をとりやすいようになどという配慮もしていない。叩きつけたのだ。

「待て、もう抵抗しない、バカでかいあんたにゃ負ける」

「取り立て屋か？ あの乱暴はまともな金融業者じゃない」

「立派な会社員だよ、まともじゃねえのは、田圃付きの土地家屋を独りで相続しといてドロシした三橋ってヤローの方だ、警察なら奴を何とかしろ」

「社員なら今ここで会社に電話しろ、出たら俺が替わる。心配するな嘘でないことを確かめてやるだけだ、お前ら、空き巣や強盗じゃないんだろ。だったら連絡しろ」

ズボンのポケットからモバイルを出すと、「壊れちゃうじゃねーか、まったく」などとブツブツ言いながら操作を始めた。

「二人の名前を言え」

「俺は秋元、あつちが谷。あ、社長、三橋の家でサツに捕まりました、すいません」

「貸せ」とスマホを引っ手繰ると澤山は前置き無しに確認だけを始めた。「警察だ、秋元と谷の両名はお宅の社員だな、会社名は？」

「あと株の新城金融商事だ、手荒なことはご勘弁を」ドスの利いた声だった。

「それはこっちの台詞だ。二人とも一泊は確実だな。それとお宅には神奈川県警の者が行くことになる、場所は二人に訊く。言わない限り返さないから安心しろ」

「若いねえ、あんたも。ガサ入れ前に予告するとは清々しいや。勝手にしな、待ってるよ。できればあんたに会いてえな」

「さりげない脅しだな、タダのチンピラじゃなくてモチベーション上がるよ。じゃあな」
「おい、切るなよ」

澤山が電話を切った後で秋元が慌てた。「警察より社長が怖いんだよ、バカヤロ」

一方、校倉の投げた相手は：

「分かったよ」と尻を摩りながら上体を起こした男は不貞腐れて言った。

大殿筋を強打したときはしばらく立ち上がれない。校倉は安心して自分の相手に詰問できた。「お前ら山梨からだろ？ 吐いた方が微罪で早く自由になれるよ、言いな」

「ネエチャン、今度はもう少し体をくつつける技で投げてくれねえか、いい女にくつつかれたの、何年ぶりだろう」

校倉が使った技は体落としかった。確かに体の接触は少ない。

「分かったよ、言えば抱いて立たせてやるから素直ないい子になれや」

「甲府だ、二人とも」

澤山も何か聞き取っているが、別々に訊いて合致した部分が事実に近いはずだ。校倉は続けた。「武川の芹澤満の債権者だな、高利貸だろ」

「なんだ知ってんなら聞くなよ」

「彼が死んで表立って取り立てられなくなった金額はいくらだ、下っ端でもそれくらい知らされているんだろ？」

「下っ端じゃねえよ、俺はそれほどじゃねえけど兄貴は中堅幹部だ」

「へえ、偉いんだ。どうせ調べれば判る、正確な金額を言え」

「ネエチャンも元は同じ世界だろ？ 仲間だと思って云うよ、元利合わせて二千五百万」

「元本だけならいくらだ」

「それは黙秘だ、出資法違反がバレる」

「へえ、知ってるねえ。さすが幹部もどきだ。もういい、あとは所轄に渡して、さあどうなるかなあ。三ツ矢さん、公務執行妨害でよろしくお願いします」

「ハイ、分かりました。北方さん、もう後方支援はいいですよ」と、三ツ矢が銃口を男に向ける真似をして確認をした。

「ありがたい、もういいよ。昔、ちょっととした隙をホシにつかれて負傷したことがあってね、それ以来慎重を期している」

「そうですね。それにしても部下のお二人凄いですね、ちょっと見、美女と野獣ですけど。とくに校倉さんには惚れるわあ」

「ねらってみたらどうだ？ まだ独身だよ」と北方は軽口で応じた後で「この二人署まで連行してもらえますか？ 近くでしたね、確か」と元の真面目に戻った。

「承知しました。往復十五分もかかりません」

「リキヤ！ 三ツ矢さんと一緒に二人を連行してすぐ戻ってきてくれ」

「ハイ、こっちの合鍵どうします。ドアノブの破壊、許可取ってきましようか？」

「あ。大家さんは三軒先の自宅に住んでいます、表札は榊原、樹木の榊に原っぱの原。言い忘

れていました、すみません」

「さすが所轄、下調べ、速いですね」北方は笑顔をつくってお礼に代えた。

「ネエチャン、早く抱き上げてくれよ」幹部もどきの男が懲りずにふざけている。

「誰が抱いてなんかやるか、バカ」

校倉の顔は普段の優しい女に戻っていた。

「よう、偉い人、パトカー乗る前に一言いいか。許可できる上役なんだろう？」と、遅れて車に乗るよう押された顎髭男が北方に顔を向けた。

「ああ、構わんよ、何だ」

「今頃になって違法だの、金返せだの、法律ってやつはバカだよな。あとからの援護策もよ、何十年も高利貸を見逃しといて、急に正義漢ぶって偉そうにしてやがるが何が悪い、条件を呑んだうえでの金の貸し借りだぜ。今度のこともよ、百姓の爺が当初、田圃取られないで助かったって泣いて感謝したんだぞ。本当は田圃を守りたいなんてキレイな話じゃねえ、色狂いで悪い女に引っかけた結果だぜ、周りじゃ評判だ。いったい懲らしめるべきは、どこのどなたの方ですかねえ。それだけ」

北方はうなずいた後、手で車の中に入れと指示をした。何に対してうなずいたのかは誰にも分からない。

北方は白黒パトを見送った後で合鍵を手に入れ、校倉と二人で容疑者三橋菊蔵の部屋に入った。チンピラ騒ぎで一家の不在は確認できている。

女連れで安心したのだろうか、以前会話を交わした隣室の婦人が顔を出した。

「いつぞやはどうも」北方は、笑顔で夫人の方に近づいて頭を下げた。今回の騒ぎもさぞ怖かったことだろうと、お詫びの気持ちも込めた。もちろん聞きたいことも一つある。

「刑事さん、ほんとですよ。三橋さん、罪だわあ、何度も何度も取り立てらしい人たちが来て騒いで。もう引越そうかしらって主人と」

「なんともお気の毒ですみません、これからはパトカーが日に何回も巡回してくれると思いますからもう少し静かになると思います」

これは慰めでなくそうなるはずだと北方は確信している。警察署の近くの街で起こっている坂上董弁護士が病死でなく殺害されたと確定すれば、容疑濃厚な三橋の自宅は監視の対象になるからだ。張り込み捜査の対象にもなる。

「奥さん、この前私らがここに来た後で誰か来ませんでしたか、本人、家族や借金取り以外の人間が」この質問には北方の刑事勘の当否がかかっていた。

「あやしくない男の人ならいました、部屋にも入りましたよ、二時間ぐらい居たかしら、五月八日、日付まで憶えているのは刑事さんが来た翌日だから」

「鍵でドア開けてですか？」校倉が一気に突っ込んだ聞き方をした。

「ええ、大家さんの榊原さんちへ行って借りてきたんだと思いますよ、小説仲間の人です、確か。大家さんの奥さんも会員だそうです、ここの四軒の井戸端会議で聞いただけで、この点をご本人にうかがったわけじゃありませんけどね」

「入った人の名前はご存知ですか」名前が出れば勘は八割がたヒットする。北方は固唾を飲んだ。

「うーん、思い出せないなあ、雑誌に載ってる人だってだけ。ごめんなさい」

「いや、もうそれだけで十分助かります」本名かペンネームか分からないが、本名なら「あ

の彼しかない」北方は、容疑を確たるものにする何かに飢えていた。

二人は夫人に礼を言ってから、三橋宅の鍵を開け中に入った。

「ガタさん、窓開けますよ、暑すぎます、陽の当たり方が半端じゃないわ」

「全開していいよ、入り口のドアも開け放って来る、何かドアに挟みこむものがあるだろ」
「どんな段取りでやりますか」校倉もさすがにガサ入れは経験したことがない。

犯罪そのものがこの部屋で行われたわけではない。北方は、検察官や裁判官、さらには素人である裁判員も納得するような犯行動機を立証できるものを探したいと思っていた。

「ミナミは事件に絡む公的な通知、契約書などの書類、行動記録などを見つけて動機解明につながる分類と説明をしてくれ。俺の方は書類以外の手がかりを探すよ。澤山が戻ったらそっちを手伝ってもらおう、封筒を披くのも一つの手間だし、教えながら鍛えてやってくれ」
「ガタさんは、必ず育てようと思いますよね、手柄があれば譲ってしまうし。そういうところ、特に尊敬してます」

「なにに、自分独りでは何一つ出来ない以上、当然のことをしているだけだ」

「封筒って言えば、確定日付が問題になるときに郵便局の消印が有力なんですネ、だからリキヤには一つ一つメモしてもらって時系列順に一覧にしたいです」

「捜査会議でも説得力を持つな、それは」

「はい、しかしずいぶん多いですよ、机の深い方の抽斗にどっさり！」

校倉の整理方法はテキパキとしたものだった。先ず抽斗を机から分離してひっくり返し、畳の上に広げた。次いで農協や信用金庫など金融機関の通知、サラ金・闇金融らしきところからの封書、個人的な通常書簡、最後にDM類と振り分けていく。ここから重要な情報から披いていくのだ。

「手慣れたものだな、所でミナミは司法試験受けるまで進んだんだっけ」

北方も遊んでいるわけではなく手はあちこちを確認しながら押さえるべき情報を探している。慣れている分、余裕があるのだ。

「ううん、法科大学院に進学するお金無くなっちゃってね、親父が商売も駄目、体にも障害と二重苦になって、二人が食べてくお金稼ぐ必要に迫られたの。でも、結果オーライです、この仕事に入って良かったと思ってます。警察に入るまでの一年間は教授の紹介で法律事務所事務員もしてたんですよ、わたし。でもお給料低くて親父と二人、とても暮らしていけないので。応募動機が不純ですみません」

「署長も貴重な人材だって喜んでたよ」

「あ。やっぱり農協や信用金庫からの弁済督促の通知到達日は十二月の八日です。三橋はこの時初めて芹澤満の相続開始と自分がその相続人になったことを知ったことになりましたね。そうすると三カ月以内に、期間の初日は算入しないので応当日の前日三月八日終了までに相続放棄しないと法律上当然に単純承認が決定です、つまり相続した債務につき弁済期限到来順に弁済義務が発生していきます」

「その他の金融のハイエナたちもそれから具体的に三橋に弁済をと迫ってきたわけだ」

「さっきのチンピラの言った元利二千五百万という金額は抵当権を設定している農協や信用金庫への残債務とは別個ですから絶望的です」

「ああ、たぶん仕分けしたサラ金、闇金には他の業者もいそうだしな。だいいち、闇なら契約書も通知書も無いことすらある。おそらく平凡な一個人からすれば天文学的数字になるか

もしれないな」

「おっ、これは奥方の日記だな、三年日記で三橋直子、とりあえず三月と四月分を流し読みしてみよう、事件に繋がる記述が見つかる可能性もある」

北方は椅子に腰掛けてページをめくりだした。

互いに黙り、集中の十数分が過ぎた。

「三橋、一度は相続放棄申述書を甲府家裁に出してますよ」校倉が沈黙を破った。

「何、ほんとか。期限内に？」

「はい、二月二十七日とギリギリに近いですけど。ただ、申述書が不備だと突き返されています。再度提出が求められて、ですが。三月三日の消印。ここにその通知が着いたのが三月四日ですから残りは丸四日間」

「再提出しなかったわけか、三橋は」

「通知文の意味が分からず再提出できなかったのかもしれませんが。短いですからここで読みますか？」と校倉は書類を北方に差し出した。

通知文の要旨はこうだ。申述書を受け取ったが、申述書の内容、捺印を伴う自署、封書の文字が三通りもあり、第三者の関与が見てとれ、相続人本人の申述かどうか疑念が残るため、全て本人が自署して速やかに送付されたい。

読んだ北方は「じっさい彼一人で書類作ってないだろうな。たぶん……」とやってことばを濁したまま返した、判るだろと言わんばかりに。

「このあと訪ねる予定の岸本健一」

「彼を訪ねる意味がどうやら大きく変わりそうだな」

「相続関係書類で調べ尽くしたのも彼みたいですね」

「前回の訪問日五月七日の翌日にここに来た男というのも彼だ。その後に三橋の犯行計画が大きく変わった。そう言ってもいいだろう」

「ところで家裁に三人と予想されたようだが、ミナミは誰誰と想像する？」

暫く考えた後で校倉は「申述書の内容は岸本、氏名の自署は三橋、封書の宛名などは奥さん、かな？ 妄想ですけど」と答えた。

「捜査の発端は多くの場合妄想でいい。確証を重ねていって妄想を真実にする。妄想第一で真実を曲げると冤罪が生まれる」

「ふふっ、文芸の世界ですね、言の葉が」

北方は照れて頭を掻いた。

「ガタさんはあの日の前後で何が変わったと考えますか？」

「文芸的な表現をすれば、法の名のもとに市民を弄ぶ官憲に挑戦状を叩きつけたくなった、岸本はかつて強盗容疑で警察から酷い扱いを受けたと言っている。自分の報復感情を三橋の自暴自棄の行動を使って満足させようとしたんだ。かれは芹澤伸子事件を既に知っていたし、犯行は三橋のものだとも想像がついた。芹澤伸子、富美雄、加納光江の事件は全て五月七日以前の犯行だ。ミナミ、三橋の犯行関連でこの三県の共通点は何だと思う？」

「相続関係を称する戸籍謄本は不備になっていなかったわけだし、三橋も一応見ているはずだし、うーん、ちょっと分かんないな」

北方は言った。あの複雑な謄本を集めたのは岸本、三橋が一つ一つ中まで見るような男とはとは思えないし、第一、相続関係を証するための最初の戸籍謄本に住民票や附票を付けて

とる必要はない。あの三件に共通なのは三橋が彼らの住居や職場を知っていたという点だ。岸本は三橋の負債相続が確定的になった後で慌てて関連する人間の謄本を附票付きで全てを取り寄せ三橋に教えた。岸本は狡猾だ、「殺せ」などと教唆はしない、ただ住所だけを教えたのだ。岸本が犯行に絡むとターゲットが広がる。相続放棄をしてマイナスの相続を自分で押し付けた相続人たちだけでなく、法律の専門家でありながらいい加減な対応しかしてくれなかった有資格者たちも三橋の怨嗟の対象になったのだと。

「参加させてもらってから、うん？とわたしは疑問に思った点は岸本が絡めば全てクリアです。そうなると坂上弁護士殺しも一枚かんでますよね」

「スマイレ弁護士が接客するなら三橋一人では無理だ、中に入れてもらえない。同人誌編集長の岸本なら警戒を解くだろう。おそらく岸本が中に居る間に忍び込んだんだ、犯行は岸本が帰ってすぐに違いない」

「すみません、遅くなりました」と入口に澤山が立った。後ろには三ツ矢巡査もいる。

「おう、悪かったな、慣れないのに独りで行かせて」

「いえ。たしかに伊東中央署は近かったんですが、着いて三ツ矢さんが説明したとたん、坂上弁護士と三橋宅捜査の関連を刑事課で概略訊かれましたので」

北方はうなずくと、改めて気づいた様子で三ツ矢巡査に捜索令状を見せた。「こちらの捜索は容疑者の嫌疑が濃厚なので礼状はとってあります。後で高原警部補を安心させてください。もちろん捜査対象が同一人になる可能性が高いので近々神奈川県警の上層部からも連絡は入ると思いますが」

「承知しました」と令状を返すと三ツ矢はきちんとした敬礼をして「伊東市内の捜査には自分が脚になるよう指令されています。どこへでもご遠慮なくご用命を」と改まった。事件の重大性が解かったからだろう。

「リキヤ、ミナミが押さえて署に持ち帰る書類を選んでは。要領を聞いて一緒にやってくれ。手袋もわすれるな。早く昼飯にしたかったら頑張れ」と笑を浮かべた。

「そういえばお腹空いたな、目いっぱいだったから忘れてた」

「ミナミ、それ、落語でいう考えオチか」と北方が茶々を入れると、三ツ矢が大真面目な顔で言った。「自分も神奈川県警に移ろうかな、楽しそうだ」

「三ツ矢さん、それはゴリ押しで考えナシ」
澤山の一言で四人が一斉に笑いだした。

笑いの余韻の中で北方がスマホを操作して話し出した。「署長、田原班の山梨行き捜査員に連絡をとってもらえますか。こちらはいま三橋菊蔵の自宅でガサ入れの最中なんです、甲府家庭裁判所の職員の中に菊蔵が送った相続放棄申述書を不備があるからと突き返した担当者が誰なのかを特定してほしいんです。いえ、適法な対応なんでしょうが、その人物も菊蔵に襲われる可能性があるんです、それで一刻も早く警戒をと、ハイ。実は伊東の法律相談会で菊蔵に相談された女弁護士が自宅で殺害されました。現場にも入って確認しています。：そうですか、宜しくご手配ください」

三ツ矢が急に自分の頬を叩いた。

「そうだ、さっき車の中で受けた高原さんからの連絡ですね」と澤山も反応した。

「北方さん、高原警部補からの伝言です。司法解剖に回すことになりましたが、うちの鑑識の臨場所見を参考までにといいことです。直接の死因は窒息。ただ、そのまえに後頭部を強

打され意識を失っていたはずだと。頭に裂創はありません。強烈な衝撃が加わった可能性が高いと。流血は現場で見た通りでありません。不完全ながらの報告だとお伝えするようにのことでした」言い終えて三ツ矢は頭を下げた。

「殺しは殺しだな、これも事故じゃない。有難う、確かに伺いました」北方は無意識かどうか天井を仰いだ。

岸本が住む寿町のコーポラスは車で五分ほどだった。これなら岸本と三橋がかなり頻繁に行き来していたとしても不思議はない。四〇二号室のベルを数分間押し続け、ノックもしたが中からの反応が無い。「外出中、ですかね？」と澤山が北方の方を見ると、既に隣室のドアの前に立っていた。「見切るのが速いこと」と肩をすぼめた。「ガタさん、女の私の方が主婦は出やすいです」と校倉も臨機の対応が速かった。

校倉がノックと同時に声を出して呼びかけたからか、ドアが開いた。

「すみません、親戚の者なんですけど健一は、いえ四〇二の岸本はいつも変わらず住んでますよね」

「ええ、でもまだ退院していないと思いますよ」

「退院というと、病気か何かですか？」

「交通事故ですよ、それもこの前の道路で当て逃げされて。バーンと凄い音がしたので道路を見たら、正面衝突で助手席の女のの方が重傷でね、顔中血だらけで。よく言うじゃないですかハンドルを握っている運転手は反射的に避けるので比較的軽傷で済むとか、あれですよ」

「じゃ、健一の奥さんが？」校倉の誘導は続く。

「それが違うのよ、現場ってブルーシートか何かで隠すじゃないですか、でも上から見たら見えちゃうわけ、真由美さんならわたし付き合ってたから見間違えないわよ、別人」

「リキヤ、パトに居る三ツ矢さんに言ってるこの当て逃げ事件について確認してもらってください。搬送先の病院も分かるはずだ」と北方は小声で指示をした。

「じゃ、自分は下に居続けます」と澤山はうなずいた。

幸い四〇三の夫人からは二人の姿は見えない。開けたドアが目隠しになっているのだ。

「それで真由美さんも見舞かなんかで今日もお留守ってわけ？」

「あら、ご存知ないんですか、真由美さんは実家に帰ってるはずですよ、離婚も視野の別居とか。男って仕様が無いわねえ、何が文芸ですか、さっそく別の女と、やだやだ、もういいかしら洗濯物取り込まなくちゃ」

「ありがとうございます、お邪魔してごめんなさい」

校倉は息がかかるほどの距離まで北方に近づいて言った。「これで岸本共犯の線は崩れますか？ 下の道一方通行です、ただの交通事故じゃありませんよね」

「いや、崩れない、三橋が狙ったのはきっと助手席に居た妻の直子だ」

「すごい想像力」校倉もさすがにそこまでは妄想できない。心底驚いた。

「傷を負ってまで演出してカモフラージュということですか」

「ミナミ、ほんとに君は刑事課向きだ、実に惜しい、うちに引っ張れないのが」

「行きたくありません、ますます」

「刑事の仕事はリスクいだ、お父さんのことを思うと生安勤務の方がいい。折に触れて助け

てもらうだけで我慢するよ」

校倉は自分の迷いを言い当てられて黙った。その通りだからだ。

たぶん岸本は相談にきちんと付き合っただけでやらなかった報復を受けたと警察には訴えたいのだ。自分も社会保険労務士の有資格者なので捜査陣が創った被害者カテゴリーの中にも入る。交通事故のことはいざれ捜査陣に見つけられる。その予想に立って、三橋と岸本の共犯説に揺さぶりをかける。「奴の考えそうなことだ」と北方は首をすくめた。

白黒パトに戻ると澤山が「市民病院だそうですね、ここから車で数分のところとか」と囁いた。車内では三ツ矢がまだ何度目かの連絡をとっている。

市民病院は修善寺街道筋の冷川峠昇り口近くにある。三ツ矢巡査によれば救急患者はとりあえずここに搬送され、特殊な場合は対応できる病院まで再搬送されるという。運転中に本署の交通課に照会した結果は三橋直子が頭部強打で重症、岸本は頸椎捻挫で軽傷の部類。直子はシートベルトをしていなかったという。

「すみません、当日の担当医河原崎先生はいま手が離せないなのでお会いできません。この電話でお願いします」と受付嬢が北方に受話器を差し向けた。

救急担当医師は、三橋直子の方は開頭手術が必要だということ以最寄りの大学病院まで救命ヘリで搬送されている、岸本は明日にでも通院に切り替えることになっていると聞いていると回答をした。

「ガタさん、どうします？ 岸本に会った方が捜査的には有利ですか」

校倉が意味深長な発言をした。

北方は暫し考えた後で「リキヤならどうする？」と意外な質問をした。校倉は北方の教育癖を思い出して笑顔になった。

「自分なら重症の直子を追います、亡くなる可能性がありますが。事件に遭遇するまでの事情は聞き取りたいです。岸本は嘘を言うに決まっていますから」

「うん、もつともだ。しかし開頭手術なら再搬入先で時を置かずにかれたはずだ。つまりもう済んでいると思う。確かめるが面会許可が出るまで相当日数がかかる。事情聴取が目的ならさらに先だ」

「ガタさん、三橋には娘がいますよね、贍本によればですが」校倉が話の向きを変えた。

「ああ、岸本は三橋の妻子には会うことが出来ると新横浜で会ったときにもうそぶいていたな、三橋宅に何度も出入りしていたようだから当然だろうと、いまなら納得だ。直子の日記にもあった。名前はエミ。笑う、美しいと書いて笑美だ。借金まみれの父親のせいで金持ちの御曹司との婚約が破棄されたと記してあった」

「急報を受けて見舞っていませんかね、そうなら現住所を書きますよね」校倉はそう言うので早速受付前に立って「面会記録調べるって出来ますか？」と訊いた。

「ああ、それは一階の面会受付窓口でお願いできますか？」

「いまお入りになった入口の風除スペースにエレベーターがありますから」

「ありがとう」

札を言って振り返ると「わたしちょっと訊いてきますよ」と北方にうなずいた。

「しかし伊東のコーポラスの住所を書くなら、普通」と北方が言うと、校倉は大きく首を振

った。「娘が父親に絶望的な評価を下したんですよ、あり得ません。元居た住所を書くことは、まだ父と子の関係があり、そこがまだ自分の家庭であることを認めることになります。そんなことをしたら、自分が許せなくなりませす」

「女の発想はそうか、そういうものか、なるほど」

校倉の後姿を見ながら北方は苦笑して、澤山を見た。

「リキヤ、この後ミナミと一緒に署に戻ってくれ。明後日の捜査会議のために明日中に情報を整理してまた板書してもらいたいんだ。あ、それとこの前の板書を消さずにもう一枚増やして書いてくれ。明後日の捜査会議には山梨県警と静岡県警から人数は分からないが刑事が参加すると思うから。もう一つ、署長室に行つて今日の行動を報告しておいて欲しい。挨拶に行けばまあ、自然に訊かれると思うが。リキヤは署長とはウマが合いそうだし、安心してよ。これでもまだ指名手配しないんですかと煽つてやれ」

「はい。でもガタさんも明日は署に来ますよね」

「何があるか分からんのが現場の刑事だ。言わば押さえの指示だよ、頼む」

「それです、相手は殺人鬼なのでガタさんの身が心配なんですけど」

「奴はもう自分も死ぬ気で復讐を続けている。俺を殺してる暇はないよ、たぶん、大丈夫だ。それに大分押取物が増えて重いからこれをミナミに持たせるわけにはいかんだろ、男として」

北方はそう言うと言と澤山の肩をポンと叩いた。

澤山は何を勘違いしたのか、笑顔になって頭を掻いた。

9

午後一時、小田原中央署会議室で神奈川県警、静岡県警、山梨県警の三県合同捜査会議が始まった。

三日前と異なり上座は佐々木管理官と大沢署長の二人のみで、刑事席側では、田原刑事一課長代理は十人の田原班を率いて会場左に、その右側に静岡県警から来た高原警部補と飯山保巡查部長、山梨県警から来た一ノ瀬正義警部補と立石睦夫巡查部長が続き、さらにその右側の出入り口に近い場所に北方警部補、澤山巡查長とヘルプに付いた生安の校倉南巡查部長が構成する北方班が居並んだ。

前回とは全く雰囲気の違い管理官が口火を切った。

「長々と挨拶する気はない。この事件の異常性と重大性に鑑み、全体像の解析は後にして、前回の捜査会議後の二日間で明らかにした事件ないし情報の概要を各班長、並びに両県警の主任官に報告してもらうことにする。なお、前回使ったボード記事はそのままにして初めて来られた捜査官にも予め読んでもらっている。新情報は追加されたボードに列挙されているので諸氏のご理解に資すると思う。では先ず田原君から」

北方はこの会議は期待できると踏んだ。その最たる理由は現場の刑事に対する信頼が感じられたからだ。自分が創った物語に部下の報告を捻じ曲げていくタイプのお偉いさんではない。想わず背筋が伸びた。

「最初に県内捜査担当の一番重い結果からです。事件の発端になった被相続人芹澤満の長女芹澤佐和子四十一歳は先月二十五日に死亡していました。死因は溺死。解剖の結果大量のアルコールが検出されたことから泥酔して過つて鷹取川に落ちた、つまり事故死として処理されています。既に火葬済みであります。発見場所は横須賀市追浜本町にある自宅近くの追浜

橋の橋桁付近。なお被相続人の死後早々に相続放棄をしていたことも分かりました。因みに長男芹澤喜八郎四十五歳、亡き佐和子の兄にあたりますが、いまま横浜市金沢区釜利谷町在住。無事に福浦工業団地で働いていました。通勤は金沢シーサイドラインを利用しています。駅は金沢八景から福浦。次に容疑者三橋菊蔵とは種違いになる妹で、代位登記の形で三橋と並んでいた柳田美緒ですが、ご案内のようにその後早々に、十二月十五日に相続放棄をしています。さつさと法的なリスク回避ができた理由も分かりました。美緒の夫柳田芳次は法務官僚でした、しかも局長クラスです。臆本通り現在も鎌倉市極楽寺在住。主婦ですからほとんど外出しない生活ぶりです。住込み家政婦が別にいますので、それが可能になっているようです。次に相続人以外の関係者担当の報告です。小田原在住の司法書士の近藤誠之助ですが、仕事はほとんどないようで毎日自宅テレビ、読書、盆栽いじりだそうです。狙われやすい外出ですが、後期高齢者に入っても女好きは治らず、夜な夜な性風俗紛いの店に出掛けるとか。そもそも殺害された加納光江のバーも色気あつてのことではもう出入りしていないそうです。これは現在のオーナー小出明日香からの聞き取りです。最後に山梨班ですが、途中で署長からご指示がありました甲府家裁の担当職員の特定の件、城山悦子三十八歳と分かりました。住所は山梨市小原東で、自宅から家裁まで軽自動車通っているそうです。元々の家裁での確認事項ですが、北方班の推定通り三橋菊蔵を除き全ての相続人の相続放棄がなされていきました。控えも取ってきています。芹澤伸子殺害事件の方は山梨県警から資料を交えてのご説明があるそうですから概略は割愛します。とりあえず要旨のみ。以上です」

「つぎ、伊東に行った北方班」

佐々木管理官の声は落ち着いていた。この一日半の間に捜査班が次々に本部に獲得情報を送っていた証拠で、本部は今日の会議以後の基本方針も既に作成しているのに違いない。北方は重複を避け、さらに山梨、静岡の両捜査陣の報告に功を預け、自画自賛的な臭いを出さないようにと自戒して報告を始めた。ただ、他県の捜査陣にも事件の全貌が分かるように報告できるのは自班だけだとの認識は保ちたかった。

「初めに、参加くださった二県の捜査陣の方は最近になって所轄内の事件と三橋が関連することを知った関係で、そのつながり具合がもう一つ明確にならないと推察しますので、この広域的な凶悪事件を俯瞰して、少し長くなりますが今までの調査結果を踏まえながらお話ししたいと思います」ここで北方は本部席に目をやって、一呼吸をした。

佐々木管理官と大沢署長が揃って、了解という意味のうなずき方をした。

「三橋菊蔵は自分が相続人になっていることも知らず、また、昨年十二月九日に到達した農協の通知で知ることになってからも、自分では何が何だか分からずに彼の中で法律に詳しいはずだと思っただけ相手に次々と相談をしていきます。当初は相続の開始を知ってから三カ月以内に相続放棄をすれば済むということすら思い浮かばなかったのです。妻三橋直子の日記によれば十二月の半ばに鎌倉の柳田という女のところへ電話をしていた。日付は不明で、誰に知恵を借りたかについては日記の上で明らかではありません。たぶん一緒に登記されていた柳田美穂のところだと思えます。協力を得られなかった三橋は十二月十五日に別件で住いのコーポラスを管理する小田原の不二不動産に出掛け、ここで偶然少年時代の初恋の相手加納光江に再会します。光江は宅地建物取引士であったため彼の所謂専門家に当たります。ところが債権者代位で本人の承諾なしに所有権保存登記が出来ることを知らなかった光江は、常日頃自分が経営するお色気バーに通ってきている司法書士七十五歳の近藤誠之助を紹介し

と一緒に相談に行きます。元々の三橋の説明が不十分だったのか、それとも名ばかり専門家だったのか結果は、けんもほろろに追い返されてしまうのです。驚くべきことに三橋は分からないままこの後一と月以上の期間を空費します。伊東市が毎月五日に開催している法律相談を知った三橋は二月五日の開催日に市役所を訪れ、女性弁護士坂上董を頼りますが、詳細な法律論に困惑し、とりあえず何をすればいいのかわかりかねて、被相続人の除籍謄本をとるようにと言われます。相談会の意味を誤解し、全てやってくれると思っていた三橋は怒りとともに絶望の淵に立たされます。ここの辺りはまだ困っている夫に理解を示していたらしく妻直子の日記には同情の文字さえ見えます。三橋はそんな中で気がつき、所属している文芸同人誌『碧海波』の会長岸本健一が幅広い知識人であることを、です。実は岸本、社会保険労務士の有資格者でもありました。二月八日の電話相談に応え、その後も甲府家裁に提出する相続放棄申述書の内容の代行までしてくれた岸本でしたが、甲府家裁でこれを担当した職員は、封書の宛名、申述内容、自署捺印欄に異なる筆跡がみられ本人の自由意志に基づく放棄の申述とは認め難いとして全文自署して再提出をするよう通知し、とりあえず受理を拒んだのです。この三月三日の通達が三橋に到達したのが同月四日。相続人が相続開始を知ってから三カ月以内に相続放棄をしなければ法定単純承認での相続が決まってしまう。この期限三月九日まで残りわずか丸四日でした。結局彼三橋菊蔵はたった一人で芹澤満が放蕩三昧と農業経営の失敗で積み上げた借金の山を背負わされることになりました。山梨県警の調査によれば被相続人所有の不動産の鑑定価額と農協や信用金庫からの負債残高はほぼ一致することでしたが、表に現れていない高利でリスクな負債があったことは妻の日記と押収した督促状から言って間違いありません。その一つの例が二千五百万だということが、たまたま当班が三橋宅を捜索したその日に取り立てて来ていた業者の口から分かりました。この日を境に、金貸しはこぞって法的な、或いは実務上の攻勢に出てきます。しかも夫婦共有の財産である居酒屋の店舗に仮差押手続きが開始されたとの通知を見て、妻の直子は離婚届を置いて出ていくことになりました。日記によれば、娘の笑美の婚約も父親の借金が原因で一方的に破棄される始末。娘も母親の後を追って家を出ていきます。三橋菊蔵は、こうして自営業も結婚生活も破綻、さらに娘の信頼も失って弁済不可能な借金の中で絶望したのだと思われれます。事件の時系列から推察するに、彼はここから自分勝手な復讐心に支配されていきます。

三橋が住まいを捨てて出ていったのが四月十八日。妻の日記の終りから推定するに家族が崩壊してから七日ほど経っています。この間彼が何を思い、なにを決意したかは余人の知る処ではありませんが、その後の彼の行動は私たちにも解析の方程式を与えてくれます。先ず山梨県北杜市武川町に飛び幼少時に繰り返しいじめられた芹澤伸子を惨殺します。マイナスの遺産は芹澤本家夫婦の共同責任という想いもあったでしょう、しかも伸子は真っ先に相続を放棄して難を逃れているのです。この幼少期のいじめについては次に襲われる芹澤富美雄が自死する前に私に供述しています。彼は母親に捨てられ伸子にいじめ倒されている菊蔵を引き取って、菊蔵が中学を出て去っていくまでの間、事実上の養父になっていた独身主義者の男です。齢八十一。三橋は伸子殺害後その当日のうちに富美雄を訪ねています。富美雄は当然通報などしません。なぜ伸子を殺したのか、菊蔵の苦悩を知る唯一の存在だからです。そういう深い関係性がありながら富美雄もまた相続のリスクを教えるはくれなかつたという不信心は三橋にあったと思います。私は、富美雄もまさか相続権が菊蔵にまで及ぶとは思

いつかなかつたのだと解釈しました。それはさておき、四月三十日、三橋は散歩中の富美雄を車で撥ねます。さらにその場で富美雄に顔を見せて笑ったそうです、これも自死を決意した入院中の富美雄本人の供述です。ただ、彼は以後誰にも話さない、警察にも検事にも裁判官にも話さないと言いました。そんなことが可能なのか、彼は自分という人的証拠を自分で隠滅するから可能なのだと言いました。端的に言えば、菊蔵の育て方を間違えた責任は自分にある、ということでした。そうならいままなせ警察官の私に告白しているのかと聞きましても、連行しようとしてもその実現前に確実に死ぬ。それと判る物言いでした。その彼は、自白した通り病院で窓から身を投げて死んでいます。さきおとといの捜査会議の日に山梨県警一ノ瀬警部補からの電話でうかがっています。この辺りも後ほど詳しくうかがえると思います。

伸子事件と富美雄交通事故の間に四月二十五日発見の芹澤佐和子の溺死があるわけですが、これは先ほど田原班から報告された通りです。既に事件性が否定されて火葬さえ済んでいたということですが、私個人はこれも三橋の犯行だとみています。

そして今般の静岡県伊東市行きで、所轄伊東警察署の多大なる協力により、三橋に関する関連する二つの事件に触れることが出来ました。冒頭の説明で登場した法律相談会の女性弁護士宅を、三橋の連続殺傷事件の動機確認の目的で訪れた際、入口のドアが施錠されておらず異常を感じて中に入ったところ応接室で死亡しているのを発見しました。この時は本日参加しておられる高原警部補と一緒にしたので、この後鑑識の所見などともに詳しいご説明があると思います。これも私見では病死や事故ではなく三橋の犯行だと踏んでいます。この殺人現場を所轄に委ねて次の目的地に向かい、三橋の自宅を家宅捜索いたしました。ここで相続に関する三橋と公的機関との通信、妻直子の日記、彼を追い詰めた借金の数々に関する書証などを押さえてきましたので、後ほど是非確かめください。本部席後ろのボードを参照していただければ事件の流れが明確になると愚考します。さらにこの後、当班の初期捜査の段階で連続殺人に繋がる可能性を示唆してくれた岸本健一宅を再訪問しました。ところが最近自宅前の道路で交通事故に遭い、助手席にいた菊蔵の妻三橋直子とともに救急搬送されていきました。所轄の協力を得て市民病院に直行、二人の現況を確認したところ、運転していた岸本は頸椎捻挫のみの軽傷、一方の直子は頭部強打で開頭手術が必要と分かり最寄りの大病院へ再搬送されていきました。この後の直子の追跡調査は所轄に依頼しておりまして、後ほど高原警部補からご説明いただけると思います。この時点から先は私一人で行動しています。若手刑事二人は本日の捜査会議の準備のために出張一日で返しましたので。私が訪ねた先は、三橋直子の実家がある東伊豆町奈良本でした。三橋の一人娘笑美が母親とともに身を寄せているに違いない場所でした。

私は、この伊東へ行く前の段階では、三橋の犯行は二つに分かれるだけだと考えていました。一つは法定相続人という括り、もう一つは誠実さも丁寧さも無いと感じた法律専門家たちという括りです。どちらも彼を窮地に陥れた人間たちです。いえ、一般的な発想ではありません、彼独自の歪んでしまった想いです。ところが坂上董の殺害と妻直子への襲撃を見て、前のふたつの括りとも横断的になる括りを見出しました。男と女という括りです。確実に強い殺意が感じられたターゲットは芹澤伸子、加納光江、坂上董、そして先刻耳にした芹澤佐和子と例外なく女。とすれば、娘笑美もターゲットになり得ると踏んだのです。会って父親

への現在の気持ち確かめた次第です。

これは会議の終りに皆さんにお願いしようと思っていきましたが、ここでも触れたくなりました。三橋のターゲットになり得る複数の人間の中で命の危険度、緊急性が高いのは女だ。つまり種違いの妹柳田美緒、甲府家裁の城山悦子、そして娘の笑笑です。反対に男、芹澤満の長男芹澤喜八郎、司法書士の近藤誠之助は狙われても殺意は伴わない形だと愚考しています。一旦ここでご報告は終えたいと思います。ご質問があればいつでも伺いますので。では、失礼します」

会場は水を打ったように静まり返っていた。

これはおそらく、彼らが部分的に見ていた事件や事故が、一人の男の心の中で凶悪な形で繋がっていたということに対する戦慄に因るのだろう。校倉はそう思った。

一方、澤山は甲府でも伊東でも校倉と一緒に帰されたことについて誤解をしていたことに気づき、さりげなく二人の関係を取り持ってくれたのかも脂下がっていた自分を恥じた。北方はより高い視野から一人の方が相手の警戒心を和らげて聴取できると考えてのことだったのだ。また先方はそういう相手だと。

「次は山梨県警からの報告だが、スクリーンその他用意がある由、誰かヘルプしてくれ」

管理官の声に澤山と校倉は反射的に立ち上がった。

「自分たち新人刑事がやります」

管理官は笑顔でうなずいたが、若干のヤジが飛んだ。

「校倉、ついに刑事一課に引っこ抜かれたのか？」

「澤山、またおねえちゃんと一緒かあ、仲良しだねえ」

軽い戯れ言には本部席は頓着せず、その所為かどうかわわつてきた。ところが設置されたスクリーンに無残な伸子の遺体が映ると話し声ほか一切の音が消えた。

「えー、山梨県警北杜中央署の一ノ瀬です。横でパソコンを操作しているは立石と申します。北方班の皆さんが署に来た折に概略ご説明し、こちらのボードにも記載されているところから、ここでは前回充分にご説明しなかった事柄のみ、臨場後鑑識が取った映像を視ていただきながら補足を致します」

遺体の多角的映像、殺害現場特に室内の写真、芹澤宅周辺の動画など連続的にスクリーンに映し出される。

「現金、預貯金、ジュエリーなど金に絡むものは筆筒の抽斗の中に残っていました。そもそも物色された形跡が皆無なので、強盗目的ではないと判断した次第です。相争いの疑いも、主要相続人がほとんど放棄しており、所有権登記もなされていたことから否定的な扱いとなりました。その登記申請が事件の発端であると知り、若干捜査が甘かったと自戒している現在であります。現場に凶器はありませんでしたが、鑑定の結果、出刃と柳刃の二種類の包丁が使われていると判明しました。板前に関連する近隣の店、人間を捜査対象に入れましたが該当する結果は得られず、流しの犯行と見切って捜査本部を縮小し、一ノ瀬班のみが継続的に捜査を続けていたところでした。今回の合同捜査は我々にとっては救いの女神であります。」

ここで一ノ瀬が一息ついたタイミングをとらえた田原班の刑事が拳手をして質問をした。「新井と申します。ガイ者の遺体は保存中ですか、それと指紋採取の結果をお願いします」
一ノ瀬が管理官にうなずかれて、これに応じた。

「鑑識結果の書面は持参しました。詳細に撮影してあることと遺族の求めもあるところから火葬に同意しています。」

「求めてきた遺族とは誰ですか？」

「兄弟姉妹の中での一人残っていた芹澤富美雄です。喪主になりました。それと指紋は漏らさず採取し葬儀に参列した遺族全員にも協力してもらっています。照合の結果は遺族以外の指紋は二種と極僅かでした。もちろん保存中です。」

「その二種の一つが三橋菊蔵のものとは考えなかったんですか、彼は葬儀に参列しなかったわけで嫌疑をかけてもいいと思うんですが」

「正直に言いますと、彼は既に登記名義人になっていました。つまり遺産を継いでいるわけで、通常相続に関する骨肉の争いは遺産を受けられない、もしくはそれが少ないことで発生します。それが単独で承継している。嫌疑をかける要素に欠けると判断したのです。長期的捜査になると流しの線に一本化した直後に北方班の訪問をうけたという流れになります」

「なら、三橋の指紋がこちらで入手できれば照合可能ということで見えてくる」

「数十年間出入りしていなかった三橋ですから、一致すれば芹澤宅に来たことだけは証明できますね、確かに」

校倉が反応した。「三橋宅で押収した各種書類の中で金融機関と金貸しの督促状は最近のもので、比較的紙質が指紋を明確に残せる程度にしっかりしたものがありません。北方班は全員手袋をして捜索していましたので、もし文書の中身に指紋が出れば照合できると思います」

すると静岡県警の高原警部補も発言に加わってきた。「殺害された坂上弁護士宅に入る前にも北方班の方は同様の配慮をしていましたので、当方の採取した現場の指紋の中にも三橋のものがある可能性はあります。ただ三橋の指紋自体が採れていません」と

「この後早速三県警の保持する指紋の相互照合に入ってください。各現場に同じ指紋があれば暫定的に被疑者のものと推定できます。一ノ瀬さん、続けて」と管理官が引き取った。

「はい。伸子と富美雄に関する捜査資料でこちらにお渡しするものは立石が持参していますので後ほど。その芹澤富美雄ですが、病室のティッシュペーパーの箱に遺書というには奇妙な短い文章が遺されていました。警察の方々、宜しく願います、というもので自殺の後始末のことだろうかと首をひねっていたのですが、今日の北方班の報告で解きました。もうこれ以上三橋に罪を犯させないで、つまり早く捕まえてという意味だったんですね」

北方が大きくうなずいた。

「なお、富美雄が三橋に当てられたという交通事故に関する所轄の調書コピーなど北方さんに依頼された警官は送る用意はしたものの、その是非判断に迷ってそのままになっていたよ。うなのでこれも先ほど申し上げた資料の中に入っています。あの人に会ったらよろしくと頼まれましたので、この場でお詫びしておきます。それと富美雄の火葬ですが、関係者が一人もいませんでしたので行政の方で公的に執り行いました。遺骨の保管も同様です。最後に北方警部補の名誉のために申し上げます。富美雄に自殺の恐れがあると私、北方さんから伺っていましたのに緊迫感を持たず、具体的な予防措置をとらないうちに自殺されてしまいました。また病院の看護師も事情聴取の中で、気を付けるようにと助言されたのに嘘だと決めつけてしまったと、同様に悔いていました」

ここまで言うといノ瀬は本部席ではなく北方に向かって深々と頭を下げた。

「いえ、どんな予防策をしようとも富美雄は自死を実行したでしょう、自分という人証、それを消し去ることが彼に遺された唯一の仕事だからです」と北方は一ノ瀬を庇った。

ずっと映写を続けていた立石もノートパソコンをオフにして立礼をした。映写の中には伸子の葬式当日の模様も入っていたが、これは犯行現場に犯人は戻ることがあるという過去の例に鑑みての隠れ警察官の仕事だと判る。式の模様を撮ったというより参列者の顔にフォーカスしているのでそれと判る。

北方が校倉の顔を見ると、彼女はゆっくりと首を振った。その手には、押収した三橋一家の写真から菊蔵の顔だけを拡大した一枚があった。澤山はと言えば、目を丸くして写真を見ている。彼にとってそれは、いつの間に打ち合わせたのか、という小さいながらも衝撃的なものだった。

「では、静岡県警の高原さん」と管理官は静かなたたずまいを崩さずに告げた。

一方の大沢署長は、会議の最後に今後の捜査方針について意見を述べるためのものかどうか、右手を終始動かして何かを書き綴っている。

「伊東中央署刑事課の高原です。隣に居ますのは、鑑識との打ち合わせを続けていました飯山です。えー、昨日、北方警部補が小田原に帰る前にうちの署の方によってくれました、一昨日一緒に坂上弁護士が伊東市瓶山の自宅で遺体となっているのを確認した事件を含む一連の殺傷事件についてつぶさに解説をしてもらいました。こちらはスライドで瓶山の現場写真を映写します。次いで市内大原町の三橋菊蔵宅の周囲と室内写真。もう一つ北方班澤山刑事から照会のあった三橋直子、岸本健一両名が遭遇した交通事故現場の検証結果の内映写可能なものを付け加えてあります。これらは既に現場を見て回っている北方班には重複する情報かも知れませんが、三県の合同捜査と聞き、遠方の捜査員の便宜を図る趣旨で見せさせていただきます。飯山君、途中ストップがかかったときは連写を一時止めて」

飯山刑事が準備を終えて本部に立礼をした。

澤山は自分の名前が報告に出たことで、捜査陣の一人として公認されたような気がして嬉しくなった。校倉に比して影が薄いことに滅入っていたのだ。

「山梨県警に同じく、板書で整理されている件は省略し、重要と思われる点、および北方班から依頼を受け昨日のうちに結果を得たものを報告いたします。まず、坂上董の死因ですが、後頭部を強打され頸椎骨折を起こしての呼吸停止と思われる、また、同原因からクモ膜下出血を起こして呼吸中枢に異状が及んだ可能性もあるとされ、司法解剖に回しました。しかしその結果を待たずに事故死や病死ではなく殺人と鑑識課は結論付けています。この結論は北方班にお伝えしたとおりです。

三橋宅での指紋採取は徹底的に行い五種類の指紋に整理できました。三人家族ですから家族以外は二人に留まります。坂上宅の指紋も仕事のわりには少ない三種の指紋に整理できました。逆に女一人住いの弁護士だから他人を招じ入れなかったのかもしれない。そこから感じますことは警戒心豊かな彼女が応接室を通しコーヒーまで出しているという訪問者は誰なのかが気になる所です。そのカップの片方からは指紋が出ませんでした。飲み干しているのに、です。拭き取ったと見てよいと思います。一方依頼された岸本の指紋ですが、事故破損後連絡を受けた修理会社が工場に移してしまいましたので車中をくまなく指紋採取していません。病院には彼が退院したらすぐに連絡するよう伝えてあります、もちろん掃除や消毒をしないうちに。三橋がぶつけたと思しき車は松川湖畔ブリッジ前の駐車場で発見しました。

当然予想されるところですが盗難車でした。残念ながら捜査に使えるような指紋は採れていません。

これは一昨日の段階で依頼されたものです。三橋菊蔵と妻直子の共有になっています市内中央町の小さな居酒屋ですが、この菊蔵の共有持分につき仮差押えがなされているというところで、その債権者たる金山金融に融資残額を照会しました。もちろん電話では応えるわけがありませんので、市内の事務所に向いて提出しています。元利合計五百万円弱でした。元本など内訳や弁済記録は追って提出するという約束です。いわゆる危ない金貸しにあたる相手です」

北方はいまにして思う。もし山梨行きの前に捜査本部が出来、他の県警本部の捜査に正式に依頼ができていたなら、かなり迅速に全貌が明らかになったのではないかと。北杜の事件と伊東の事件の機動力の違いはそこでしかない。所轄警察の捜査協力があるのとないのではスピードが違うのだ。しかし早い段階で捜査本部設置に持ち込めなかった原因は安西刑事一課長の責任だけだろうか、いや、自分にもある。北方はその想いをずっと抱えていた。進退を懸けてもっと強力に署長に訴えれば良かったのだ。それができなかったのはなぜか。自分の推理、妄想を除けば加納伸子の件に事件性があると確信させる証拠が何一つ無かったことが一つ。芹澤伸子事件とのつながりについても自分で見つけたならともかく一般人の協力により気づかされたという体たらく。しかも、捜査を進めるうちにその彼、岸本が三橋の犯罪指南役だという疑いが濃厚になったのだ。岸本の件を会議の上で突っ込んで話さない理由は何か。言えば本部は彼を容疑者として引っ張るだろう。重要参考人としてならともかく逮捕に至ることも考えられる。しかし彼は警察に挑んでいるのだ、自白などするはずがない。結局法的期限が来て送検を見送るか、送検しても検事が起訴できないか、どちらかに陥るのが目に見えている。たとえ三橋の自宅や坂上弁護士邸から彼の指紋が出たとしても「そこに居たことがある」証拠でしかない。同人誌仲間の家、同人誌愛読者の家、彼がいても不審と決めつけるものはない。北方は、この一連の事件は三橋を現行犯逮捕するしか解決方法が無いと思っている。だから伊東の病院でも岸本に直接会おうとはしなかった。そうだとすると、北方は合同捜査会議に参加しているいま、大いに迷っていた。自分はいつの間にかの安西と同じ思考をしているのではないか。赤裸々に言えば、御身大切という忌むべき考え方を……

「なお、三橋自宅の張り込みは昨日から二十四時間交替で行っています。以上、報告させていただきます。ありがとうございました」

発言が終わると同時に飯山は写真の投影を打ち切った。

佐々木管理官が大きく咳払いをしてから刑事席全体を見回すと静かに言った。「用意された板書と今までの報告で県警の違いこそあれ捜査員諸君はこの広範囲にわたる凶悪な殺傷事件の全貌を理解したと思う。署長とわたしの意見は最期に回し、ここからフリー質疑に入りたいと思う。質問者の資格は問わないし、質問相手に制限も設けない、他部席への疑問も自由にしている。回答の方も質問者の氏名が無いかぎり自由でいい。ただし、挙手をして私のようなずきを得てから発言すること。これはヤジなど不規則発言で会議が乱れることを避ける主旨で他意はない。また、いわずもがなだが、発言内容を見て人事考課上の不利益を与えることはない」

ここで会場に笑い声が広がった。

第一声として「北方班長に」と声を上げたのは田原班長だった。管理官がうなずくと同時に右手を田原に向けた。これが基本的なルールになるらしい。

「伊東で三橋直子が事故を装って殺されかけた件ですが、これも三橋菊蔵の犯行と考えているわけですね」

「ええ、私は百パーセントそうだと確信しています」

「しかし、妻の直子は相続関係者でもなく、三橋が頼っていつて冷遇されたいわゆる法律専門家のカテゴリにも入りませんよね、なぜですか」

「先日少し触れましたが、二つの括りをも含める大きな括りに女というのがあるんです」

「実は聞いてもいま一つ納得がいかなかったので訊いたわけですが」

「では、少し長くなりますがご説明します。今まで三橋が犯した殺傷事件ですが、この殺の部分には芹澤伸子、加納光江、芹澤佐和子、坂上董、更にまだ死に至ってはいませんが瀕死の重傷を負った三橋直子と女に限られています。彼が創ったターゲットの中で性急に犯行に及び、それを実現しているのも女に対してです。それに比して男の芹澤富美雄、岸本健一に対しては殺意が希薄なのです。ここから次のことが言えると考えています、三橋の次の犯行は男の芹澤喜八郎ではなく甲府家裁の女職員の城山悦子と鎌倉在住の柳田美緒です。とくに種違いの妹美緒が一番危険にさらされていると思います。」

ではなぜ女、なのか。これは彼の幼少期からの人生そのものに起因すると思われれます。母親の芹澤和代は三沢という男と結婚して菊蔵を産みますが、淫乱の癖があったようで夫に飽き足らず幼い菊蔵を見捨てて、離婚届一枚を置いて三沢宅を出ていきます。菊蔵は父親から追い出され福祉役場の手で芹澤本家に戻されるのですが、そこで待っていたのは伸子の凄絶な差別といじめでした。これを不憫に想った富美雄に引き取られ扶養されるのですが、そこでの精神的な支えとなったのが初恋の女の子加納光江、ところがこの子も一言も無く彼の前から消えます。彼は長じて板前となったのち三橋直子と結婚、三沢姓をここで捨てて三橋になります。二人の間に生まれた娘が笑笑、ここまで押さえた上で今度の事件の発端に目を移します。料理以外知識も経験も無い彼が、知らぬ間に人の相続人として登記され、あろうことか金融機関から督促通知が届いた。直子の日記によれば、彼は先ず鎌倉の美緒のところへ電話で相談しようとした。詳細は本人が知るのみですが、結果はけんもほろろの扱いを受けたとのこと。偶然会った初恋の相手光江も売春もどきの醜い仕事をする女になっていた。ただでなく法律相談にも真剣に応じてくれなかった。年を明けて法律相談会の弁護士も女、法律論を語るのみで具体的には何の役にも立たなかった。岸本の援助でやっと相続放棄の届を地裁に送ったのに、不備を理由に付き返してきたのも女職員、相続期限を過ぎて見ず知らずの借金取りが大勢来ると母親と同じように離婚届一枚を置いて出ていった妻直子に、そのあとを追った笑笑。愛おしんで育てた娘も、父親の借金が原因で婚約が破棄されたと罵るばかりで信じようとか、助けようとかは一切口にしなかった様子は直子の日記から容易に察しられます。一般的、客観的に観れば、三橋菊蔵の女性感や身勝手であり、それへの恨み、憎悪は過剰です。しかし、追い詰められた人間の心の始末は誰にも予測できません。不十分ですがこれが精いっぱい分析です、あとは異常な犯行から彼の心を推察してみてください」

「はい、わかりました。いつもながら丁寧ありがとうございました」

田原が礼を尽くすとすぐに、佐々木管理官が自ら右手を軽く上げて「ぼくにも確認したいことがあるんだ、北方班長に」と言った。

刑事一同が少しくざわめいた。

「はい、何なりと」

「先日の会議で、校倉君でも難航した三橋と芹澤満の間の相続関係調査を三橋自身がやることは不可能だと回答された。第三者がそこに絡むとほのめかしてくれてもいる。確証がまだつかめないのが北方君が慎重になったと理解したが、事ここに至っては是非訊きたい。捜査本部としても、管理官の私にしても、もう見込み違いや空振りのリスク回避より、ターゲットにされた残りの人たちの命の保護を重要視すべきだと思うが、どうだろう」

北方は顔色一つ変えずにいたが、しばらく目を閉じたままであった。既に同じ予想を立てている校倉が心配そうに北方の顔をうかがっている。

「校倉君も気付いているようだね。心配しなくてもいい、彼は説明の順序を考えているだけだ。待ちなさい」

北方は、この管理官には負けたいと思った。そしてここは進退を懸けようと腹を括った。「ご信頼を戴き有難うございます。おっしゃる通り確証は何一つ掴めていません。というより、意図的な場合を除き証拠を残すような相手ではないのです。知識、能力だけではありません。過去に犯罪の嫌疑をかけられ、警察に連行され、不当な取り調べを受けたことがあり、警察に強い敵意、対抗心をもっているからです。その男は岸本健一、当班が署長の指示を受けて捜査し始め、加納光江の死が事故ではなく殺人事件だと判断したその時機に、芹澤伸子殺害との関連性をわざわざ小田原駅まで出張り、ほのめかしに来た人物でした。証として当該事件に関するスポーツ紙の記事を持ってきただけですが、彼の警察への挑戦はこのときから始まった。いまはそう確信しています」

「一昨日の捜査で岸本の車も襲われていることが判明したとの報告があったが、それと矛盾はしないのかな？ 三橋は自分の協力者まで殺傷のターゲットにしたことになるが」

会場内の刑事たちは固唾を呑んだ。管理官が直接北方を詰問している形だからだ。

「あの交通事故を装った襲撃に関しては複数の解釈が成り立ちます。岸本宅の隣室の主婦が勘繰ったような男女間の不倫の現場を見られたからという考え方は、当然採りません。

第一は、三橋と岸本が共謀して直子一人を殺傷しようとした。岸本の負傷は頸椎捻挫、二度目の電話聴取で担当医師も言っていました。エックス線検査などで所見が見られなくても被害者本人が、首が痛いと訴えていればとりあえず頸椎捻挫とするのです。つまり詐病も視野です。第二は、妻直子ではなく岸本一人を狙った。社会保険労務士でもある岸本は三橋の相談相手になっていますが結局不十分で家裁に突き返されてしまった。無知な三橋にはそう映ったかもしれません。実は直子の日記にも相談した後の膳本の見方や追加の膳本の取り方について冷淡だった様子が書かれています。このころまでは三橋夫婦の間で愚痴のやり取りができていたんですね。岸本は自分でも不誠実に気づいていて、だからこそ言い訳のために複雑な膳本取りを単独で短期間でやり終え、復讐の鬼となった三橋に提供した。一式を手渡したのは伸子殺害事件の直後、私はそう解しています。そもそも三橋は加納光江、芹澤伸子、芹澤富美雄の三名については戸籍や住民票を調べなくとも住まいを知っています。ところが芹澤佐和子については知らなかったはず。だからそう解釈しました。第三は二人同時に始末しようとして失敗した。以上は全て確証無しのは仮説、もつと冷淡に批判すれば私の妄想に過ぎません。しかし事件が重なっていくと仮説が事実となっていくきました。おっしゃる通り、もうためらっている場合ではないと思います。以上ですが、管理官、私にこれを行う決心をさせていただき感謝いたします」

「よく決断してくれたね、これで私のわずかに残る迷いも払拭された」

大沢署長が初めて小さく拳手をして「北方君、私にも一つ確認させてくれ」と言って、管理官の顔を見た。管理官の質問はもう済みましたか、という意味だ。

「どうぞ」と管理官が微笑した。

「三橋は実の娘まで殺す可能性がある。北方君は高い確率でそう思っているのだね」

「はい、三橋は既に普通の人間の感覚を失っています。だからと言って心神喪失者とかそういうものとは違います、犯行計画をやり遂げた後彼は自ら命を絶つ覚悟のもとに動いていません。選択したというよりはそれしか残されていないからそうしています。精神的にも経済的にも生きていく支えを失った状態と言った方がいいかもしれません。だから彼を追いこんだ相手を制裁しているんです。制裁されている相手も、それを知った一般人も、きつとなぜ殺傷と言う報復を受けなければならぬのかと合点がいかないでしょうが、彼にとっては実質殺された自分と同等の報復で、何ら矛盾はありません。そう解釈しなければ今回の犯行を理解できないと思います。ターゲットの社会的地位や親戚、妻、娘、そう言った属性は何の意味も持たないのです。ただ不思議なことに女と言う性別だけには拘っています。容赦がないのです。妻直子が離婚届を置いて家を出たのは、生みの親でいまは亡き和代と同じ行為。心から信じ愛したのに一言もなく家を出ていった愛娘笑美の行為は、少年時代の加納光江と同じ。三橋笑美も必ず狙われます。ただ、この笑美こそ殺人鬼になった三橋を説得できる唯一の人間という一面があります。芹澤富美雄の件でもあった一人ぐらい信じたい、一人ぐらい信じてくれる人が欲しいという、殺し殺される場面でも残っている、互いの淡い想いがそれです。その、三橋と向かい合う細い糸を持っているのは笑美だけです。署長、これも私の妄想に過ぎないかもしれませんが、回答になりましたでしょうか」

「有難う。少なくとも私は理解できた」と署長がうなずいた。

「質疑がこれ以上無いようなら三十分程私と署長は抜ける。再開した際に、捜査本部として管理官として、今後の捜査方針と諸君にやってもらいたいことを発表する。この間各県警代表で保有する資料などについての情報交換をしておいて欲しい。以上だ」

管理官が立つと場内はハチの巣を突いたような騒ぎになった。その中で本部席の二人が部屋を出ていく直前に北方班の方を向き、劳いの会釈をした。異例のことだと、北方は深々と頭を下げた。

きっかり三十分後に戻ってきた二人は、緊張した面持ちで席に着いた。刑事が一斉に着席をする。佐々木管理官はゆっくりと立ち上がると最重要事項から切り出した。

「三県の県警本部に連絡をとり、以下の二点の合意を得た、一つ、三橋菊蔵を全国指名手配とする。二つ、全面的な公開捜査に踏み切り、マスコミを呼んでの緊急記者会見を行う。期日は本日午後七時、会場はここだ。会見というより一方的宣言に近い。北方君の報告の通り本件のそれぞれの事件に付き、未だ三橋の犯行という確証は何一つ無い。大沢署長と協議した結果、万一见込み捜査など社会的な非難を受けるような事態に陥ったときの責任を部下に押し付けるわけにはいかない。そこで会見の場には私と署長が出る。記者の質疑には捜査上の秘密ということで応じないと決めた。

次に岸本健一は重要参考人として任意出頭を求める。自白などする甘い男でないとは思いますが、とりあえず実際に呼び出すことで何かが変わる可能性はあると思う。この取調役は余人には無理なので北方警部補に当たってもらう。静岡県警が所轄署で取り調べをと求めてきた

場合でも取調の現場に北方君は居て欲しい。拘束は二日でいい。その後は見張りや尾行で彼を事実上閉じ込めて欲しい。彼に気づかれたり見られたりしてもかまわない。むしろその方が効果的だ。高原警部補、宜しくご配慮を。

最後にターゲットにされている人たちへの警告と保護、配備について本部としての希望を伝える。最も危ないとされる三橋の妹柳田美緒は神奈川県警、鎌倉署にも出動を要請するが、この捜査本部からも部下を連れて田原君に出張って欲しい。その中から君が選んで鎌倉に隣接する横浜市金沢区釜利谷在住の芹澤喜八郎の警護担当員を送ってくれ。尚、美緒の夫は法務官僚ということで県警本部が既に柳田局長に告げている由、下手な嘴を入れさせないためにも県警本部から片桐警部という硬骨漢を現地の警護のため派遣してもらおうことにした。田原君、荷は重いと思うが期待している。

甲府地裁職員の城山悦子への警告と保護については山梨県警に一任する。ただこちらの本部に報告、連絡が欲しいので田原班から巡査部長以上のものを二名派遣してほしい。人選は田原君に任せる。最後に三橋の娘笑美の許には校倉君に行ってもらいたい。女性同士ということとで常に彼女の身辺に居られることと、父親に対する感情などを聞き出し、自首を勧める役まで担えるかどうかを見極めて欲しいからだ。澤山君は女性二人に万一のことが無いようにと、伊東中央署の警察官とともに警護に当たって欲しい。高原警部補にこの件、是非とも承諾を願いたい。澤山君、前回は電車で現地に向かったそうだが、今回は署の車を使って任務を全うしてほしい。

本部に残って出張った刑事たちからの連絡に対応したり証拠資料を整理する人間が欲しいので田原君、二名ほど人選してほしい。できれば逮捕術や狙撃は不得意でも事務処理には長けているといった貴重な人間がいい。あ、狙撃と言えば襲撃を受けるおそれが実際化したときは必ず銃を携帯するように。各指揮者はこの点に留意のこと。今までの事件を鑑みるに、凶器や殺傷の方法が多岐に及んでいる。今まで銃器の使用が無かったからといって、今後無いという保障はないのだから。以上だが、詳細を訊きたい責任者はいつでも本部二人に照会してもらっていい」

10

「あなた、顔色が悪いようですけど大丈夫なんですか？」

夕食を済ませた後で晩酌をしている北方に妻の百恵が心配そうに訊いた。

この日の合同捜査会議の後、大沢署長に呼ばれた北方は、彼から「組織上の不手際で北方班には大分無理を強いた。今夜は若手二人も君もゆっくり休め。管理官も田原も承知だ。明日からはまた面倒をかけるんだ、少しでも心身を休めてもらわないと罰が当たる」と、ねぎらいという名の指令が出ている。

「百恵、この事件が片付いたら」と、いつもの大き目の猪口の酒を呑み干した。

「はい、何でしょ」

「満五十と少し早いが退職しようと思う。もう俺のようなデカの時代じゃない。疲れた。それにまた、今回も経験した。部下を護りながら捜査現場で動くという、上司として最低限の義務が果たせないということだね。修練を重ねた逮捕術も柔道も剣道も軸足がダメでは活かせない……」

「あなた、注ぐわ」と徳利を持つ百恵が一つうなずいた。

「第一、走れないんだ」

「お仕事のこと、直接には分からないけど、もう十分頑張って、功成り名を遂げたと思っています。性分でもいつも陰の苦労ばかり背負ってらっしゃるけど、わたしは尊敬してますよ、警察官としてのあなたも、家庭人としてのあなたも」

「珍しいな、そこまで持ち上げられては、照れる」

この時、時代物の柱時計が午後七時を告げた。

「ちよっとテレビを点けてくれ、確か大沢はWNNが記者会見の模様を取り上げてくれるはずだと言ってた」

民放だがいわゆるキー局ではある。番組もニュースだけではなく驚くような内容のものを揃えて視聴率を上げている。北方自身はこういう報道に頼るのは好きではないが、上層部には何か捜査上の戦略があるのだろう。そう思わせるに足る管理官だった。

三橋の事件は「あなたはいま！ 何を見たことになるのか」と題された番組の、何と冒頭だった。映像を視れば会見場所は予告通りスタジオではなく捜査本部の会場だった。大挙して押しかけているのはずの記者の数は十人未満。管理官と署長が入ってきた。リポーターが言う。「緊急過ぎた発表で駆け付けたマスクミ関係者は極僅かでありません。テレビの前の視聴者は明日以降のマスクミ報道より先に警察の発表を知ることになります」

北方は気がついた。今夜から新聞社、雑誌社、テレビ局がこの報道内容の真偽を確認するため小田原中央署に馳せ参じることになるだろうと。故意に相手を限定しスクープ記事を与えたのだ。

「凶悪な犯人やその協力者がいまこの発表を視ている必要はない。ただ、これからはお前たちの自由にはさせない。本日夕刻、神奈川、山梨、静岡三県の合同捜査本部は、三橋菊蔵、元居酒屋経営者、五十歳を殺人四件、殺人未遂二件の容疑者として全国に指名手配をした」ここで三橋の顔写真を画面いっぱいに映し出した。それはすぐ小さな窓映像に切り替えられ、佐々木管理官のバストショットに戻した。「三橋、お前は包丁で叔父の妻を惨殺し、幼馴染を叩き殺し、従妹を溺死させ、法律相談に応じた弁護士を蹴殺した。養い親でもある伯父を車で撥ね重傷を負わせて自殺に追い込み、離婚を望んだ妻を、交通事故を装って殺そうとした。この所業はもはや人間ではない。鬼畜すら悪寒を催すだろう。何が自らが受けた傷への報復なものか、報復とは受けたと同等の害を与える仕返しなのだ。お前はただの殺人鬼、警察は名誉をかけてお前を追い詰める。覚悟して自首をしろ、それが人間に戻る唯一の途だ。加えてこの殺人鬼に悪知恵を与え、事実上彼を教唆扇動しておきながら我関せずと善人を装い、剩え自ら被害者を装っている狡猾な男に告げる。今後は家に居れば張り込みを続けて目を離さず、外に出ればあからさまにどこまでも尾行する。お前の自由にはさせない」

ここでリポーターのアップに切り替わった。五分間の容疑者への告知。当初から局側との打ち合わせにあった制約なのだろう。或いはどこか別の高いところからの命令なのか。北方には分からない。しかし、「宣戦布告」なのだから目的は果たしている。発表そのものは是非、言葉の選択、発表方法の良し悪しなど、この後の批判、非難は渦を巻くに違いない。それすら効果として期待している節がある。これはきつと、各所で何度も再生されるだろう。三橋や岸本が知って何を思うか。これは一つの博打であることは疑いが無い。

北方は自らテレビを消して酒を注ぎ足した。

「この事件、説明したのはあなたですね、きつと。これで結果がうまくいけば、その功績、

褒章はこの人たちのもの。悪ければあなたですわね、矢面は」

「だから、結果如何ではなく決めたんだよ、退職と。もう、とてもついていけない。しかし、この佐々木警視という男、ただものじゃないぞ。俺はお前の言う通りに矢面に立たされるが、結果が悪ければ、まだ若い彼の警察官としての未来は真っ暗になる」

「：わたしもお酒、いいかしら」

「ああ、新しいの、つけたらどうだ、たまには大いに飲もう」

「冷じゃダメ？ いま出してるこれ、銘柄米から造ったお酒なのよ、じつは」

北方は頬を緩めてうなずき、「まるで呑兵衛の台詞だ」と笑った。

百恵がキッチンから持ってきたのは一升瓶ではなく小洒落た造りの五合瓶だった。残りを二人で全部飲んでも健康に響く量ではない。

「少し興を殺ぐけど、いい雰囲気だから聞いちゃおうかな」

「何だよ。怖いな」

「退職金、どのくらいかなあと思って。ほら波留の卒業までまだ四年近くあるしき」

「はははっ、人を温めておいて急に冷やすな。うーん、二十歳から三十年奉職しているから二十万以上はあるかも。確かじゃないけど、校倉南という婦警といま一緒に捜査しているんだが、父親を扶養するためにどこが一番安定しているかを調べて警察官になった子でね、どこかで聞いたような気がするんだ。ま、辞めてみれば確定する」

「わたしが貯めたのが一千万だから何とかかなるかな」

「おいおい、そんなにヘソクリしてたのか」北方は呆れた顔を作った。

百恵は小さく笑うと、「あなたはタバコも吸わないし、飲み歩かないし、女もいないし、旅行もしない。経済的には手のかからない旦那様でしたからね」と冷を飲み干した。

「つまらない男だな、世の男たちが言うところの」

「でも、主婦としては楽でしたよ、だからまた、看護師として若くなくてもいいというクリニックか何か探すわ、これでも暇なときに専門書読んでたのよ、ずっと」

「結婚してからずっとか？」

「ううん、あなたが仕事中に銃で撃たれてから。警察官は、いつまた、こういうことが起きるか分からない仕事だと、現実的に理解したのよ」

片桐はうなずいた後、酒瓶を手にしたが妻に注ごうとして止めた。「百恵、注ぎ難いからもっと大きい器にしろ、ご飯茶碗でもいいから」

「じゃ、コップ持ってくる、二つ」

素早く立ってキッチンに向かう妻の後姿を追いながら北方は「すまん」と、つぶやいた。「いよいよ明日からか」狙撃は得意な方だが、まだ人を撃つたことはない。撃ちたくもない。しかし、心の銃には実包を装填しなければ鬼畜と化した二人の容疑者に太刀打ちできない。北方は天井を仰いで覚悟を新たにした。

「ミナミ、男の自分の方から誘うべきだったな、ごめん。でも、何か嬉しい」

合同捜査会議の興奮をそのまま背負って二人は上司公認の息抜きに感激したうえ駅近くの居酒屋に来ていた。

「一応、わたしもリキヤの上官の一人だし」と校倉は中ジョッキを突き出した。

「ははーっ、上官、ごちそうさまです」澤山は笑顔で軽く応じた。

「あ。それは別だから、男にはプライドとかいう面倒臭いものがあるでしょ」
「先輩でもあるよな、ミナミ」

「さっき自分から口にしたでしょ、男から誘うべきだった、御免ねって。わたしが一番嫌いなセリフ。ほら、早く乾杯だつてば」

澤山はうなずいて、ジョッキをチョンと当てた。軽口は叩いているものの加納光江事件からこの日の会議までの間、刑事一年生として知恵熱を患い続けている。風采が上がらない上司北方は神がかつた妄想力で事件を解明し終には県警本部を動かしたし、突然現れた格好がよい喧嘩っ早い女校倉は広い知識を持つ仕事の出来る奴で、自分は二人の足元にも及ばないと思ひ知らされたのだ。それでも落ち込みたくはない。一年後の俺を見てくれ、それまで評価は固定しないでくれ、そんな気持ちで毎日の仕事に向かっている澤山だった。

「やっと来たな、ガタガタ班と刑事課の一部でバカにされてた北方班」

「あのガタさんをバカにするって、バカか、そいつら。うちの生活安全課の評価は正反対だよ、小田原中央署でピカイチのデカ。でもガタさん本人はバカにされても評価されなくても、警部補なのに部下一人以下で窓際扱いされても全然気にしていないの。もう十回ぐらい捜査のお手伝いしているけど愚痴や人の悪口を聞いたことないよ。事件の解決だけを見詰めてる。わたしが唯一尊敬している刑事」

「そういえば安西って刑事課長見ないね、ずっと。ガタさんの天敵みたいな男」

「ああ、刑事課の人はまだ知らないか。彼はもういないよ、県内の他の警察署に異動になっている。これ、内緒だからお口にチャックだからね」

校倉はここで残りのビールを一気に飲み干した。

「あ。注文入れてくる」と澤山が気を利かした。

「だいじょうぶだよ、わたしが飲み干すとすぐに追加が運ばれてくるから。それよりツマミ、遅いなあ、あいつを脅かすか、怠慢だから」

澤山は眉唾だと思つたが、驚くことに本当に中ジョッキが運ばれてきた。

「早いね、助かる。でもツマミが遅いぞ。早くしないとこつちが摘まみ出すぞ、翔君」

「面白い、いまの、座布団一枚。すみません、南さん、急ぎます」

二十歳未満と思われる男子店員は頭を下げて戻って行った。

「もしかして知り合い？」

「一年前偶然補導したの。生意気に殴りかかつてきたのでぶん投げてやった。ここで飲むようになったとき、追加ビールが必要になるとすぐ出て来たの。彼がちょこちょこ見張っていたのね、基本的にはいい子よ」

「好いちやいけない、年上の女」

「リキヤ、投げられたい？」

「残念でした柔道の段位は一つ上です、自分は。でも、いつか一緒に汗かきたいな」

「ちよつとそれ、人前で言うなよ、誤解される」

「あ。エツチか。なるほど」澤山は話題を変えないと自分がとんでもないことを告白しそうで怖くなった。「ところで人事異動なのになぜ、安西のこと、内緒なんだ？」

「一つはこの大変な捜査状況下で刑事課を動揺させないため。もう一つは、田原課長代理を発奮させて、課長職が務まるかどうかを試したいこと」

「それなら分かる。今度の会議でも彼を名指しで立てようとした、なるほど」

「もし内部から登用できないとなると他から異動で課長が来るはめに陥る。刑事たちはそれを嫌がるし、何よりも大沢署長がそうしたくないのよ」

「ガタさんでいいじゃないか、署長まで偏見？」

それは澤山がずっと不思議に思っていたことでもあった。

「課長にしようとしたとたんにガタさんは辞職してしまいわ。彼の責任感がそうさせるの、署長はそれを百も承知ってこと。だからといって、他から来た課長がガタさんを使いきれるかどうかは大いに疑問。安西がやっていた嫉妬に因る嫌がらせは彼だけのものじゃないでしょ、下手をすればガタさんは去って行ってしまおう」

「へえ、でも、そうかも、管理官もテレビ使って良いとこ盗りしたし」

校倉が何か言おうとしたときに注文済みのツマミ五種類がいつぱんに来た。

「祥君、結局大学はどうなったの」

「入りました、私立だけど。お金かかるのでバイトでここ。夜間は時給いいので」

「よし、今度他の店に呑みにつれて行って行ってやろう、入学祝で」

「やった！ もちろんこの彼は居ませんよね、その日」

「ええ」と澤山を見て微笑んだ。

澤山は空になったジョッキをバイトに突きつけて「ビール」と大声を出した。

「ミナミ、あいつ未成年だろ？」青年の後姿を見ながら小声で言った。

「わたし、お酒とかアルコールとか言ったっけ？」

酒でないなら一緒に食事かと、澤山の心配はどこまでも続く。

「リキヤ、佐々木管理官、いや、タカちゃんはそのなちっぽけな気持ちであれを担当したんじゃないよ。何度も言わせるなよ、何の確証もつかめていない事件なんだぞ。結果が出なかったときの、内と外からの責任追及は半端じゃない、見込み捜査で、しかもマスコミを使っていたずらに社会的不安を煽ったと言ってるね。それを誰に負わせるの？ タカちゃんは自分のリスクを覚悟で犯人逮捕優先に踏み切ったのよ、見損なうな、あの警視どのを」

「分かった、分かった、ミナミには敵わないよ」

澤山は、もう仕事の話は止めようとつまみを口にした。ビールじゃないのにほろ苦かった。それでも、私服に戻った校倉のバストショットを目にしながらジョッキを傾けられるだけに至福のひとつときを感じている自分がいた。

澤山が運転する覆面パトで伊豆半島の中心都市の一つ伊東の中央署に着いたのは午前十時過ぎだった。出迎えたのは昨日別れたばかりの高原警部補と飯山巡査部長の二人。北方はここで校倉、澤山組とは別行動になる。飯山に導かれて行く二人は所轄警察官とともに東伊豆町へ向かい、三橋笑美の監視と警護に当たる打ち合わせに入る。

高原は北方を刑事課長に紹介した後で取調室に案内をした。中には誰も居ない。

「今朝の七時に岸本を重要参考人として任意出頭の形で署に連行してきました。全然抵抗しませんでしたよ」と高原は胸を張った。迅速性の誇示らしい。解りやすい男だとは前回感じ取ったが、問題は成果の方だ。

「そうでしょうね、確たる自信の持ち主ですから」

「で、すでに初回の取り調べもしました」

「さすがですね、静岡県警が羨ましい」お世辞ではない、職務制度的な羨望だった。

「さすがというのは北方さんの慧眼です。奴は全く動じない、常套的な脅し文句など通用しない。言ってみれば受けて立つ横綱相撲でしたね、申し訳ないが今のところ収穫ゼロです。午後は真打にお任せします。中でご一緒してもいいですか」

なにやら高原の姿勢が低すぎて気持ちが悪い。岸本は刑法、刑事訴訟法さらに憲法の人権規定など関連する法律は読みこんでいる。そうさせたのはきつと、かつて味わったという身に覚えのない容疑での警察の容赦ない取調だろう。小説執筆という趣味が学習のモチベーションを高め、推理小説を創る中で実際の犯罪を二次元で数多く経験しているのだ。出会いの日に岸本から買った同人誌で読んだ彼の犯罪小説は完璧だった。誌面の都合なのか中編小説で原稿用紙百枚程度だった『或る日突然に』は、見込み捜査の恐ろしさを訴えていた。原簿に基づくストーリーは読者を恐怖感に陥れるほどの迫力があつた。彼を知らないで取り調べに臨んだら、おそらくイライラさせられるだけで何一つ掴めないはずだ。ただ、静岡県警にも、伊東中央署刑事課にも、また高原個人にもプライドはある。地元で起きた殺人事件の捜査で他県の捜査陣にイニシアティブを握られるのは面白くはなからう。北方はよほど配慮して言動しないとイケないなど、ここで肝に銘じた。同時に、澤山、校倉組はうまく立ち回れるだろうかと少しく心配になった。校倉は大丈夫だろうが直情径行型の新人澤山が気になるところだ。

「じつは北方さん、上の判断で早々に家宅搜索令状が出ていまして、午前中には岸本宅のガサ入れが終わると思います」

「岸本にはその旨告げているんですか？」

「署に着いてからいちおう伝えてはいますが」

「なぜ自分を立ち会わせないのでと咬みつきませんでしたか？」

「それは無かった、ですね」

隠せない人だ。おそらく事実は違うだろうと北方は思った。

「で？ 彼はいま」

「事実上拘束しています」

「留置場ではないんですね？」

「奴はこそこそ逃げるタイプではないと、そこは確認しましたから別室です。刑事課の婦警を話し相手に付けています。昼飯も好みを聞いて出しますよ、なにしろ任意という建前なので」

解りやすい狙いと配慮で北方は思わず顎を撫でた。

「そうそう中間の報告が入ってましてね、芹澤家関係の謄本類は全く無いそうです」

あるわけがない。謄本には発行日付が入る。岸本は全ての謄本を郵送で取っているはずだが、家に残しておけば三橋に報復のターゲットを教えた時期が分かってしまう。状況証拠に過ぎないが岸本がそれをよしとするはずがない。

「大丈夫ですか」と高原が、確証が何一つ無いということの不安を顔に出した。

「私はともかく、あの佐々木管理官は判断を間違えたりしません、大丈夫です」

北方はあえて管理官の名前を出して笑顔を作った。上の地位にある警察官ほどリスクは避けるという組織の常識を裏返せば、不安はなくなる。そういう意味で慰めになる。

一方澤山と校倉の二人は、前日も世話になった三ツ矢巡査と飯山巡査部長が乗る地元の白

黒パトの後に付いて国道百三十五号線を熱川に向かって南下していた。

「もう少し大きな警護を予想してたんだけど、意外だった。ミナミはどう感じた？」

「一人娘だからでしょ、三橋の。ガタさんが危険を警告しても一般常識から言って殺害は無
いだろうと踏んでるわけよ。しかたないでしょ、所轄の判断なんだから」

「でも実際に妻の直子は襲われて未だに意識不明の重体だぜ、娘だって……」

「夫婦はもともと他人。笑美は自分の子、愛娘」

「いいよ、たとえ俺一人でも、銃を携帯してるし、護って見せるさ」

「歳は二十一、たぶん可愛い」と校倉は笑った。「わたしとは大違い」

「だといいいけど」と澤山はとりあえず校倉の軽口に応じてみせた。

「ところでリキヤは射撃うまいの？」

「訓練用の標的相手ならかなりいい方かな？ まだ人を撃ったことはない」

「無いに越したことは無いよ、そんなこと」

そのとき北方から連絡が入った。「リキヤは運転中だろうから校倉に伝える。本部から各
ターゲットへの警告と警護が管轄署の手で昨晩のうちに始まっている。田原班の合流は今朝
からだ。現地熱川について様子が判明したらすぐ本部にその旨一報を入れること。以上だ。
こっちの岸本との対決は午後からだ」

「了解しました」

「信用ねーな、念押しか」と澤山が口を尖らした。

「安心させるためだわ、バーカ。案外小さいね、リキヤの度量というか、器というか」

「そうだな、悪かった」やはりナーバスになっていると澤山は即座に自省した。

「そういう素直なところ、気に入ってる」

「ありがと。あ、緊急自動車じゃ無くしたな、もう現場が近いつてことだ」

先導の飯山車に付いて車はトンネルを出てすぐのY字路を右折した。いわゆる旧道でにわ
かに田舎的な環境になる。対向車とのすれ違いが難しくなるところで三橋直子の実家に着
いた。

「ミナミ、銃は？」車を降りてすぐ澤山が言った。やや凛々しい目になっている。

「シヨルダー」

「え、ホルダーって脇の下のかよ、気づかなかった」

「そんなところに銃ぶら下げて笑美って子に会えるかよ、肩バッグの中！」

「ジヨークだ、行くぞ」

何処までお調子者なのか校倉は急に不安になった、現場である調子は危ないと。

「ヘンだ、昨夜から警護の巡査が一人居るはずだ」と飯山が掌で二人の前進を制した。

「自分は裏に回ります」と三ツ矢巡査が銃を抜いた。

「一人じゃまずい、澤山さん、一緒に」

「はい。呼び捨てでどうぞ、現場ですから」澤山がすぐに三ツ矢に添って動き出した。

「校倉、君は平気か？ 銃の扱いは？」

「ヤクザ、チンピラ相手は意外と慣れてます。銃の腕は後で賞状を見せられるレベルです」

「なんと、カッコイイこと。行くよ」と姿勢を低くして玄関先へと飯山は進んだ。

ここからは自分の判断で動くしかない。正直なところ、素手で闘ったことは何度もあるが
銃撃戦の経験はない。「親父、万が一のときは御免な」と校倉はつぶやいた。

飯山は身の大半を隠しながら足先だけで玄関引き戸を押し開けて、校倉にうなずいた。突入するという合図だ。校倉もうなずいて安全装置を外した。飯山の後について飛び込む。静かだった。だから聞こえる、時計が時を刻む音だ。「まさか、爆薬？ 自分の娘だぜ」と男言葉で口には出さずに驚いた。

「校倉、周囲に気を配って援護頼む、巡査が倒れてる」

校倉も和室の中を見た。警官のホルダーに銃はない。手にもしていない。

「だめだ、息もしていない、脈もない、心肺停止だ」

「静かに、先輩、隣の部屋、たぶん爆弾」と校倉は中廊下を前に進んだ。時限爆弾なら犯人がその場にいるはずがない。そういう判断だった。

「待て、校倉！」

「飯山さん、娘さん居た！」

二人の声が重なったタイミングで、家の周りを確認した二人が中に入ってきた。

足首、手首をきつく縛られ口を粘着テープで塞がれた笑笑が畳の上で仰向けになって倒れている。気を失っているのか、眠っているのか、それとも……。恐ろしさのあまりか、失禁もしていた。

「息もして、脈もあります」と校倉が言い、口のテープを剥がし始めた。

「リキヤ、部屋の隅々をよく見て。時限爆弾があるかも」

「三ツ矢、救急と本部に連絡！」

笑笑の介抱は校倉に任せて飯山は隣室に駆け込んだ。爆薬の有無が優先なのだ。

校倉は笑笑の枷をほどこきながら耳を澄ませた。柱時計の音に似ている、振り子だから少し歪むのだ。

ほどこき終わって抱き起した時だ、意識が回復した笑笑が床の間の上にある柱時計を指差した。場所的に不釣り合いな時計だ。柱から外して細工をしたに違いない。勇気を出して近づき中を覗くと間違いは無かった。

「隣じゃない、狭いから一目で分かる」と澤山が戻って来た。

「リキヤ！笑笑さんを御姫様抱っこで外に、なるべく遠くに避難。爆弾が仕掛けられてる、早く！」

校倉は笑笑の脚が萎えていると踏んだのだ。

「だけど、俺男だぜ」

「力のある男から頼んでるんだよ、バカ。急げ、死にたいのか」

「ほんとにあったのか」部屋前に戻った飯山も血相を変えた。

「あの柱時計にセットされてます、処理班も間に合わないかも。でも周りのお宅まで比較的時間隔が空いてます。とにかく避難が先だと思います。どんな仕組みが知らないけど解除法なんてしよせん分かりません」

飯山は時計内を見てプラスチック爆弾だと推定し、校倉を見てうなずいた。

「三ツ矢、俺と一緒に殉職警官を外へ運び出そう、緊急だ、気張れ」

笑笑は既に澤山が運び出した。校倉は、度し難い犯罪者三橋に凄まじい怒りを感じ始めていた。

飯山と三ツ矢は安全と見られる距離まで離れるとすぐに両隣の家に入った。非難を促すためだ。後ろは畑、前は広い庭と道路。爆弾の威力がどれほどなのかは素人には分からないが、

校倉は、娘や室内に入るだろう警官を殺傷する規模で充分三橋の目的を果たせると考え、隣家にまでは大きな影響は及ばないと踏んでいた。

周囲に救急車やパトカーがひしめき合うように集まった直後、丁度避難から十分程経ったころになるが、時限爆弾は騒然とした周囲をあざ笑うかのように爆発した。三橋家の建物のガラスをことごとく破壊したが、壁や屋根を吹き飛ばすほどの威力はなかった。

「リキヤ、本部とガタさんに報告を入れて。ガタさんには所轄署から情報が回るとは思いうけど念のため」校倉が虚ろな表情を見せて告げた。

「ミナミ、その涙は何だ？」右手で校倉の肩に触れた後で澤山は覆面パトに向かった。

「あんな縛り方をして娘の身体をバラバラに吹き飛ばそうとする父親って何なの？ 絶対許せないよ、三橋ってバカは！」

校倉は父親次郎が三橋のように鬼畜化したときの自分の心理を想像して涙が溢れ出たのだった。「わたしならたぶん自分の手で親父を殺す」その思いが切なかった。もしかしたら笑笑はいつそ自分も被害者として死んでもいいとさえ思っていたのかもしれない。縛られていても何とか逃げようとした形跡が全く見られなかったからだ。それは笑笑の絶望の度合いを教えてくれる。校倉は涙を一層溢れさせ、拭おうともしなかった。

取調室で椅子に座っている岸本はこれ見よがしに足を組み、両の掌を頭の後ろで合わせて天井を見ていた。高原が隅の補助机の前で怒鳴りたいのを抑えながら睨んでいる。入室した北方は、ふたりを交互に見て、つい微笑をしてしまった。誇張が売り物の政治マンガにありそうな光景だからだ。

「おやおや、ようやく御大の登場ですか、お久しぶりですね」

岸本は組んだ手足を元に戻しながら言った。敬意を示したつもりか、それとも臨戦態勢に入ったということか。口元はとはいえ、ふてぶてしい笑みを湛えている。一方の高原係長は大分プライドを傷つけられたようだなどと、北方は即座に感じ取った。

「一瞥以来だな、小田原駅新幹線口。ずいぶん前のように感じるが、まだあれから一ヶ月も経っていない。お互いに長い、長い日々だったな」

眼は岸本から離さずに、ゆっくりと北方は椅子に座った。

「任意出頭だから、気に入らなくなったらすぐに帰るから」

「好きなようにしたらいい」

「ちょっと前も出ていこうとしたんだ、そしたら北方さん、あんたが伊東にまで出張って俺に会いたがってるってこの人に聞いて、とりあえず待ってた」

「光栄だね、推理作家の先生に待たれていたなんて」

「読んだのか？ 僕の『或る日突然に』を」

「ああ、買ってすぐに拝読した。完璧なので中編小説なのが残念だった、これが読後感だ。とくに取り調べの場面のディテールの緻密さ、容疑者にされてしまった主人公の心理描写が秀逸で読んでいて思わず自分が彼になったような気がしたよ」

「取り調べの前奏曲としてのお世辞と分かっているけど嬉しいね、そこまで言われると。別の長い作品も見せたくなる」

高原は二人に背を向けながら書記役のようにしているが、事件と無関係な小説から話し始める北方に少しく苛立っていた。その北方が、昼食時に高原に念押ししてきたことがある。

必ず最初から最後まで録音しておいて欲しい、さらに録音後に、無駄な会話などと解釈して決してカットしたりしないで欲しいと。しかしそれにしてもと思ったそのときだった。北方が岸本の胸元に直球を投げた。

「もう見せてもらっているよ、あなたの全身全霊をかけた新作、渾身の犯罪小説をね、しかも憎いことに現在の警察機構の隙間をえぐるという警察小説にもなっている。読者は最初、そのことに全く気付かない。代償はかなり高くついたけど、見事に引き込まれた」

岸本が急に顔を引きつらせた。頭で謎解きをしている。そんな感じだった。

「そんな作品書いたかなあ、タイトルは何？ 記憶にない」

「まだ六十五歳、軽度の認知も入ってないでしょ、あれだけの犯罪を思いつく、頭脳は明晰じゃないか」

「だからタイトルは!?」岸本は苛立ち露わにして机を叩いた。

「過剰なる報復。まだ終わりが見えない大作でね、著者は本名で岸本健一。表に出ている主役は犯罪者の加納菊三」

高原は北方の言う「かのうきくぞう」を加納光江と三橋菊蔵を併せた仮名だと捉え、上手いなあと、口元をほころばせた。加納菊三がもともと三橋の筆名だとは知らない。

「もういい、嘘だ。僕はそんな作品を書いた覚えはない」

「じゃあ、もう少し言えば思い出すだろう。よく陥ることだけど、自作にほれ込み過ぎると上手の手から水が漏れる。読者は中盤で気づいてしまうんだ。真の主役は登場しているようには見えない作者の岸本健一だということがね」

「読者の解釈は自由だ。妄想で疑うのも許される。そういうことなら怒ったりしない」

「そんなに謙虚になりなさんな、あらゆる警察官が舌を巻くほどの狡猾さだ」

「笑わせるな、それが誉め言葉になるほど警察は勝ちじゃない。はっきりに言えばバカだ」

「ほう、例えばどんな？ 具体例でもあげてくれると助かる。私らをバカというならそれが利口な人間の優しさというものだ」

「偉そうに取り調べてる北方さん、あんただってそうだ。僕が芹澤伸子事件と加納光江の被害を関連付けるヒントをやらなかったら気づきもしなかったんだろ」

「ああ、気づくにしてもだいたい時間要したろうな。しかし気づかなかったら、それはそれで警察を改めて小バカにして独り美酒を堪能できたんだろ？ 当初考えたあなたの捜査への協力と見せかけたいたずらはその程度のものだ」

「悪いか、うちへ訪ねてきた刑事二人はホントにダサかった。利口にも優れものにも見えな、とくに北方さんは風采のあがらないポンコツ風だった」

「おい！ いい加減にしろ」と高原が凄い形相で立ち上がった。北方には岸本がどんな口をきこうが我慢してほしいと予め頼まれていたのだが、さすがに密かに尊敬の念を抱くようになっていた北方が面罵されていては我慢できなかった。

北方はゼスチャーで高原を制して、落ち着いて続けた。

「ところがそのバカどもがまともな反応を見せたのであなたは別のゲームに着手した。あなたは三橋菊蔵の相続放棄の期限が切れて三月九日になるとすぐに三橋に相談された相続関係の調査を始めて短時日であらゆる謄本を手にしていった。なぜ？ 聞くまでも無いよね、自分の作家としての、ないしは社会保険労務士としてのプライドのためだ。やれば簡単に出来る、俺は優れている、あの時は忙しくて面倒くさかっただけだと自分を納得させた」

「何を言い出すやら」

「まあ聞け。その謄本の全てを三橋に手渡すことにした直接の、強い動機は別だ。芹澤伸子が四月二十日に惨殺されたからだ。三橋の憎しみが自分にも及ぶと察知したからだ。弁解のためにも味方であることを報せるためにもそうしたんだ。そう思いだすと、三橋の想いを遂げさせるために協力したくなつた。子供だましの優越感ではなく、警察権力への挑戦を凶つたんだ、違うなら言ってみろ、是非聞いてみたい」

「実に面白いがそれをどうやって証明する。第一手渡したとして何の罪になる、知人から頼まれて相続に関する謄本を掻き集めて手渡した、それだけの話だ」

「いつ？」

「四月二十二日だ。だからそれを知って何になると訊いてるんだ、北方迷刑事に」

「何にもならんよ、得られたのはあなたの動揺だけだ」

「バカにするな、動揺などしてない。僕を誰だと思ってる」

「意気地のない卑怯者だと思ってるが、不満かね」

「小バカにして怒らせ容疑者から理性を奪う、未熟な警察官の常套手段だ、がっかりさせてくれるよ、あんたも。僕は帰るよ、くだらん」

「ああ、どうぞ。すぐすと、早々に尻尾を巻いて逃げるのか。所詮三橋程度の人間しかあやつれないんだ、あなたは警察権力に頭脳戦を仕掛ける凄腕、そう買いかぶつてた自分を恥じるよ。ほら、さっさと逃げ出せ。少なくとも泣いて追い駆けたりはしない。君に愛想をつかした真由美さんが実家に帰ろうとしたら泣いて引き止めにかかったという君とは違う」

北方は三橋宅の隣人からの聞き取りを利用した。そこまで調べ上げたのかと勝手に思わせるのが狙いだ。岸本の妻の名など聞き取りした主婦の台詞で初めて知ったのだ。

「誰に聞いたそんなこと、でっち上げだ。実家には遊びに行っただけで、もうすぐ戻る」

「奥さんが帰ってくるなら、他人の連続殺人に協力なんかしないだろ、死刑になるかもしれないのに」

「教唆や幫助で極刑があるか！ デカのくせにそんな知識も無いのか」

「心神喪失に陥った三橋を道具として実行行為をした著者岸本が間接正犯として裁かれるという筋立てもあるだろ？ そうなら岸本の方が死刑、三橋は無罪だ」

「素人作家の僕のヒントが無かつたら何もできなかった警部補殿がなんと偉そうに」

岸本の唇が怒りに震えている、いや、いつの間にか追い詰められている自分に苛立っているのだと、高原はチラ見を繰り返しながら快感さえ覚えていた。

「ああ、自分の情けなさに呆れている。しかしあなたの情けなさには、さすがに負ける。自分の手は汚さず無知な男の内に秘めた憎しみを利用して想いを遂げ、自己満足に浸っている岸本健一という作家にはね！ 実に醜怪なオナニストだ」

「その手は食わないってさっき言ったろ！ 何が内に秘めた憎しみだ、ポンコツ刑事に分るなら秘めた憎しみでも何でもない。だいいち何を秘めていたんだ？ 知りもしないで、言葉遊びを少なくとも僕には仕掛けるな」

「根底には女性蔑視と無理解、感情的には女というものに対する度を越した憎悪、それを行為として表面化させたのが報復、復讐だ。偶然だろうが、この秘めた憎しみは、作家の岸本、行為者の三橋双方にあった。だから共感したんだろ」

高原はここでうっかりうなずいてしまった。ガサ入れの報告の中で離婚の届出用紙が見つ

かったことは聞いている。詳しいことは彼らが押収物を手に帰って来てからでないと分からないが、北方は既に知っていたのかどうか。

「三橋の憎しみの方は分かった。しかし僕には該当しない、真由美とは上手くいってるし、僕は女そのものに興味がない。興味がないから愛も生まれえない。愛のないところに憎しみは生まれえない」

「愛なんて気安く使うな、残酷な人殺しの指南役の分際で。自分の女房にバカにされ相手にされていなかったあなたは、あちこちで作家を気取って女に言い寄り、その都度逃げられていたんだろ？ 女に興味がないとは笑止千万だ。もつとも三橋を捨てて逃げた直子を言いくるめたんだから多少、誑し込めるテクニクはあるようだがね」

否定するのも馬鹿馬鹿しいので、北方は小説の台詞もどきは無視するつもりだったが、口が勝手に滑り出し、怒りで口をパクパクさせ言葉も出ない岸本を見ているうちに追い込みに掛かった。

「三橋の最初の犯罪、芹澤伸子殺害は粗野で無知なものだった。それゆえに遺体が空恐ろしいものだったんだが、四月二十五日発見の芹澤佐和子殺害以後は知能的な殺傷に変化している、伯父の富美雄、心の恋人加納光江、ここ伊東の弁護士坂上董、妻の三橋直子、愛娘のはずの三橋笑笑、富美雄以外は全て女だ。一体何人殺させる気だ、そのちっぽけな自己満足のために、歪んだコンプレックスのために」

「知らん、第一利害関係が無い人間ばかりだ。前にも言ったが、新聞に載った犯罪記事は切り取ってコレクトしているから大体知っているが、あくまでも趣味の小説のためだ。そうそう、関与している証拠は？ あるんなら見せながら追い詰めたらどうだ、言葉のゲームは嫌いだってさっきも言っただろ、無能な北方さん」

岸本は、左手で利き腕の右拳を抑え込んでいた。既に感情のコントロールが利かなくなっている証拠だと北方は捉えた。岸本のような男は黙秘ができない。それは警察の前ですぐで舌を巻いている姿に等しいと感じるからだ。だから取調という攻撃には反論で応え、警察を凹ませて自分を上位に置こうとする。反論を繰り返しているうちにポロが出るとも知らずに。北方には自信があったのだ。

「冒頭でもあなたに警告した。自作にほれ込み過ぎると上手の手から水が漏れる。こっちは状況証拠以外、物証、人証を含め何の証拠もない。最初の素人丸出しの惨殺事件。あれは三橋の真正正銘の単独犯だ。感情の爆発以外の何物でもない無防備さだ。だから調べ直せばきつと何か確証は出るだろう。しかしあなたを指南役を務めてからの彼の犯罪は完璧にすぎた。粗野で無知な三橋一人では絶対不可能だとバカなはずの警察に気づかれました」

「それで短絡的に同人仲間の僕、岸本に違いないと幼稚な判断を下したわけだ」

「三橋の相続と贖本の件を知っている、既に面識があつて人殺しをしている男に親しく近づける間柄、三橋に警察の嫌疑がかかったと知ってその直後に家主から容易く合鍵を手に入れる三橋の留守宅に入れる男、法律に詳しく、様々な凶悪犯罪の口を知っている人間、その一部をわざわざヒントとして警察に教えに来て警察の無能ぶりを笑いたいと思うほどに警察を憎悪している人間、三橋の妻を自分の車の助手席に乗せられる男、気難しい女弁護士が自宅の応接室に招き入れる関係者、これだけの条件を備えた者がさらに女に対する過剰な憎悪を持つという三橋との共通点がある。いくらバカな警察でも岸本健一以外に思い浮かばないんだよ、残念なことに。策士、策に溺れる。まさにあなたのためにあるような言葉だよ、

自称推理作家の先生。あなたの演出と指導のお陰で、証拠を残さずに想いを遂げている三橋、彼を起訴に持ち込み裁判にかけられるかは未だ不確かだが、彼は最後には自殺するはずだ。捕まる前に、裁かれて死刑になる前に。あなたはそれさえ織り込み済みでシナリオを書いたはずだ。それで人的証拠は絶無になる。しかしね、あなたに対しては出来る、あなたの状況と状況証拠を丁寧に積み重ねることでは有罪にできる。少なくとも僕はそう思っている」

突然、岸本が手を叩き、大口を開けて笑い出した。

高原は向きを変えて岸本の小さな動きまで監視し始めた。北方は岸本に襲われた場合、利き足が不自由なだけに防御しにくいと思うからだだった。

「あの大男が目の前で涙をポロポロ流してだ、どんなに生まれながらの貧困が辛いかわからない子供が惨めか、どれほど社会が冷淡か、それより何より母親を含めて女というものがどれだけ憎くて堪らないか、訴えてきたんだ。それが自分のことのように僕の胸に激しく伝わってきた。だけどね、そのとき僕が言ったのはたった一言だ、あなたは僕が『碧海波』に毎号載せていた推理小説を読んでなかったのかとね。人に自分の小説を読んでくれと言うと罪になるのか？ 冗談じゃないよ。以上だ。退屈になったからもう帰るよ、北方さん」

半ば引きつるような笑い方をしながら立って岸本が出口に向かい始めたとき、北方が立ち上がって言った。

「今日みたいに八畳の和室の中に居る人間を爆死させるのにトリニトロトルエンの火薬は量的にどれくらい必要なんだ？ 出来れば時限爆弾でやりたいとして」

高原が一瞬目を丸くした。

「TNTなんて使わないね、変形して細工しやすいプラスチック爆弾を勧めるよ、それがどうした？」

岸本は自作の小説の話だと思っただけらしい。北方は彼の作品を買った最新号の一作しか知らない。そこには溺死にしか見えない殺害が背景になっていた、つまり芹澤佐和子殺害と同様の手口だけしか載っていない。

「三橋が娘を殺すために今朝実際に使ったんだよ、有意義な情報を感謝する」

傍らの高原がドアに飛びつき二回連続で叩いた。サツと入ってきた若手刑事は二人。「ぶちこんでおけ」という高原の声に、岸本は二人に左右の腕を掴まれ廊下に連れ出された。

「北方、こんなことをしていいと思ってるのか！ 僕をなめるなあ、逮捕もせずに代用監獄にぶち込む気か！」その岸本の声があつという間に遠ざかった。

「お疲れさまです」

高原が丁寧なお辞儀をした。

「いえ、お恥ずかしいかぎりです。で？ 三橋の娘はその後」

「いまは気持ち落ち着かせるべくこの市立病院で安静に。抱きかかえて救った彼もりっぱですが、飯山の電話では校倉君が爆死の恐れがある中で、男真っ青の活躍だったそうです、あの可愛い顔の女性がねえ……」

「みんな無事なら何よりです、お陰様で」と北方はホッとした顔で頭を下げた。

「ただ、夜通し警護の警官が殉職しました。しかも拳銃を持ち去られています」

「次のターゲットは鎌倉の柳田美緒です、三橋はより一層急ぎでした」

「県警内の国道百三十五号と伊豆スカイラインは検問を実施中です」

「いや、多分もう神奈川県内。犯行後検問されないようにとの時限爆弾でしょうから」

高原はギリッと歯噛み音を立てて悔しがった。

「高原さん、私はすぐ鎌倉に向かいます。熱川の現場検証が終わりましたらデータを小田原までよろしくお願ひします、それと三橋笑美の警護もよしなに。なにせ唯一の生き証人になりましたので。もしかしたらですが、現場で岸本を見てる可能性も」

「分かりました、しっかり護ります。では北方さん、鎌倉まで例の三ツ矢巡査に送らせましょう」

「いや、まだうちの二人、小田原に向けて走っていないはずですから」

「あ。そうですね、確かに」

北方は笑顔で会釈をした後で、ゆっくりと携帯電話を手にした。

11

「ガタさん、疲れたんだね、眠ってるよ」

国道百三十五号線を上る車の中で校倉が後部座席の北方を心配そうな目で見て言った。

「ミナミ、自分もよく間違えたよ、考え込んでいるときのガタさんは眠っているように見えるんだ、邪魔するな」

「そうならいいけど、あのずるがしこい黒幕の岸本って奴を拷問するでもなく合法的に取り調べたんでしょ、頭使ったと思うな、想像もつかない」

「おい、拷問なんていつの時代の話だよ。たしかに取調現場にいたかったっていう気はするな、自分はまだ、取り調べ現場自体、経験していないし」

「まあまあ焦るなって、刑事人生始まったばかりのリキヤじゃないの。ガタさんは確か、三十年のキャリアだよ」

「ミナミ、他の世界は知らないけど警察じゃキャリアって別の意味あるだろ」

「あ、うん、いまのは経験という普通の意味」

校倉はふと管理官佐々木貴仁のことを思った。キャリアとはまさに彼のことだ。突然降ってわいたような結婚話。即座に可能性を吟味したが、どの方向からしても承諾は無理だった。それでも来年は三十歳、相手は小さな頃兄のように慕っていたタカちゃんなのだ、惜しい気が払拭できないでいる。

「別にバカにして言ったんじゃないからな、ただの話の流れだ」

澤山は急に黙った理由を誤解したようだ。可愛いところあるなと校倉は微笑んだ。

「ミナミ、君の実力は知ってるが現場で無茶はするな、自分の命も大切だ。リキヤもだ、でも良くやってくれた、有難う。高原さんから褒められたぞ、二人とも」

急に後部席から北方が声を掛けてきた。やはり眠ってはいなかった。

校倉が右手で小さくガッツポーズをし、澤山は大きくうなずいて微笑んだ。

「ところで三橋笑美はどうだった？ 現場で。いや、救った後でもいい、何か話せたか？」
「個人的な見方になるけど、彼女、縛られ転ばされた場所で死んでもいいと覚悟したみたいですよ。助けも呼べず手足を縛られたままでも芋虫みたいにして少しは移動できるはずなのにその形跡がなかったから。泣きじゃくったのか、目の周りが腫れぼったい感じでした、管理官の三橋菊蔵と名指しの宣戦布告の報道、視たそうです。しかも自分を警護してくれた巡査が父親に殺されるシーンも見る。たぶん、全てがイヤになったんでしょね、わたしは彼女の絶望に共感できます」

「あの時のミナミの涙はそういうことか」と澤山。

「彼女、かなり理性的だったわけか、そうならなおさら可哀想だな」

「はい。たぶん法廷に出てもきちんと言言できる女性だと思います」

「そうか、じつの娘が被害者で人証、まだ物証が見つからないから起訴、裁判に持ち込める唯一の証拠なんだ。もしかしたら岸本の姿も現場で見ているかもしれないし、名前まで知っているかどうかは別として」

「すみません、それ、確認していません」

「彼女が生きているだけでいい。緊迫した中でそこまで思い浮かべるのは無理だ」

「リキヤ、力入れて感心してるけど、遅いよ、重要性に気づくのが。ま、その証拠を危険地帯から担ぎだしてくれたんだからプラスマイナスゼロか、失礼しました」

「何だよ、偉そうに」それでも澤山の顔は笑っていた。

「ガタさん、任意だから一時解放されますよね、岸本の奴、笑美さんを狙いませんかね、証拠隠滅が目的で」

「岸本は自ら手を下すほどバカでは無いし、流血を現場で直視する度胸も無い。だいいち高原さんはもう留置したままにするよ、自白するまで奴を外に出すことはない」

「でも手ごわいのでゲロさせられますかね」

「マナミ、言葉が汚い」澤山が茶々を入れた。

「心配するな、あいつのプライドを完全に砕いておいた。屈辱感から立ち直れないよ、その程度の男だ、岸本という奴は。追い込みは所轄の方が上手いと思う。それに、岸本の推理小説が載っている同人誌碧海波を全て押収して、いままで三橋が犯した罪の手口が載っているか検証してもらうことにした。高原さんは燃えているよ、大丈夫だ」

「でもそれで逮捕に踏み切れたら所轄は良いところ取りですよ、ほとんどガタさんの功績じゃないですか」と澤山がハンドルを叩いて悔しがった。

「大変なことは背負い、その結果、得た功があれば人に譲る。ガタさんの人生哲学だよ、リキヤ」校倉が振り返るようにして北方を見た。

「ここまで辿り着けたのは、みんな君たちのお陰だよ」

北方は静かにそう応じると、再び目を閉じた。本当に眠りたいのかもしれない。この一連の凶悪な事件は予想をはるかに超えて北方の心身を疲労させていた。

カーナビとは便利なものだと北方はつくづく思う。三橋の種違いの妹美緒の夫柳田芳次の住所を打ち込むだけで、最短距離で導いてくれる。それを可能にしているのが地球の上空を回っている人工衛星だというのだから驚く。

車中で管理官と連絡をとったところ、ターゲットにされていると考えられる美緒以外の三人、甲府家裁の城山悦子、小田原の司法書士近藤誠之助、相続放棄をした横浜在住の芹澤喜八郎は警護の成果か、無事に過ごしているという。三橋は東伊豆の犯行現場から鎌倉へまっすぐに向かったと、北方はみている。根拠は、捜査の手が間近に迫り目標達成を急いでいると感じているからだ。彼は達成以前に死を迎えることを覚悟の上で動いている。とすれば自分で犯行の優先順位を決めているに違いないと。

午後七時極楽寺の現場に着くとすぐにがっしりとした体軀の指揮官らしき男が駆け寄ってきた。

「北方さんですね、県警本部の片桐正義です、伊豆からの直行、お疲れさまです」
管理官が剛の者と評した警部だ。若い二人はサツと敬礼をした。

「北方良道です、宜しくご指示願います。警部、失礼ですがお名前は漢字で正義感の正義ですか？」嬉しそうに半ば微笑みながら確かめた。山梨の一ノ瀬警部補も正義だった。

「ええ。警察官にはかなりいるみたいですね」

「ぜひ一緒に正義を稔らせましょう」

「はい。とりあえずあの輸送車の中で防弾チョッキをつけてください。かなりの数を揃えてきています。ホシの武器は警察の制式銃だそうですね、佐々木警視から聞きました」

「現地の警官が一人殉職してしまっていて、彼の銃が奪われていました、うちのこの二人が所轄と一緒に現場に突入して確認しています」

「ここでは殉職者は出しません」

片桐が胸を張ったそのとき、いつの間にか近くまで寄って来ていた男が大声で言った。

「当たり前だ、見つけ次第射殺するからだろ、警部」

「北方さん、この人が美緒さんのご主人、柳田さんだ」と紹介し、次いで「このスタッフ」と北方班を紹介しようとした。

「下っ端はいい。あんたか、三県を跨ぐ今回の事件を解明したのは。とてもそれほどの刑事には見えないが、感謝すべきなのか、それとも遅すぎると怒鳴るべきなのか」

「ちよっ」校倉が食って掛かろうとしたのを澤山が反射的に腕を掴んで制止した。

「何だ、その顔は！ だいいち何で女がここに居る。殺人犯を殺すのにも男女共同参画なのか、柔い話だ」

柳田の歪んだ口が止まらない。

「お言葉ですが局長、女性である奥さんの寝室にさえ入って夜通し警護できるのは婦警だけです。トイレまで付いて行くことが出来る。それとこの校倉巡查部長は並みの男より頼りになりますよ、現に東伊豆の現場では時限爆弾を発見し女性被害者を爆発前に救い出している。女性蔑視は法務省トップキャリアの局長には似合いません」

北方が局長を持ち上げつつもたしなめると、柳田は鉾先を片桐に戻した。

「どうなんだ、返事をまだ聞いていない。撃ち殺すんだろうな、警部」

「生かして逮捕、裁くのは警察ではない。これが刑事警察の原則です。もちろん正当防衛や緊急避難の場面では例外ですが。あと、言わせていただきますが、どのような警護をするか、また、誰々をその任に充てるかは警察庁や各県警に第一次的な判断権があります。またそうでなければ現場で刻々変化する状況に対応できません。釈迦に説法ですが、局長といえども捜査指揮という越権はお控えください」

佐々木管理官が会議で言ったように、権力に容易に屈しない硬骨漢の面目躍如たる物言いだった。校倉は胸がスツとして小さく笑った。

「どいつもこいつも口だけは達者だな、犯人の特定が遅れて、その間何人も死なせておいてでかい口を叩くな。まあいい、勝手にやれ。但し結果がわるかったときは覚悟しろよ、徹底的に報復するからな」

口角泡を飛ばして更に悪態をついたあと柳田は、ブツブツ言いながら踵を返した。

「あの人を見てると法務省って何する処だっけと、首をひねるわ」

「校倉、よく堪えたな、君ならもっと彼を凹ませたろうに」と北方は笑いながら顎を撫でた。

本部の指揮官の前ではさすがにいつもの狎れた呼び方ミナミは使わない。

「澤山が止めたからですよ、凄い握力なんだからもう、皮下出血しそう」

片桐は笑みを湛えて、「このメンバーでずっと捜査してきたわけですか、羨ましい。柳田の言葉じゃないけれど、全員がそんなに凄い人と思えないところが凄い」と言った。

「それ、誉め言葉ですよね」

校倉が演技なのか、無邪気な顔を見せて笑った。

「指揮官をいつまでも縛り付けてはいけませんので、とりあえず警護の配置その他を教えてください。」北方が仕事の話に戻した。

片桐の説明によると警護の形はこうなっている。

極楽寺二丁目にある柳田邸へ向かうには二本の道路で検問すれば済む。大仏坂切通し方面からの道と極楽寺駅北側にある小学校前で北側に分岐する道である。もちろん車で来る可能性は低い。人相が割れていることは三橋も知っているはずだからだ。検問担当は所轄警察。庭には県警本部差し向けの狙撃手が二人、築山などやや高い位置二点から監視する。邸宅正面入り口に所轄刑事二人、樹木に覆われた山側には同じく所轄二人。邸内には小田原の刑事二人を配置してある。全員が防弾着を身に着け、銃を携帯している。柳田夫妻は常に寢所と一緒に場所は二階。柳田は、刑事が寢室だけでなく二階に行くことすら許していない。もともと命の危険が迫れば態度は変わるだろう。つごう片桐を含め九人が警護していることになる。

美緒が局長の妻でなかったらこれほどの警護はしていなかったに違いない。北方は、そう思ったとたんに気がついた。

「警部、うちの田原課長代理はどこに配されていますか？ 派遣された員数ももつと多かったですか？」

「釜利谷の芹澤喜八郎の警護に移りました。じつは佐々木管理官から指示が来ましてね、田原さんを指揮官にして手薄な芹澤宅の警備を充実させるようにと。ご存知のように鎌倉と金沢区の釜利谷は近いです。ここの警備が厚いと分かれば犯行の順序を急遽変えるおそれがある。そういうことでした。ま、納得ですね、実はここの警備の充実も柳田が本部に直接ダメ出しをして来たからなんです。狙撃のプロの投入なんて民間人の警護じゃやりませんよ」北方はうなずいて、「分かりました。では、輸送車の方で準備をします」と若手二人の方に目を向けた。

ちょうど機動隊員を大勢差し向ける際に使うような車両で広い庭園の端の高木が集まったあたりに停車していた。かなり目立つ。三橋に警護しているぞと報せるようなものだが、これも柳田あたりの注文かも知れない。実に面倒な男ではある。

「ミナミ、左脇に銃が射し込めるホルダにしろ」と澤山が指示をした。

校倉はクスツと笑って、「はっ、そうします、上官殿」と応じた。

「ミナミのことが心配なんだよ、今日だけ上役にしてやれ」と北方も笑顔だ。

「いつも思うんだけど、首から上を防弾する装具ってありませんよね、どうしてなのかな、これほど科学が発達したのに」

「上官、部下のミナミに答えてやれ」と北方は防弾チョッキを着けながら茶化して応じた。「頭を狙い撃ちできるほど銃撃が上手い奴が少ないからさ」

澤山の珍答に北方と校倉が同時に「なるほど」と言い、顔を見合せた。

と、そのとき、片桐が車内に顔を突き出した。

「北方さん、三橋笑美が救命ヘリで鎌倉に来ます、佐々木警視から連絡が入りました」
「まさか自殺を図ったとか？」校倉が訊いた。

「いや、ちやうど市立病院に居たからで、聴取に入った高原警部補に頼んだそうです。凶悪犯の娘だから出来ることがある。次に予想される犯行現場に行かせて欲しいと」

「自首を勧めたいのかも」と、とっさに澤山がつぶやいた。

北方は眉一つ動かさず、「それで静岡県警も認めたわけですか」と返した。

「ええ、そのようです。一刻も早くということでも病院屋上のヘリポートを使うことに。高原さんが付き添ってます」

「まさか、この敷地内に降りるとか」と澤山。

「そういう指示を出したそうです、救命ヘリの大きさなら十分可能です」

「校倉、笑美が着いたらガードしろ、生きていると三橋が知れば未だターゲットだから」
「はい」

「片桐警部、笑美は被害者の娘ということにしてください、犯人の娘ではなく」

「そうしましょう、ばかな柳田が何をするか分かりませんから。あ、それから、北方班のこの動きについては私からの指示を待たないでどうぞ。これは佐々木警視からの希望という名の指示です」片桐は笑みを湛え「では、宜しく」と立ち去った。

北方は、自由な判断に任されるということへの重みを意識した。目の前の二人の身の安全とともに三橋笑美の安全も図らなければならない。しかも現場では判断に迷うという選択肢は無い。即断の連続なのだ。

「リキヤ、ミナミ、覚悟はいいな、これからは生と死の境の中でターゲットとともに自分や仲間の命を護ることになる。そういう場なので迷うな、責任は私がとる」

それは北方が自身に言い聞かせた言葉でもあった。

「でもガタさん、ほんとに来ますかね、三橋。これだけ警護されたら目的は果たせませんよ」と澤山が首を傾げた。

「来る。リキヤの言う目的とは何だ」

「もちろん柳田美緒の殺害」

「それもあるが、究極の目的は違う。ミナミは？」

「もしかしたらですけど、殺しに来て殺されたい」

「リキヤ、やっぱり上官はミナミだな、今のところ」北方はそう言うと、笑みを消してから続けた。「三橋が最終的な仕上げにかかっているのは形を変えた無理心中だと思う。妻を殺し娘を殺し自分も死ぬ。彼だけを見ても、いま殺しを止めても、このまま突き進んでも、はたまたま捕まって万一無罪を勝ち取っても、待っているのは死でしかない。経済的な死は彼の場合死そのものなんだ。想いを遂げようとする以外生きている証すらないんだ。だから来る。姿を見せて警官にすぐ射殺されるかもしれない、それでも来る。一切同情はしないが、見えてくるのは究極の哀しさだよ」

二人は緊張の面持ちでうなずいた。

二十分もしないうちにヘリは上空から降りてきた。風を巻き、草木の葉を大きく揺らしながら轟音とともに着陸する。決して余裕たっぷりの空き地が有るわけではない。操縦士が優秀なのだろう。傍で見ている限りはすんなり済ませた感じだった。

二階のバルコニーで柳田夫妻が並んで見ている。無用心極まりないことだった。

「北方さん、柳田に注意してきます、ここは頼みます」と片桐が走り出した。

「何か警護するのが嫌になるタイプの夫婦ですね」澤山が口を尖らせた。

「思ったことを全部口にするな、ここは現場だ」北方がすかさずたしなめた。

「すみません」

降りた笑美に向かって校倉が走った。笑美も小走りに近づく。

抱き合う二人を見て澤山が「まるで仲のいい姉妹みたいだな」と言ってから手で口を塞いだ。また滑ったかと恐る恐る北方を見た。

「別にそういうのは構わないよ、リキヤ」

北方は並んで近づいてくる二人に笑顔を送りながら澤山の肩を叩いた。

へりが離陸した。本来救命目的のへりなので帰還を急ぐのだろう。

「係長、急ぎ戻る高原さんからの伝言です。三橋直子さんは死亡しました。それと岸本から弾薬の入手先を聞き出したそうので捜索をするとのことです。詳細は小田原の本部に伝えたそうです」

「分かった」と北方は沈痛な面持ちでうなずいた。

「笑美さんにも装備着けましょうか」校倉が笑美の肩に手を触れながら訊いた。

「笑美です、いたたまれずに来ました。宜しく願います」と東伊豆町の現場で縛られていた時のワンピース姿のまま辞儀をした。

手足が長く痩身で何を着ても様になる今どきの容姿で小顔、何の情報も無く街中で擦れ違えばとても成人しているとは見えないだろう童顔だった。

フルネームではなく苗字を取った形の挨拶にいまの気持ちが表示されている。北方は柔らかくうなずくと校倉に「拳銃はともかく防弾チョッキは着けてあげて」と命じた。

すると笑美が一瞬だが、拳銃という言葉にピクツと反応をした。

北方は何を感じとったのか目を閉じた。唇が「そうか」と音を出さずに動いた。

場違いな若い女性二人が物々しい警察車両に入るのを眩しそうに見て澤山は、また独白もどきを口にした。「必死に自首を勧めて命だけは助けたいのかな、酷い方法で殺されかけたのに親子だなあ」

「さあ、それはどうかかな？」北方が冷めた口調で応じ、着けていた防弾チョッキを解いた。

サイズが合わなかったのかどうか、澤山はうかつにも深くは考えなかった。

晩春の午後八時ごろはまだ微かに明るい、午後九時ともなると周囲の環境も手伝って庭園灯が頼りになる。もちろん片桐警部は手配よく邸宅の灯りという灯りを点けさせていた。それでも襲う側に立てばチャンス到来なのに違いはない。緊張の中の各所の待機にも緩みが出てくる可能性がある。北方は車両に校倉と笑美を残し、澤山を伴って二度目の見回りに出た。

校倉はホルダーから銃を外し、膝近くのシートの上に置いた。三橋が突然ドアを開けて入ってくる可能性があるからだ。

「それ、あいつが巡査さんから奪い取った銃とは型が違うんですね」

銃など見たくもないはずなのにと、校倉は意外に思った。

「警察官の守備範囲で武器は違うのよ。もしかして銃器って初めてじゃないでしょ？」
「婚約してた彼とアメリカで体験したことがあるわ、なにせ銃社会でしょ」

「そうか、日本はなんだかんだ言ってもまだ安全な国よね」

「でも、バカはどこにでもあります、あいつみたいなの」

笑笑の顔が大きく歪んだ。

「お父さんのこと、前からあいつって言ったの？」

「うん、小学生の頃からかな、何を聞いても答えられなくて何にも知らないくせに、バカの一つ覚えみたいに人生訓もどきを口にするの」

「へえ、どんなの、それ」

「人間、明るく、他人様を信じて誠実に暮らしていれば絶対困らないから。笑えるでしょ、現実の社会は全然違うし、自分のして来たこともして居ることも違う。自分は借金だらけにして、お店潰して、お金返せないからっておどおどして逃げ回って、拳銃の果てに大勢の人を殺して、お母さんまで襲って、私にだけ謝ったって許すわけがないでしょ。しかも私を護るために寝ないで傍に居てくれたお巡りさんを目の前で回し蹴りをして倒して首を折って殺したのよ。大声で罵ってやったわ、ありったけの悪口を言って。どうせ殺しに来たんでしょってにらんでやった。覚悟はできてた、だって、婚約は破棄されたし大学もあと一年なのにいけないし、住むところだって追い出されるに決まってるし、仕事を探したって大勢人を殺した凶悪犯の子どもなんてこの先誰が雇うのよ、わたしの人生なんて二十一でもう終わってるんだから」

言い募りながらポロポロと涙を流す笑笑の顔を見ていた校倉は、ではなぜここに来たのかと思ひ始めた。ただ、自然に笑笑の肩を抱いている自分がいる。それもまた不思議ではあった。

「回し蹴りって何、三橋は空手でもやってたの？」

「小中学校でずつといじめられてたからだって。スポーツじゃなくて実戦用。他人様を信じてって訓戒してて矛盾だらけ、笑わせるわ、バカが」

「そんな父親なのになぜここに来たの、もしかしたら自首を勧めるためかな？」

それが聞いている話なのだが、校倉は確認したくなかった。

「私がやるべきことが残っているって気づいたのよ、それだけ。第一自首して命を助けてもらえる、そんな価値なんてない人間なの、いまのあいつは」

「テレビで管理官が発表した罪の数々、信じてるのね」

「被害者の名前を出さなかったから嘘じゃないって判った。嘘を信じ込ませようとするなら嘘の名前をどんどん出した方が信憑性高くなるのにそうはしないで被害者のプライバシーを護ろうとしている。それに目の前で無表情で人を殺してるし、娘のわたしを爆弾で粉々にしようとしたのよ、もう信じるなという方が無理だわ」

校倉は、既に三橋は容疑者として指名手配をされている以上、自首の必要減輕の成立要件を充たさないことは知っている。ただ笑笑がそれを知らずに投降を勧めるために来たのかと思っただけだ。

「そうね、ごめん。訊かなくてもいいことだったね」

「謝らなくてもいいよ、おねえさんには感謝だけ」

そのとき、少し遠かったが銃声が聞こえた。

「笑笑さん」と校倉が立ち上がった振り返ると、銃を持った笑笑が一步出入り口のドアに向かって下がった。冗談ではないことは吊り上がった真剣な目で確認できた。さすが経験者だ、

安全装置はすぐに外している。

「そういうことなのね」と校倉は静かに言った。

「動かないで！ おねえさんは撃ちたくない、そのまま見ていて」

そのまま見ていて、とは車を出るまでという意味か、それともこれからすることをという意味か。それはともかく校倉は無理やり奪い返すには車内は狭すぎると判断をした。

笑笑は一歩ずつ後退りしてドアに着いた。

「でもそれ、わたしの銃だから。官品なので返さないといけないし」故意に微笑んでみた。狙いは分かったので、落ち着かせたかった。

「一発撃ったら返すから」そう言うと言笑笑は一気にドアを開けて外に飛び出した。

校倉が外に出たときはもうだいたいぶ前を走っている。

「スカートなのに早っ！」校倉は築山に遮られて見えなくなりそうな笑笑を追った。徒競走なら人並み以上だが相手は鬼と化した笑笑だ、追いつくかどうか。父親を自分で殺す。笑笑の覚悟はそれだった。自首を勧める目的かもなどは甘すぎる判断だ。北方と澤山がいま、どこにいるのかも気になった。もしかしたらさつき撃たれたのでは？ そう思うとなおさら必死に走った。丸腰で銃を手にしている親子にどう立ち向かえるというのか。それすら気にしていない校倉だった。

一方、高い方の築山の狙撃手の傍に居た北方は、下を走る笑笑を見つけた。狙いをつけた狙撃手を止め、「別のガイ者の娘だ、撃つな」と言うのと、すぐに下り始めた。

広い邸宅の背後はかなり急な傾斜の丘陵、銃声は邸宅の後ろからだ。建物の角で止まった笑笑が銃を両手で構えて様子を窺っている。校倉が追い付いた。北方も近くに迫った。二人に止められると思ったからか、笑笑は意を決したように建物の裏側に銃を向けて角を跳びだした。まだ銃声はしない。校倉が笑笑を伏せさせようと角から飛び出す。北方がその校倉を庇おうとして角から身を出す。笑笑が真正面に居る三橋に向かって発砲する。三橋が北方に向けて銃弾を放つ。それらの行為がほとんど同時に行われた。

三橋は腹を撃ち抜かれ、北方は左肩に銃弾を受けて転倒した。笑笑は銃をだらりと下げて立ったまま。「ミナミ、銃！」と北方が持っていた銃を校倉に投げ渡す。受け取って三橋に向けた校倉の銃口の先には、撃たれた腹を左手で押さえながらも立ち続け右手に握った銃で発砲しようとする三橋が居た。校倉はためらわずに発砲、三橋も同時に発砲。眉間に穴を開けられて仰向けに倒れたのは三橋だった。片手で発砲すれば反動で銃口が上へ傾き狙いは狂う。三橋が撃った銃弾は幸い誰にも当たらなかった。それを見た笑笑は銃を地面に落とす。校倉は即座に銃を拾うと「ガタさん！」と両手に銃を持ったまま北方の傍にひざまずいた。「大丈夫、肩に当たっただけだ」と北方は少し歪んだ笑みを浮かべた。

校倉が顔を上げると、銃を手にして駆け寄った刑事たちが数人並んでいた。「おい、はやく現状を確認して回れ、所轄署員、救急と鑑識の手配！ 現状保存は鉄則だぞ。生死を確認して死亡していたら一切遺体に触れるな。小田原署員は娘を確保、いや保護！ 本部派遣の二人は殺傷現場に向け投光器の設置！ 管理官にはおおむね状況を確認してから自分が報告する。急げ！」

片桐の声は真っ暗な丘陵の奥にまで届きそうに響いた。

「笑笑さん」と校倉が笑笑の居た方に振り返ると、土の上へへたり込み放心状態になっていた。

「リキヤ、また笑美さんを担いであるのでかい車まで運んで、邸宅の中は駄目よ。気の毒だけど容赦なく手錠をかけて。わたしが失敗してるので二回目は無しにしないと」

心配そうに寄って来た澤山の肩に手を掛けて校倉が頼んだ。

「了解、ガタさんは自分で歩けるって言って少し前に警部と一緒に」

「うん、わたしはもう少しここに居る、この惨状を目に焼き付けたいの」

暗い邸宅の裏側に三つの遺体が転がっている。確認をしている所轄の刑事二人がほとんど同時に、一人居残った校倉に敬礼をした。

敬礼を返してから校倉は、先ず三橋の遺体に近づいた。盗み取った制式銃を握ったままの三橋の死に顔はなぜか笑っているように見えた。暗いせいかもしれない。

次の遺体は所轄の刑事。至近距離から後頭部を撃たれたらしく銃すら手にしていなかった。長時間の見張りで油断が生じたのかもしれない。心をこめて合掌をした。

一番奥の仰向けの遺体も所轄の署員。心臓部に刺さった長い包丁が痛ましい。いわゆる立小便をしていたらしくズボンの前が開いている。邸宅内のトイレを借りる時間も惜しんだのだろう。銃はホルダに収まっていた。合掌をしていると、敬礼をしてくれた署員が傍に来て労いの言葉をくれた。

「鎌倉署内でも評判でしたよ、連続殺人に関する小田原署の活躍、特に北方班の三人のね。お疲れさまでした、うちの署員の死はいささか遺憾ですが、状況を視るに犯人の手口はまるでプロのようですね、スキが出るまでジッと潜んでいたような感じがします。でも、お陰様で三橋の死で連続殺人事件そのものは終わりました」

名も知らぬ署員はそう言うのと校倉の肩をポンと叩いてうなずいた。

校倉は丁寧にお辞儀をした後で、独り想った。まだ終わってはいない。単純無知な三橋菊蔵を巧妙な殺人鬼に変えた男、岸本を裁けていないのだ。しかし北方が入院となれば、この後の岸本に関する捜査は静岡県警に専属するのではないか。北方無しでそれが可能なのか。ただ管理官がいる。あのタカちゃん、佐々木貴仁警視が担当である限りきつとそれを可能にするだろう。そう信じたい自分がいた。タカちゃんには真正面から今回の自分のミスを報告しよう、銃を笑美に取られ、彼女を殺人未遂の容疑者にしてしまったことを。少なくとも現場検証の中で、三橋、北方、笑美、自分の四人が十数秒という短い時間の中で繰り広げた銃撃戦の是非は問われるはずだ。連続殺人の終焉はこの件と岸本の始末が着くまで終わりではないのだ。

北方の許に戻ろうと歩き出した時、建物の二階部分の小窓が開き、投光器が顔を出した。確か県警本部の大型車の隅にあったような気がする。

校倉は明るくなった殺戮の場をもう一度見渡してつぶやいた。「まるで戦場だわ」

署員の胸に刺さった包丁の刃がキラッと光った。

1
2

三橋菊蔵の死亡によって連続殺人事件が一応の終焉を迎えてから一週間が過ぎた日、北方の病室に小田原中央署の大沢署長が見舞に訪れた。北方は、三橋の銃弾で左肩を射抜かれた夜、現場に一番近い大病院に救急搬送され治療を受けたのだが、なかなか熱が下がらない容態で三日ほど過ごした後、現在の小田原市立病院に移った。警察内部の諸々の書類を作成している澤山とヘルプに当たっている校倉が打ち合わせに来やすいようにとの配慮だった。

その二人も昨日書類による報告任務を終えたといつて来てくれた。

「ガタさん、具合の方はどんなですか」と大沢が、ベッドサイドの椅子に腰かけ、「ほう、このクチナシの花は校倉持参ですか」と微笑んだ。

「いえ、澤山です」と北方も小さく笑った。

「なるほど、校倉は男っぽいな。今回も瞠目の至りだった」

「文章力を必要とする書類は校倉がほとんど担当したらしいので、ま、花どころの騒ぎじゃなかったと、私は解釈しますが」

「澤山の花の選び方に皮肉が利いていて、何となく清々しいな」

「皮肉とかそんな芸当はむりでしょう。本当は匂いの強い花はご法度だと思いますが、看護師さんも注意しにくいようですね、彼が慣れない手つきで花瓶に挿しているのを見てましたから。あと、割れやすいガラス製の花瓶にも困惑気味でした。かくいう私もダメだとは言えません、校倉には言えますが彼に行ったら落ち込みますから」

このあと二人はしばらくの間、だまっただままでクチナシの花をジッと見詰めていた。

「ガタさん：」大沢は口火を切ったものの深呼吸をして窓の外を見た。

言い難い何かを大沢は告げに来た。自分が澤山に持たせた退職願を受理しないと言うならそれはないが、受理したということなのだろう。それはほかでもない、北方に責めを負わせたことになるからだ。北方には想定内のことなので、言いやすくしてやろうと直球で言葉にした。

「退職願のこと、承諾して頂けたようですね、ありがとうございます」

「いや、それとは別の話なんだが：職務内容を変えたらどうか、と思つてね、あなたの体のことが心配なんだよ」

「ですから退職させてくださいということなんです、今回の事件と直接関係はありません。このところずっと考えていて、今回は良い機会だなと、それ以上の何ものもないんです」

大沢はこくりとうなずいてから北方の眼をジッと見詰めた。「すべての事情は予測して承知もしています」北方の眼はそう言っていると感じ取った。これは自分の決意も告げよう、部下の誠意に応える上官としての義務だと思った。

「ガタさんはまだ見聞きしていませんが、今回の事件に関する県警本部の公式発表は事実と大分違う。じつは警察庁からも人が来て佐々木君と私が説明役というか、弁明役になったんだ。まあ、査問会と言つてもいい。二人とも事実を詳細に告げた。北方班の初動から銃撃戦に至るまでの言動、捜査は全て署長である私の承諾を得てのこと、また捜査本部が立つてからは管理官が全てを掌握しているの、何ら不都合はないと頑張ったんだが、上は警察の威信をかけてそのままには報道させないと結論付けたんだ。上の態度がうちの署について悪印象を持っていると気づいて探してみると、どうやら安西の奴が内部告発的に我々の捜査方法を文書で批判していたらしい。県警本部なら彼の評価は低いので話は違うんだが、警察庁は真に受けた節があるんだ。少なくともこちらの弁明について

根強い不信感があると感じたよ。処分こそしないが我々に下したのはマイナス評価だ」
続けて署長は詳細を話した。

警察庁幹部の思惑がどこにあるかは報道する際の鉄則と称する命令で明らかだった。

一、連続殺人事件の各々につき詳細に触れる必要を認めない。難事件解決の成果だけを発表すること。残酷さなどで社会不安を助長させるのを防ぐためだ。

二、既に各県警で法的処理が完結している事件については決して触れないこと。検察を含め処理関連機関に混乱を招きかねないからだ。

三、警察官が殺傷された件は事件全体で何人と数だけを発表し、その殉職場所や被害のプロセスなどは公表しないこと。やむを得ない警察側の事情など世間一般には通用しない。警察の威信を損なうだけで意味がない。

この指針に基づき報道機関に発表された内容はこうなった。

老、三橋菊蔵射殺で解決した難事件の数々。なおそれぞれにつき管轄県警が容疑者死亡として書類送検をする。山梨県警では芹澤伸子惨殺事件。神奈川県警では、加納光江殺害事件。静岡県警では坂上董殺害事件、三橋直子傷害致死事件。

式、事件解決の過程で殉死した警察官は三人、重傷者が一人。

参、なお連続殺人事件の指南役とも黒幕とも言うべき容疑者岸本健一は静岡県警が既に逮捕して取り調べ中。以上。

「何ともコメントしがたい公式発表で、北方班の苦労も犠牲も功績も全く出てこない」

この言葉で説明を締めた大沢は深々と頭を下げた。

「署長、やめてくださいよ、対応に困ります。だいいち予想通りじゃないですか。大規模組織が自らとその構成員のプライドや外聞を大事にするのは警察に限ったことじゃありません」

「うん、そう言ってもらえると救われるな。佐々木君と私が、それでは警察は見えても現場の警察官の労苦が何一つ見えてこないと反論するとね、頭のいい連中には敵わない。某警視正が最後の銃撃戦を例にとって攻撃してきた。忸怩たるものがあるが、言い分は真つ当で、北方班には悪いが、まさに言い負けた」

曰く、柳田邸で使用された三丁の銃を考えろ。A銃は犯人三橋が東伊豆で地域巡査を殺して奪ったもの、B銃は犯人の娘笑美が鎌倉の警護現場で刑事課員ではない校倉からかすめ盗ったもの、C銃は犯人との銃撃戦の最中に北方が校倉に投げ渡したものとなるが、B銃で笑美が父親である犯人を撃って負傷させ、犯人にA銃で撃たれた北方がC銃を校倉に渡し彼女が犯人を射殺。しかも眉間に命中させてだ。同時に犯人が発砲したA銃の弾は逸れて誰にも当たらなかった。これをマスコミにあれこれ突っ込まれないで説明するのは不可能だと判断したのだが、佐々木、大沢、君らはこれを不当だと言い切れるのか。

最後に大沢は「私事になるが、来る六月末日をもって私は退官することにした。実際には澤山や校倉の異動要請を速やかに実現した後で期日前に休職に入るが」と締めくくった。

大沢の表情は深刻な言葉とは裏腹に爽やかに見えた。北方はこれも予想していたので静かに受け止めた。おそらく佐々木警視も何か決断しそうな気がする。なぜなら三人とも同じ方向に目標をおいて警察に居たからだ。

「ふたりの異動とは何ですか、初耳なんですが」これは確認しなかった。

「澤山は刑事から地域警察官として交番に戻りたいと。これは不思議でも何でもなかった、もともと私が無理やり刑事課に引き抜いた形だったのでね。校倉は生活安全課に完全な形で戻してほしいと。ガタさんの居ない刑事課には来たくありませんと言ってね。校倉に退職のことは告げていたんですか？」

「いえ、期日他具体的には何も言ってません」

「じゃあ、あの子にはあなたの気持ちが読めるのか。惜しいよなあ、優秀な婦警はどの部署

でも垂涎ものなんだが、とくに校倉は宝物だ」

「でも署長もいなくなるんじゃない、彼女を使いきれませんよ、刑事課後任の上司は」

「おや、珍しいですね、自慢にも聞こえますが」

「私は彼女を使うなんて出来ません、ひたすら助けてもらったということです」

「その姿勢だな、大事なものは。これからどこへ行っても肝に銘じるよ」

「既にどこか決まっているのわけですか？ あ、これは失礼しました」

「いや、決まっているのは私でなくて佐々木だ。ああ、これ内緒ね。決心したみたいなんだよ、前から誘われていたんだそうで、某私大の客員教授としてね。彼は刑事政策を専攻していたからね」

「県警本部としては問題児一掃で万々歳かも。あ、署長、これこそ失礼でした」

二人は同時に笑い出した。

ちょうど病室前を通った看護師が覗き込み、「お静かに！」と言って睨んだ。

二人して首をすくめるしかない失態だった。

校倉と澤山は揃って署長室に呼ばれ、異動も含め二人の希望に添うと告げられた後で、二日間の慰労休暇を認められた。

「ミナミ、誘いに乗ってくれてありがとう、断られると思ってた」

澤山が箱根湯本を過ぎたあたりで助手席の校倉に礼を言った。

「日帰りだし、断る理由なんかないよ、生死を共にした仲間だし、二人ともガタさんの愛弟子だし」と校倉は明るい顔で応えた。

「バカ、自分で愛弟子って言うか、言えるのは当のガタさんだけだ」

「出たか、いつものバカ。いいんだ、小田原駅前からここまでの間黙りこくって息が詰まった、やっといつも感覚になれたわ、何考えてたんだ？ いやらしい」

「泊って温泉に入りたい、部屋の窓を開けて湖の風を受けながら二人してビールかなんか飲んで、バカだのチョンだの悪口言い合って：何だよ、いつもの突っ込みがないなあ」

澤山はここで黙り込んだ。胸が詰まったのだ。

「いいよ、温泉は賛成、立寄り湯でね、その後でちよつとお洒落な和風食堂で食事。車だからアルコールは駄目だけど悪口はまかせろ、たっぶり楽しませてあげる。今日は夜遅くなるかもって親父に言って来たし」最後のほうが涙声になった。

「何だよ、ミナミらしくないな、男勝りのお転婆に涙は似合わない」

「カッコつけんな、バカ。ただ、今日でお別れだと思っただらちよつとおセンチになったんだ、リキヤだけじゃない、ガタさんともタカちゃんともお別れだ。何となく感じるんだけど、大沢署長もどこかへ行っちゃう気がするんだ。そうなると思つて居残りはわたしだけになる」

「何で署長がいなくなるんだよ、警視だよ、幹部だよ。ガタさんの退職は自分も予測してたけど、なにしろ今回の件で左側の手足がどっちも不自由になるわけだから、それに責任感強いからなあ」

「本当の幹部は警視正からだよ、昇任試験で到達できない身分から！ 責任感が強いといえど署長も、あれだけの難事件の解決に努めたのに褒章で報いるどころか、負傷したガタさんに配慮もしない。事実をうやむやにしてきれいごとを並べたあの事件解決の報道、リキヤも見ただしよ、組織の御身大切の姿勢と現場に対する冷淡さ。それを直に見た署長が自分だけ

無傷で高い所に居座るはずがないからよ」校倉は拳を握って力説している自分が気に入っていた。なぜなら自分も密かに警察を去る方向で考え始めているから。

「そこまで気づかなかった。三橋・岸本事件の警察破壊力凄いな、もうバラバラじゃん」
「おどろいた、リキヤの見方、岸本の狙いを言い当てている」

「その岸本のことだけど、逮捕したのも検察に送検するのも静岡県警の高原さんのところだよね、ほんとに良いところ総取りだ。三橋についても岸本についてもガタさんの名前は出てこない。それは無いだろうって言いたいんだけど」

「リキヤ、そんなこと、ガタさん本人は全然気にしてないよ、いつだって功績は他の人にとって行かせている。世間的に言えば損な人柄だけど、わたしは好きだなあ、その姿勢。きつと奥さんもそう想える人だよ、まだお会いしたことないけど」

「そうかもなあ」

澤山は初めて北方に会った時の印象を思い出した。風采のあがらない老けたおじさん、そうと思えなかった未熟過ぎる自分の姿も同時に顧みながら。

「ミナミ、ガタさんが病院から自宅へ戻ってからだけど、二人で訪ねてみないか、お宅に、奥さんにも会えるし」

「よし、グッドなアイデアだ、行こう。ん？　だけどそれって次のデートの予約じゃないの、もしかしたら」

「あ、それもあるか、なるほど」と澤山が笑顔になった。

「こいつめ、いつの間にか高度なテクニクを」

校倉がそう言うやいなや、澤山の髪を右手でくしゃくしゃにした。

後方からクラクションが三回ほど響いてきて、二人は同時に笑い出した。警官二人が乗っている車が非難がましく煽られているのが何とも可笑しかったからだ。

微妙な雰囲気の中の二人の車は箱根宮ノ下に差し掛かっていた。

連続殺人犯三橋菊蔵の死亡から二か月近く経った日の夕方、北方家からの明るい笑い声が表通りにまで響き渡っていた。もちろん会話の内容までは掴めないレベルだが、楽しそうな雰囲気だけは通行人にまで伝わるに違いない。校倉南と澤山力也が揃って訪ねてきているのだ。いやそれだけではない、北方家の長女波留も下宿先から息抜きと称して帰って来ていた。「ええっ、波留さんも警察官志望ってほんとですか」なぜか挨拶はとっくに済んでいるのに硬い顔で正座をしたまま固まっていた澤山が素っ頓狂な声で言った。

校倉はその意味を察したようで頬を緩めた。波留が澤山の席の真ん前に居る。どうやら好みのタイプらしく初対面で電撃的にハートを掴まれたらしい。そうならそれで少し気が楽になる。あとで北方に報告するつもりでいる佐々木貴仁との婚約についても気兼ねが要らなくなる。澤山とは何があったわけでもないが自分に恋心を抱いてくれることは感じていて報告するタイミングを図っていたのだ。

「はい、おしとやかに座ってお勤めするタイプじゃないので。一番大きいのは父さんの影響かな、じつは他の進路考えたことないんだ、わたし」

「そのようね、お転婆で大学に入るやいなや空手部だし」と母親の百恵がわざとらしく掌で口を覆って笑った。

「まさか実戦空手とか？」と澤山がのけぞるようにして訊いた。

「まだ形が中心だけどいずれそっちに進むつもり。だって怖いじゃないですか、この頃の犯罪、動機すらない通り魔的な事件多いし、少しは護身術必要よね。そうそう南さんは柔剣道の腕凄いですってね、狙撃だけじゃなく」

「ガタさん、波留さんに何言ったんですか、わたし男並みの猛者じゃないですよ」

「いや、ミナミ以上の猛者は刑事課を含めても指で数える程度しか署にはいないぞ」

北方の頬は緩みっぱなしでぐい呑みをしきりに手にしている。

「親としてはやっぱり早くいい人見つけてさ」

「おっと、それは口にするな」と北方が妻を制した。話題がこの日俎上に載せていいか微妙な南の結婚に飛び火するのを恐れたのだった。

「ご配慮はいりません、わたしならお嫁に行けそうですから」と校倉がうなずいた。相変わらず勘が鋭い。

北方は、澤山の気持ち慮って一瞬目を瞑った。その相手が澤山ではないと実はすでに知っていたのだ。情報源は大沢署長だった。私立泰斗大学法学部の教官に転職した佐々木貴仁本人から連絡を受けたという。しかし北方は二人の名誉のためにもまだ何も知らないことにしておこうと決めた。

「澤山さん、もう楽にしてください、見ているわたしの脚もしびれそう」

窮屈そうな姿を見かねたのだろう、波留が笑顔で気遣った。

「リキヤ、フツーでいいの、その方が君らしくてもてると思う」

「あらあらいいわね、澤山さん、両手に花って感じで」百恵まで加わった。

顔を紅潮させてゆっくりと胡坐をかいた澤山が指先でしきりに頭を搔く。

「あ、そうだ、波留。悪いが一升買ってきてくれ。ほら祝い事があると飲むことにしているアレだ」一座の暫しの沈黙の後で北方が波留ではなく百恵の顔を見ながら言った。「まだお酒いっぱいあるわよ」などと止められると困るからだ。

「銘酒、心つなぎね、わかった」波留は返事が早い。

「うん、頼む。あそこはツمامも売ってるから好みで買っておいで」

「はい。ツケだったね、いつも」

「ああ。しかしもう暗い夜道に近いなあ」

「ガタさん、僕と一緒に」澤山が間髪を入れずに右手を上げた。

波留と澤山が連れ立って出かけた後、校倉が流していた足を神妙な顔で正座に戻した。「ガタさん、わたし幼馴染のタカちゃん、佐々木貴仁さんと結婚することになりました。挙式の日程はまだ決まっていますが、結婚後父の暮しをどうするかも彼が父の所へ来て話を詰めました。彼によるとご両親とも亡くなっていて、いまはうちの父を自分の親だと思っているそうです。因みに父は大喜びでした、自分の存在が娘の婚期を遅らせていると常々憂えているようでしたから。ということ、謹んでご報告いたします」

校倉が佐々木との結婚にためらっていた主な理由はキャリア警察官の妻になる自信がなかったことと自分が都会に嫁げば片麻痺の父親を距離的にも突き放すことになるからだ。柔道の師にあたる父に「お父さんが僕らの近くに移れば問題は解決しますよ」と目を見張る単純さで迫った佐々木の極め台詞は「三棘みの状態は一人が動けば難なく解けるんです、お父さん」だった。具体的には同居しましょう、それが無理なら近くに住んでくださいという話だ。つまり校倉のハードルは二ついっぺんに無くなったことになる。

「そうか、貴仁がミナミを伴侶にと強く望んでいたことは知っていたよ、大沢と三人で呑んだ時に話が出たから。おめでとう、心から祝福したい」

「わたしもお祝い申し上げます。あなたのことは主人からよく聞かされていました。文武両道で眉目秀麗、三国一の花嫁さんになりますね、きつと」

「おいおい百恵、いつの時代の褒め方だよ、古すぎる」

「ですね、堅苦しい言葉はここまでにして、くだけた調子に戻しましょう」

三人三様に真四角な姿勢を崩して微笑んだ。

「リキヤにも配慮してくださいさったんですか、さっき」

「いや、うん、まあな」

「大丈夫、もう波留さんに一目惚れしてますから」

「そう言われてみればたしかにあいつ、変だったな」と笑いながら酒を口に含んだ。

「あちら、それは嬉しい」

百恵も相変わず前向きな反応を見せた。

「そういえばリキヤのプライバシーな部分、ほとんど知らないな、ミナミ」

「はい、そうですね、聞く必要もなかったし」

「いいところのお坊ちゃんらしいということは大沢から聞いているが、それだけだ」

「あら、そんなじゃ家柄的のうちの子じゃ釣り合わないわねえ」

百恵が大真面目な調子で言うと、肩を落とした。

「あろう」

校倉がおでこを指先で搔きながら口ごもると、北方と百恵が同時に視線を校倉の顔に向けた。

「もうそこまで話、いっちゃいますか？」

「確かに。これは技あり、いや、一本とられた」

三人が同時に笑い出した。

笑いが鎮まると校倉が唐突に北方に訊いた。

「ガタさんのところにも検察側から証人にとの要請来ましたか？」

「無い。ミナミ、それは事件を矮小化したい警察と検察としては出来ない相談なんだ」

「やっぱり。わたしには静岡から来ましたでしたが、公判で検察側に訊かれたのは弁護士殺害事件と笑笑さんへの殺人未遂に関することだけでした。ガタさんが解いてみせた三県に跨る三橋の復讐と岸本の陰謀に広げることには避けたみたいです」

大沢から聞かされた警察庁の事件收拾の基本方針に沿った展開で驚くにはあたらな。北方は苦笑いをした。

「岸本の弁護人の反対尋問はあったか？」

「はい、二つの事件にしっかり絞ってましたね」

「やはり検察は妻の直子殺しは起訴する対象から外したか」

「立証に苦しんだんでしょうね。その代わり、二件とも教唆ではなく共同正犯として起訴しています」

「三橋と岸本が絡むすべての事件を一括して審理しないと動機の説明は無理だよ」

「でも、それだと笑笑さんに対する殺人未遂も同じですよ」

「ああ、検察はどうする気なんだろうね。ところでまだ結審していないよな」

「はい、笑笑さんの事件では爆発物取締罰則も絡んでいて、既に逮捕されている紹介者や爆弾の密輸入犯をはじめ証人尋問も多いみたいですし、集中審理ですからそれでも速い方なかなあ、証拠調べなんかは三者で行う公判前整理手続でとくに済んでるし」

「笑笑は現場で岸本の姿を見ているのかな？ この点はまだ明確にしていなかったが」

「確かに：私も聞いたことがありますけど」

「はい。でも絶対法廷では語りませんよ、そんな気がします」

実は北方も同様に分析していた。早々に口にすれば父親の罪の重さを軽減したいがための作り話と捉えられる恐れがある。とにかく常識人には想像もできない犯罪動機なのだ。父親の罪の重大さを知り心底それを憎悪した笑笑にはそれは耐えがたいことだろう。しかし岸本を三橋同様に憎み裁くにはどこかで事実を語らねばならない。入手自体を爆発物取締罰則で裁くのは物証、人証共に揃っていて容易だが笑笑の殺人未遂そのものに関してには岸本の関与に付き現在のところ状況証拠に頼っている検察が法廷で苦戦し、切り札として求めてくるのを笑笑は待っている。おそらく校倉もそう確信しているのだろう。

「その場に拳銃があれば法廷でも岸本を撃ち殺す。そんな感じの子だからな」

「ええ。もし笑笑さんの立場だったらわたしも躊躇せずに発砲します」

北方は鎌倉での校倉の発砲を思い出し、声にして笑ったが、百恵はのけぞるようにして目を丸くした。

「ミナミ、リキヤが戻る前に聞いておこう、岸本の公判における切り札は何だと思う」

「でましたね、口頭試問」

「ああ、警察官校倉南に対する卒業試験だ」と楽しそうにぐい呑みを干した。

「あなた、失礼ですよ」と真面目な顔で睨む百恵。

「分かっているよ、もうこの子たちの時代だ。それが解かるから去ると決めたんだ」

暗い言葉にならないように半ば笑顔で百恵に応えた。

「彼の国選弁護人が要請を渋っているだけで既に岸本は弁護人に伝えていると思うのですが、裁判所に対して元警部補北方良道に対する証人喚問を求めます」

「自分が関わった犯罪の範囲、つまり傷口を自ら広げる恐れがあるぞ」

「彼の目的は警察への報復、挑戦でしたよね、自分たちの組織防衛のために起訴内容を曲げていじくる警察、これに連なる検察の実態を公にすることが彼の仕上げですから」

「検察は公判廷でも広がり避けて俺に尋問するぞ、弁護人も結果的に被告人に不利益になるので同様だと思うが、違うか」

「その通りだと思いますが、被告人も自分自身で証人を尋問することが出来ます。岸本は公判で、マスコミも注目する中で、自らガタさんに戦いを挑むつもりでいる。これが切り札、そう思います」

「ミナミ、コップでどうだ」と徳利を手にした。

「と、言うことは合格ですか？」と受ける校倉の顔が一瞬輝いた。

「ああ、この有能な婦警を失うのは実に惜しい。まあ、辞表を出しても一審の公判が終わるまで受理してもらえない大沢も遠くない時期に退職するんだからまあいいか」

「それで形だけの署長として在職させているわけですか。実際はもう別の警視が赴任してきて差配していますものね、副署長の肩書で。姑息ですね、相変わらず」

「それよりミナミ、いつそのこと、再度法曹をめざしたらどうだ」

「え？」と目を丸くした後で校倉はコップ酒を一気に飲み干して、「驚いた、ガタさん、いまの言葉、直接プロポーズしてくれたときのタカちゃんとそっくり同じなの」

「へーえ、素敵ねえ、彼氏」百恵が先ず応じた。

「と、いうことは……」と北方は校倉の顔を笑顔で覗き込んだ。

「はい、来春タカちゃんの居る私立泰斗大学、大学院に入る予定です、ちよっと歳がいつてる院生になります」

このとき玄関の引き戸が開く音がした。

「帰って来たわ」と百恵が立ち上がった。

「今度はわたしから尋問。公判で岸本被告人に詰め寄られても今回の警察、検察が矮小化した事件像というか公訴事実の枠を死守するつもりですか、ガタさん」

「なるほど、これは手厳しい。回答を急ごう、俺はもう一般人だよ、嘘の中に居続ける必要はこれっぽっちもない」

「思った通りの先生でした。失礼しました」

「それにしてもキツイ尋問だったな、本音を言えば参った。もしそうならば裁判内容が根底からひっくり返る」

二人は同時に笑った。

「何盛り上がってるんですか、ずるいですよ」

澤山が一升瓶を高く掲げて口を尖らせた。そのTシャツの裾を引っ張って波留が言った。「リキヤ、かあさんが冷でいいのか、お爛するの聞いてるよ」

親し気な様子に北方と校倉は顔を見合せて肩をすぼめ、柔らかに微笑んだ。

「お前が助け出した三橋笑美が検察側の証人として立つときは一緒に傍聴しようという話だよ、リキヤも当然参加するだろ」

「へーえ、彼女証言するんですか、もちろん行きます」

「父さん、わたしも行きたい。警察官志望者として就活の一環だわ、いいでしょ？」

「ああ、波留と同世代の娘を襲った不幸な事件を現実のものとして見聞するのは決して無駄ではないな。もし一般の傍聴が制限されたとしても我々は関係者として許される可能性がある。とりあえず検察に囁いてもらえるよう大沢には予め伝えておくよ」

北方は笑美の証言如何で元警察官としての自分の良心と再び向き合おうとしていた。万一のときは在廷の証人として用いられる可能性が無くはない。

澤山と波留が戻って以後、事件の話は皆無になり、酒も進み校倉と佐々木の結婚話で大いに盛り上がった。

結果終電時刻も過ぎ、車の運転も当然駄目で、男二人と女三人で二部屋に別れ雑魚寝となった。当然布団は足りず、エアコンの力を借りて夏掛け布団にタオルケット、果ては冬場の半纏まで動員して一夜を凌いだ。

最後に両方の部屋を見て無事を確認した百恵は、それぞれの寝相の悪さに口を覆って笑った。

問題の公判当日、三橋笑美は背筋を伸ばし裁判官席に向かって凜とした姿で証言台に立っていた。傍聴席の最前に陣取っているとはいえ、さすがに背後からは表情を窺えないが、お

そらく戦いを挑むような眼をしているに違いない。北方はそう思った。

型どおり人定質問に応え宣誓を済ませた笑美に検察官は、事件の全貌を全く知らないかのように笑美爆殺未遂に矮小化して尋問を始めた。北方には苦し紛れであることが痛いほどわかる。彼ら検察官も上の方針にきっちり縛り付けられているはずだから。見るからに若くそれほど公判の経験があるとは思えない検察官が主役らしいが、この事件は簡単に片づけたという思惑が透けて見えた。

「警察官に救出された経緯は現場に居た前回公判の警部補の証言で分かりましたが、あなたの手足を縛り睡眠薬を飲ませたのは誰で、それは前の日の何時ごろでしたか？」

事前に打ち合わせと言うか証言内容についての制約があったことをうかがわせるここまでの流れ。北方は早々とため息をついた。

「三橋菊蔵というバカで、わたしの父親です。正確な時間は分かりませんが二十二時頃だと思います、わたしを警護してくれていた巡査を目の前で蹴り倒して殺し、拳銃を奪ったあとでしたから」

「確かに殉職警察官の死亡推定時刻に合致しますね。それで奪ってすぐということですか」「いえ、わたしに銃を向けて三十分ぐらいかな、わたしが訊いた訳でもないのに自分の犯した空恐ろしい多くの犯罪についてさんざん自己弁護をして、もう何もかもだめだから一緒に死のうと迫られました」

「証人は質問されたことにまっすぐ答えるだけでいいですよ。そうすると部屋に時計があったということですか」

ここの証言は三橋がほとんどすべての殺傷事件について語った内容に攻め込み、その裏に潜む岸本の関与とその動機にせめ込むチャンスなのにと、北方はあからさまに天井を仰いだ。予想通り検察は気づかぬふりをしてスルーを決め込んでいる。

「いえ、ありません」

これも校倉への尋問と証言に絡む。隣に座っている校倉もうなずいた。床の間に柱時計、その中に時限爆弾。予め細工をしておいて持ち込んだ証拠だ。誰が用意したのか。直接設置したのは誰か。それがすぐ確認されるべきではないのか。北方はそう思った。

「求められた心中は断ったわけですね」

「当たり前です、もう親でも父でもなく、ただバカな獣でしかない老人と心中なんて論外です、その場で徹底的に罵ってやりました、母も襲ったというので顔に唾してやりました。その後です、縛られたのは」

「さっきも言いましたが質問には簡潔に、平たく言えばイエス、ノー程度で真っ直ぐに答えるだけにしてください。では、核心に触れます。いま証言した流れの中に被告人は居ましたか」

検察は証人の母親岸本直子傷害致死事件については起訴していないのでこれに関する証言もスルーしたいらしい。しかし北方も、事件を起訴するかしないかについての権限は検察にあることを知っている。北方がここで問いたいのは権限の有無ではなく不起訴にした不純な動機だ。

「ここまでなら現場に居る被告人岸本の存在は掴めていません」

「姿も見えないし声も聞いていない？」

「はい、銃を胸に当てられ口に睡眠薬を無理やり押し込んで飲み込むようと何回も迫られた

後です、岸本が出て来たのは」

「廷内が少しざわついた。」

左隣にいる校倉が身を固くして傍聴しているのが伝わってくる。北方は、その真摯さになぜか救われるような気がした。

「出て来たという事は被告人の姿を見たということですか」

「いえ、隣の部屋で三橋菊蔵と話している声だけです」

「声だけで被告人だと判るんですか」

「はい、文芸誌の同人ということで五、六回は菊蔵を訪ねてきてうちの部屋の中で話し込んでいた過去がありますから。睡眠薬でわたしが眠ったと思ったのか口論に近い大声でしたし。薬が効いてきて私が意識を失ったのはそれから後のことです」

「解りました。そこまで言うなら聞いたという二人の会話の内容を教えてください」

笑笑はここで、三橋が目の前に居る娘を自分の手で直接殺すことはさすがにできないことを告げると、岸本がそんなことだろうと思って用意してきたと爆弾の威力を口にし、時限にすればわたしが寝ている間に設置してすぐに現場を離れ次の目標に向かえるメリットはあるし、わたしを苦しめずに殺せると説いていたことを証言した。つまりこの段階で岸本は、連続殺人の片割れとしてではなく爆発物取締罰則違反と三橋笑笑殺人未遂の罪で単独に正犯として立証されたことになる。しかし言ってみれば、岸本について裁けるのはこの事件だけだ。大沢署長によれば、坂上董の事件では邸宅内に彼の指紋はあったが遺体横のカップには無かった。さらに同人誌『碧海波』に残っていた彼の指紋は皮肉なことに邸内のどこに指紋があっても同人間の通常の交際の結果であるという弁護側の主張を裏付けてしまった。三橋と岸本の内面に迫らない以上、岸本には動機すら見当たらないことになる。事実公判では検察はお手上げだろう。もちろん坂上弁護士的事件に関しては、直接的な証拠も無く状況証拠も弱く無理をして起訴した検察としては百も承知で、証拠不十分で裁かれても万々歳に違いない、一連の事件全体を矮小化したいのだから。

「被告人はただ爆弾とだけ言ったのですか」

これはいい質問だと思った。捜査陣は笑笑に爆弾の種類について告げてはいない。したがって結果次第では証言内容全体の信憑性が高くなる。

「プラスチック爆弾と聞こえました。え？ プラスチックが爆発するのと疑問に思ったのはつきり憶えています」

プラスチックが爆発するのではなくプラスチックが混ざっているという訳でもない。火薬とゴムを煉ったもので変形可能、形状というか見た目がプラスチックに似ているために付いた言わばニックネームだ。生活安全課の校倉は以前、組織暴力団の下部組織が絡む風俗営業のいざこざで耳にして調べたことがある。「決まったね」という意味で校倉は肘でチョンと北方の脇を突いた。北方が前を向いたままうなずいた。

検察の尋問は続いたものの三橋家の家族の崩壊、特に婚約が破棄されたことで笑笑が怒り家出をした経緯という内容がほとんどだった。あたかも父と娘の心の軋轢が事件の主原因であるかのように。答えている笑笑がイライラしているのが口調で分かる。

「当日捜査陣は爆破する直前に現場に踏み込み時限装置付きのプラスチック爆弾と確認しています、この事は今日まで証人に伝えていません」

これでいいとも言えるが校倉は小さく首を振った。証人の証明力を確かなものとしたやり

とりだが、証言を簡潔に整理してここで少なくとも本件では岸本が幫助犯ではなく教唆犯でもなく明らかに共同正犯であること、また爆発物の入手、使用が他人を殺傷する目的であったことを、裁判官三人、裁判員六人のみならずマスコミなども含め公判廷内全体に念押しすべきだと思ったのだ。

しかし検察官は「以上で終わります」と主尋問を打ち切ってしまった。

「弁護士、反対尋問をどうぞ」

三人の判事の中央に居る女性の裁判長が事務的な軽さで言った。

開廷する前に今日の傍聴メンバー四人全員で会った大沢署長によれば、岸本の国選弁護人として受けてくれたのはいま目の前に立っている三十歳の女性一人だったという。よりによって女憎しで固まっている岸本に女性とは皮肉だが、本件は言うまでもなく必要的弁護事件なので岸本は止む無く選任を認めたらしい。弁護士の名前は根本暁、名の読みは「あきら」、凝ったキラキラネームだ。ただ字面だけだと男女どちらなのかは分かりにくい。認めた遠因かも知れない。

「証人は、法務官僚しかも局長の現夫人を殺害する目的で鎌倉の邸に近づき夫人警護の警察官二人を惨殺した男、つまり実の父親の三橋菊蔵をその現場で銃撃しました、しかもその拳銃は本日この法廷の傍聴席に居る校倉警部補から掠め取ったもの。ここまで間違いありませんよね」

「裁判長、異議あり」検察官が立ち上がるやいなや叫んだ。

「異議を認めます」意義の内容すら聞かないで裁判長は応じた。

「質問を替えます」涼しい顔で根本女史はスツと顎を撫ぜた。

童顔に眼鏡という容貌はともかく長身で膝上十センチ超のミニスカート姿は尋問の仕方とともに大胆だ。校倉は、公判でしかも名指しでミスを暴露されにも拘わらず面白くなってきたと、沸き上がる昂奮を抑えきれなかった。

「連続殺人犯の父親を娘であるあなたが他に先んじて自ら撃ったんですよね」

「ええ、それが何か？」

「裁判長、異議を申し立てます！」検察官が立ち上がって抗議をした。

「なぜ致命傷にならないところ、腹部を狙ったんですか、実はまだ父親への愛情が残っていた、違いますか？」なおも続ける弁護士の声に、「尋問の趣旨、目的が不明です」という検察官の声が重なった。

「わたしは狙撃のプロじゃない、殺し損ねただけです」

「弁護士、何を目的とする尋問ですか、説明を求めます」と裁判長。冷めている。

被告席の岸本が声を出さずに笑った。

「証人の父親と被告人の話聞いたという先ほどの証言の信憑性が疑われます。つまり先ほどの証人の供述の証明力を争うためです。検察官、相手の尋問は落ち着いて聞くものです、下心丸見えですよ」

「異議を却下します、続けてください」

「はい。既に犯行現場で死亡しているとはいえ、父親菊蔵の罪の重さを少しでも軽くしようという娘の、証人の気持ち、本件弁護士でなかったわたしもその健気さに泣いたかもしれませんが、ここは法廷です。証人、創り話は撤回してください。睡眠薬をしこたま飲まされた後で隣室の会話などを聞けるわけがない」

「そう思ったんでしょね、被告人も菊蔵も。すぐ意識を失わせ眠らせるには薬が不足していたんでしょ、少なくとも三橋菊蔵は総じてバカですから。彼が犯した金銭的不始末と凶悪な犯罪のせいで婚約は破棄され、母親は殺され、大学も退学、賃借住居は追い出され、今後は就職すら不可能です。わたしは二十一歳で人生が終わったに等しい。ここまでわたしを追い詰めた人間を親だからと誰が庇ったりするのですか！」

「だとすると変ですね、隣室での二人の会話については警察官にも検察官にも供述していないでしょう、真実なら被告人を有罪にする画期的な証拠のはずなのに。嘘じゃないんですか、偽証。あなたはさっき宣誓した証人なんですよ」

「良心に従って真実のみを述べ何事も隠さず偽りを述べない、誓ったから真つ当に答えてる、さっき宣誓させておいて聞く耳持たないってわけですか、自分たちの望み通りの答えが無いと嘘だの偽証だの言い出して素人を脅す。警察も検察も同じですが信じられないなら証人にするな、証人に訊くな！ くだらない」

笑笑の口調が激しくなり丁寧語が消えた。我慢が限度を超えたのだろう。尋問する側の方針自体がご都合主義で結論ありき、要するに茶番なのだ。北方はそう思った。

校倉も笑笑と同様主尋問からずっとイライラしていた。公判前整理手続きで裁判官、検察官、弁護人の証拠やその扱いについての打ち合わせは済んでいる。その枠組みはよほどのことが無いかぎり守られると聞く。裁判のスピードは上がるが真実は犠牲になりがちだ。換言すれば生産性重視の裁判。おそらく期待した北方良道元警部補への証人喚問も無いだろう。笑笑のキツイ一発は抑え込まれるに違いないと思った。

「裁判長、今の発言は許せません、証人に注意を！」
弁護人の抗議は予想がつくが検察側も声を上げた。「証人、取消なさい、法廷侮辱罪になりますよ」

この時だ、被告人岸本健一が声に出して笑い始めた。それも可笑しくて涙でも出しそうなレベルで身を振っている。

「被告人、静かに！」と笑笑より先に岸本を注意することになった裁判長。

笑笑が「裁判長！ 岸本に言いたい」と声を上げるやいなや証言席を離れ被告人席に近づいた。その前を両手で塞ぎ止めようとする根本弁護人をはねのけ、何事かというように驚いている岸本の頬を勢いよく打った。大きく仰け反る岸本。裁判員席と傍聴席が同時にざわついた。

「廷吏！ 証人を拘束して退廷させなさい！ 被告人も同様！」

その声が終わる前に、廷吏が二人、笑笑の両脇を固めていた。笑笑が証言席を離れた段階で行動を起こしていたのだ。その一人が岸本拘束に回る。

「岸本！ バカな親父を使って大勢の人を殺させたお前が何で偉そうにしてんだ、悪魔、クズ野郎！ 恥を知れ！」

笑笑の声が遠ざかって法廷外に消えた。

「閉廷します。弁護人、検察官、別室に来なさい」立った裁判長の声が震えていた。

北方が隣の校倉に耳打ちをした。内緒話ではない、廷内が騒然としていたからだ。「ミニミ、頼めるか」

「はい。大沢署長にも同行してもらいます」

「それがいい。ほら大沢も立って出口に向かいそうだ、同じ気持ちだろう」

「法廷にハジキがあったらいいのにね」校倉が真面目な顔で言って席を立った。北方は笑う代わりに校倉の背をポンと突いた。

澤山と波留が北方の顔を覗き込んで同時に「この裁判」と言った。

「とりあえず今日の公判は終わる。出よう、出口付近でミナミを待とう」

「場所、連絡しないと」と波留が沈んだ顔を作った。傍聴がシヨックだったらしい。

「ミナミからスマホで連絡超越すさ」

「ガタさん、勉強になりました」

「俺は疲れた、馬鹿馬鹿しくて」

波留が「ほんとに」と言い、「落ち込むなよ、警官」と澤山の肩をポンと叩いた。

「ハル、ナマ言うのは何年か早いぜ」

澤山が出口の扉近くで波留のおでこを突いた。

北方は二人のやり取りを笑ってやる気力も失せていた。おそらく岸本が裁かれ有罪になるのは笑美の事件だけだ。これが刑事裁判、いやさ司法か。虚しかった。

澤山も腹立たしそうに、「酷い法廷でしたね、ガタさん。刑事裁判で、こんなもんなんですか、法曹たちもみんなバカみたいじゃないですか」と北方の顔を直視した。

すでに傍聴席は空になっていて後ろには誰も居ない。

「俺もバカ、同罪だよ、結局：何もできなかった」

十五分ほど経ったころ、三人は裁判所の前に居たが、澤山のスマホに校倉から連絡が入った。

「ガタさんに代わってくれて。ミナミです」

北方は腕組みを解いてスマホを受け取った。

「ご苦労さん、どうなった？」

「大沢署長がかけあってくれて、笑美さんをご自宅に引き取るようになりました」

校倉の声は落ち着いていた。

「ああ、それが一番だな、良かった」

「わたしは今晚だけですが一緒に泊まることになりました」

「そうか、ミナミの配慮だろ？　ありがとう」

「ですから今から別行動になります。明日署長宅を出たらガタさん宅に立寄りします。いいですか？」

「もちろん、結果をゆっくり聞かせてくれ、大沢に宜しくな」

「はい。そういうことで、失礼します」

北方はうなずきながらスマホを返した。

「父さん」と波留が北方の前に回って言った。「わたし、うちから大学に通う。通学に時間とられるから空手部も退部、父さんから刑事警察というか、心得とかいろいろ教わりたい」

「そうか、俺は最初からうちから通えと言ってたし賛成だ」

「母さんが看護師のパート始めたしね、わたしが傍に居れば心強いでしょ？」

「ナマイキ言うな、こっちで彼氏見つけたいだけだろ」

「それはないって」

「え？　ないの、波留さん」澤山が甲高い声を発した。

「バカ、もう見つけたってことじゃないの」

波留が照れ笑いをして澤山の靴を軽く蹴った。

若い二人を見て笑いながら北方は、もう一度心の中を覗き見た。本当に「何も出来なかった」のかどうか、本当は捜査段階のあちこちで必要を感じながら「何もしなかった」のではないか。組織の掟に負けたのではなく、自分自身に負けたのではないか。少なくともいまは、そう思えてならないと。

「ガタさん、生きましよう、送ります」

気がつくと澤山が波留の手を引きながら前に歩き出していた。彼の車はすぐ近くにあるというのに。北方はこのとき校倉の言葉を思い出した。「笑美さんをご自宅に引き取ることに」というその意味が、大沢が笑美を養子にするという驚異的な意味だと素晴らしいのだが。彼の家だから、いや彼ならそれが出来る。

北方は自分の妄想の中に一縷の望みを託そうとしていた。

完